

新編

一名通俗源氏物語

卷六



新編紫史卷六

松風閣主人譯

第三十四帖 若菜上

此帖は源氏
四十歳の春
より四十一
歳の三月に
至る

朱雀院欲
出家

朱雀院の帝、六條院へ行幸の後、其頃より例ならず惱み渡らせ給ふ、元より篤病しくおはします中に、此度は物心細く思召されて、年來も御出家の本意深きを、皇太后宮弘徽殿のおはしましつる間は、萬事遠慮り申させ給ひて、今まで思し滞りつるを、今は皇太后宮も崩御ましくければ、

(朱) 尙出家の方に催さるゝにやあらむ、世に久しく存生ふまじき心地ぞする、

など宣はせて、御出家の御用意ども爲させ給ふ、皇子達は、春

○若菜上

朱雀院鍾
愛女三宮

宮を除き奉りては、皇女達ぞ四所おはしましける、その中にも、
 三宮の御母、藤壺と申し、は、先帝の季の皇女、薄雲、女院の御
 妹にて、源氏宮と申しけるが、朱雀院、また春宮にておはせし
 時、入内り給ひて、皇后にも定まり給ふべかりし御身の、取立
 たる御後見もおはせず、御腹は先帝の更衣にて、家系もなくも
 のし給ひければ、御交際の程も、心細げにて、弘徽殿、太后の御
 妹、朧月夜尙侍を進らせ奉りて後は、傍に並ぶ人なく待遇し給
 ひなどせし程に、藤壺源氏宮は、尙侍に壓倒れて、帝朱雀院も御心
 の中には、氣の毒なるものに思ひ申させ給ひながら、間もなく
 脱履させ給ひにしかば、かひなく口惜しくて、藤壺は、世中を
 恨みたるやうにて逝去たまひにし、その御腹の女、三宮を、數
 多の皇女の御中にも、勝れて慈愛しきものに思ひ傳き申し給ふ、

この女三宮は、其頃御年十三四ばかりにおはす、朱雀院、今はと
 世を背き棄て、山籠りしなむ後の世に、此宮の、跡に立ち留りて、
 誰を頼む蔭にてもなし給はむとすらむ、と唯この御事を、後め
 たく氣懸りに思し歎く、さて西山なる御寺造り果て、院は、
 こゝに移ろはせ給はむ間の、御用意をせさせ給ふに添へて、ま
 たこの宮の、御裳着のことを、思し急がせ給ふ、かくて院の内
 に、貴く大切に思す御寶物、御調度どもをば、言ふも更なり、果
 敢なき御翫弄物まで、少し由緒ある限りをば、唯この女三宮の
 御方に、と渡し奉らせ給ひて、その次々の御品をぞ、他の皇女
 達には、御處分などありける、今の春宮は、院朱雀院のかゝる御惱
 に添へて、世を背かせ給ふべき御心遣ひにぞおはします、と聞
 かせ給ひて、院の御方へ渡らせ給へり、御母承香殿、女御も、春

宮に添そひ申し給ひて、参まゐり給へり、さて院は、勝すぐれたる御威勢おんおほえにしもあらざりしがど、春宮の、かくておはします御宿因おんすぐせの、限かぎりなくめでたければ、年とし來の御物語おんものがたり、委細こまやかに、女御に申し交かはさせ給ひけり、また春宮にも、萬よろづの事、世よを保たもち給はむ御心遣おんこころづかひなど、申し諭さとし給ふ、春宮は御年齢おんとしの程ほどよりは、いと能よく大人おとなびさせ給ひて、御後見おんうしろみども、明石あかし、中宮ちゆうぐうを始めとして、此方こなた彼かな方た、輕々かるぐしからぬ御間柄おんまがらひにもし給へば、いと後安うしろやすく思おもひ申まさせ給ふ、さて春宮に、

さらぬ別○
伊勢物語に
老いぬれば
さらぬ別の
ありといへ
ばいよく

(朱) 今いまは此世このよに、恨遺うらみのこることも候さからはず、皇女達みこたちの、數多あまた殘のこり留とまる行先ゆくまゝを思おもひ遣やるぞ、さらぬ別わかれにも羈絆ほだしなりぬべかりける、前々まぎくひと他人たにの身上みづかみに見聞みきしにも、女をんなといふものは、心こころより外ほかに輕々あはしく、人ひとに貶おとしめらるゝ宿因すぐせあるぞ、いと口惜くちをしく

見まくほし
き君かなと
あり

悲かなしき、其方そなた御位みくらみに即つき給ひて、思おもふやうならむ御世みよには、何いづれをも様々さまざまにつけて、御心留みこゝろとどめて思おもひ尋たづねてよ、其中そのうちにも、後うしろ見みなどある皇女達みこたちは、然さる後見うしろみの方かたにも思おもひ譲ゆづり給へ、唯ただ三さん宮みやぞ、一いち宮みや、二に宮みや、四し宮みやどもとは、別腹ことばらにて、幼ちひさき齡いより、孤みなしとなりて、只ただ我われ一人ひとりを、頼たのもしきものとして馴なれ來きたれば、今いま我われ出家しゆつして、打棄うちすて、む後の世のちのよに、此宮このみやの零落さすらへむこと、いと後うしろめたく、氣きに懸かりて悲かなしく候まふ、と、御目推拭おんめおしのとひつゝ、申し諭さとし給ふ、女御おんなみにも、繼子まごとて隔へだて給はで、養育ばいくみ給はれ、と心慈こころあつくしき様に、申し告つげさせ給ふ、然されど三宮さんみやの母女はは御藤壺みふぢの、他人たによりは勝まさりて、得寵とくちよめき給ひしに、承香殿うりほ、女御おんなみども、皆君寵みなくんてうを挑いどみ交かし給ひし間ま、御交情おんなからひども、え睦なごほしからざりしかば、その餘波なごりにて、女御おんなみ殿の承香うりほには、三宮さんみやに對たい

朱雀院病篤

夕霧中納言
參、朱雀院

して、實に今は故意と憎しとはなくとも、眞に心留めて、思ひ
 後見むとまでは、思さずもやあらむとぞ、推測らるゝかし、さ
 て院はこの女三宮の御事を、朝夕に思し歎く、年暮れ行くまゝ
 に、御病惱眞に重くなり勝らせ給ひて、御簾の外にも出でさせ
 給はず、御物の怪にて、時々惱ませ給ふこともありつれど、い
 でかく立返り、小止なき様にはおはしまさゞりつるを、此度は、
 いよく限なりと思召したり、今は御位を避らせ給へれど、尙
 その御宇に、頼み始め奉り給へる人々は、今も懐しく愛甚き御
 有様を、心遣り所に、参り奉仕り給ふ限りは、心を盡して、惜
 しみ申し給ふ、六條院皇太后よりも、屢々御訪問の御使あり、太
 上皇自親も参り給ふべき由聞召して、朱雀院は、いといたく喜
 び申させ給ふ、中納言、君霧夕参り給へるを、御簾の内に召入れて、

御物語、委細なり、

(朱) 故院の上帝桐壺の、臨終の刻に、數多御遺言ありし中に、六
 條院の御事、今の主上院冷泉の御事ぞ、取別きて宣ひ置きしを、
 即位の後には、事限ありければ、内々の心寄は變らずながら、果
 敢なき過失に、彼院源心置かれ奉ることもありけむと思ふを、
 年來事に觸れて、その恨殘し給へる氣色をぞ、少しも漏らし
 給はぬ、賢しき人といへど、吾が身の上になりぬれば、事違
 ひて、心動き、必その反報見え曲めることぞ、古にてさへ多
 かりける、されば彼院の恨み、如何なる折にか、その御心は
 え綻ぶべからむ、と世人も面向け疑ひけるを、遂に忍び過し
 給ひて、春宮などにも、心を寄せ申させ給ふ、それに今又姫
 君石明をば、春宮に参らせて、二なく親しかるべき御中となり、

はかなき過失
○源氏朧
月夜尙侍の
事により須
磨へ謫居せ
しことをい
ふ

睦び交し給へるも、心には限なく嬉しく思ひながら、吾が本性の愚なるに添へて、子を思ふ道の闇に立交り、頑固なる様にやならむと、却て餘所の事に申し放ちたる様にて候ふ、主上冷泉院の御事は、故院の御遺言違へず、奉仕り置きてしかば、かく季の世の明君として、吾が世の不面目をも興し給ふ、本意の如く、いと嬉しくぞ候ふ、彼の秋の、六條院の行幸の後、古の事取り添ひて、ゆかしく覺束なくぞ覺え候ふ、對面の上にて、申すべきことども候ふ、必自親訪問ひものし給ふべき由、其方の父君へ催促し申し給へ、

など、打萎たれつ、宣はず、中納言、君、

夕 過ぎ候ひにけむ方は、ともかくも思ひ辨へ難く候ふ、年取り候ふて、朝廷にも奉仕り候ふ間、世間の事を見歩く間に

は、大小の事につけても、内々の然るべき父の物語などの序にも、古の憂はしきことありてぞなど、打微め申さる、折は候はず、父のかく朝廷の御後見を奉仕り中止して、閑靜なる思を叶へむと、偏に籠り居し後は、何事も知らぬやうにて、故院桐壺帝の御遺言の如くも奉仕らず、君上朱雀院の御位におはしまし、世には、父は年齢の程も若く、身の器量も及ばず、致仕大臣を始め、我身より賢き上の人々多くて、其志を遂成て御覽せらるゝこともなかりき、君上の今かく政事を避り給ひて、閑靜におはします頃、心の中をも隔てなく参り承らまほしきを、今は院號さへ賜はりて、何となく所狭き身の行粧にて、自然月日を過すことよとぞ、父は折々歎き申し候ふ、など奏し給ふ、さて中納言霧夕は、年は二十にもまた僅なる程な

れど、いと能く整備ひ過して、容貌も盛りに匂ひて、いみじく清らなるを、院は御目に留めて、打目守らせ給ひつゝ、かの持て煩らはせ給ふ姫君宮女三の御後見に、この中納言をやせまし、など、人知れず思し寄りけり、

(朱) 其方は、今は雲井雁の邊に住み着かれにたれとな、年頃は舅君の心解けずとかとて、心得ぬ様に聞きしが、いと氣の毒に思ひしを、今は舅君も心解けて許可し給ふと聞けば、耳易きものながら、さすがに妬く思ふことこそあれ、

と宣はする御氣色を、中納言は心の中に、いかに宣はすることにあらむ、と怪しく思ひ廻らすに、院にはこの姫宮を、かく思し扱ひて、然るべき人あらば預けて、心安く世をも思ひ離ればや、とぞ思し宣すると、自然と漏り聞き給ふ便ありければ、我

をば、女三宮の御後見にもと思して、雲井雁に住み着きしことを、妬くとは宣ふにやあらむ、とは思ひ寄れど、ふと然なり、と心得顔にも、何かは應答へ申さむ、唯、
(夕) 確乎々々しくも候はぬ身には、また取極めて、此身の寄邊も候ひ難くばかりぞ候ふ、
と奏して、止みぬ、女房などは、覗きて見聞きて、
(女房) いと世に有り難くも見え給ふ容貌用意かな、あな愛でたよ、
など集りて申すを、老耄へる古女房達は、
(老女) いでや然りとも、かの父君六條院の、この中納言殿の御年輩におはせし御有様には、え擬へ申し給はざるめり、父君は、これよりもいと目も文に、美しく清らにもものし給ひし

かな、

と言ひ論ふを、朱雀院は聞召して、

(朱) まことに、彼の六條院源氏は、様特別なりし人ぞかし、今はまた當時よりも壯び勝りて、光とは實にこれを言ふべきにやあらむ、と見ゆる匂ぞ、いと、加はりにたる、儀式だちて、堂々しき公事おほやけごとなどの方にて見れば、嚴正しく鮮明かに、目も及ばぬ心地するを、さてまた打解けて、戯れ言をも言ひ亂れ遊べば、其方につけては似るものなく、愛敬づき、懐しく美しきことの無雙きこそ、世に二と有り難けれ、何事にも前世の善因、推測られて珍らかなる人の有様なり、さて彼人は、宮中に生ひ出で、桐壺帝の、限りなく慈愛しきものに爲給ひ、然やうにはかり撫で傳き、身にかへて思したりしがど、彼は心

朱雀院思
女三宮

の隨にも驕らず、卑下して、廿歳が程には、納言にもならずなりにき、廿一歳にてや、宰相にて、大將兼け給へりけむ、それにてこの中納言霧は、いとこよなく昇進みて、十九歳にて、納言になりたるめるは、源家の、次々の威勢の、勝るなるめり、眞に賢き方の學才、用意などは、中納言もをさく、父に劣るまじく、かく早く昇進みたるは、過りても、成長げ勝りたる聲望、いと特別なるめり、など賞感させ給ふ、
姫宮女三宮の、いと美しげにて、若く何心なき御有様なるを、朱雀院は御覽じ給ふるも、見難し奉り、且はまた片生ひならむことをば、見隠し教へ申しつべくあらむ人の、後安からむものに預け申さばや、など申し給ふ、大人しき御乳母ども召出で、姫

宮の御裳着の間の事など、宣はする序に、

(朱) 六條院の、式部卿親王の女、紫上を養育てけむやうに、この姫宮を預かりて、養育まむ人もがな、尋常人の中には、かかるものは有り難し、内裡には秋好中宮伺候ひ給ふ、次々の女御達とても、いと尊き限り伺候はるゝに、確乎しき後見なくしては、宮中の交際、却ていと如何あらむ、この權中納言の朝臣霧夕の、一人ありつる程に、その後見の事をば、打微聞てこそ試るべかりけれ、彼の朝臣は、若けれど、いと警策にて、生ひ先、頼もしげなる人にぞあるめるものを、と宣はす、女房達、

(女房) 中納言殿は、いと眞實人にて、年來も彼の雲井、雁に心を懸けて、外様に思ひ移ろふべくも候はざりけるに、其思ひ

叶ひては、いと心も揺ぐ方候はじ、かの父君の院こそ、却て女の方につけては、尙いかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は、絶えずものし給ふなれ、その中にも、紫上の外に、本臺を求め給ふ如き、やむことなき御企望深くて、前齋院權姫などをも、今に忘れ難くこそ申し給ふなれ、と申す、

(朱) いでその經りせぬ仇氣こそは、いと氣遣はしけれ、と宣はすれど、實に姫宮を、六條院の方へ預けて、數多の中に關係ひては、時としては心外しかるべき思はありとも、猶やがて院をば親様に定めては、然やうにもや譲り置き申さまし、なども思召すべし、

(朱) 眞に、少しもよづけてあらせむと思はで、女子持たらば、

左中辨語
女三宮乳
母

同じくは彼の六條院の邊にこそは、經れ置かまほしけれ、幾許もあらぬ此世の間は、彼の院の如く、然程思ふ儘の有様にこそ、過ぐさまほしけれ、我女ならば、同胞なりとも、必睦び寄りなまし、若かりし時などさへ、然ぞ覺えし、況して女の、彼の院に欺かれむは、いと道理ぞや、と宣ひて、御心の中に、朧月夜尙侍の御事も思し出でらるべし、この御後見どもの中に、重々しき御乳母の兄、左中辨なる人、六條院の親しき人にて、年來奉仕るものありけり、この女三宮にも、心寄特別にて伺候へば、参りたるに、乳母逢ひて、物語する序に、

(乳母) 院の上朱雀院ぞ、しかぐと御氣色ありて申し給ひしを、時機あらば、六條院に洩し申させ給へ、皇女達は、獨居にて

おはしますこそは、例の事なれど、様々につけて、心を寄せ奉り、何事につけても、御後見し給ふ人ある宮達は、頼もしげなり、然るを、女三宮は、御父君朱雀院を除き奉りては、他にまた眞心に思ひ申し給ふべき人もなければ、自分ほどの者は、御後見仕ふ奉るとても、何程の宮仕にかあらむ、まして我が心一つにしもあらで、其他の女房達もあれば、自然思ひの外の事もおはしまし、輕々しき評判もあらむ時には、如何様にか煩しからむ、院の上御覽する世に、ともかくも此の御事定りてあらば、奉仕り善くぞあるべき、貴き系統と申せど、女といふものは、いと宿世定め難くおはしますものなれば、萬事に歎息しくぞ候ふ、かく數多の皇女の御中に、女三宮を取り分け、特更に申させ給ふにつけても、人の嫉妬あるべかる

塵もすゑじ
○古今集に
塵をだにす
ふじとそ思
妹とわがぬ
る床夏の花
とあり

○若菜上

めるを、何とて塵も据る奉らであるべき、
と語らふに、左中辨、

(辨) さればとよ、如何にあるべき御事にかあらむ、六條院は、
怪しきまで御心長く、假にても見そめ給へる人は、御心の留
りたるをも、又さしも御心深からざりける人をも、方々につ
けて尋ね取り給ひつゝ、數多集へ申し給へれど、大切に思し
たるは限りありて、たゞ紫、上一方なるめれば、その紫、上一人
に事寄りて、其他は、かひなげなる住居し給ふ方々こそは、多
かるめるを、女三宮の御宿因ありて、もしも然様に、六條院
におはしますやうもあらば、いみじき紫、上と申すとも、立並
びて押立ち給ふ事は、得あらじと推量らるれど、猶いかゞあ
らむ、と遠慮らるゝ事ありてぞ覺ゆる、さるは六條院は、現

乳母奏ニ女
三宮事

○若菜上

世の榮華、末の世に過ぎて、身に不足はなきを、女の關係に
てぞ、人の誹謗をも負ひ、御心にも飽かぬ事もあるとぞ、常
に内々の遊びごとにも思し宣はするに、實に己等が見奉るに
も、然様にぞおはします、方々につけて、六條院の御蔭に隠
し給へる人は、皆其人にあらず、いたく立ち下れる分際には
物し給はねど、さりとて限りある凡人どもにて、六條院の御
有様に、並ぶべき威勢を具したるは、おはしまさざるめる、さ
れば同じくは、三宮を、彼院の方におはしまさせなば、如何
に匹儔たる御配偶ならむ、
と語らふを、乳母また事の序に、朱雀院に、
(乳母) しかぐと、何某の朝臣左中に、微聞かし候ひしかば、
彼の六條院には、必承諾き申させ給ひてん、年來の御本意協

ひて、思しぬべき事なるを、眞に此方院朱雀の御許容ありぬへくば、六條院へ傳へ申さむとぞ、何某の朝臣の申し候ひしを、如何にあるべき事にかは候はむ、六條院は、よく身分々々につけて、人の分際々々、思し辨へつゝ、有り難き御心様に物し給ふなれど、凡人にてさへ、また關係ひ思ふ人、數多立ち並びたる所へ遣るは、世の人の飽かぬ事に爲候ふめるを、今女三宮を、彼の院におはしませば、紫上など、盛華におはして、心外しき事もや候はむ、三宮の御後見望み給ふ人々は、數多おはすめり、能く思召し定めてこそ善く候はめ、三宮は、やむことなき限りなき人と申せど、今の世の様とては、皆朗かに有るべかしく、世の中を御心と過し給ひつべきも、おはしますべかるめるを、姫宮女三宮は、淺ましく覺束なく、心もと

なくばかり見えさせ給ふに、近侍ふ人々、奉仕る際限こそ候はめ、御自身の、平常の御心掟に隨ひ申して、賢しき下人も靡き伺候ふこそ、便りある事には候はめ、さはいへど、姫宮に取立立てたる御後見、物し給はざらむは、下人は、尙心細き業にぞ候ふべき、

と申す、

(朱) 然思ひ尋取るに因りてぞ、我も様々に思ひ煩ふ、さるは皇女達の世づきたる有様は、うたて淡々しきやうにもあり、また貴き分際と雖ども、女といふものは、男に歸嫁るにつけてこそ、後悔しげなる事も、心外しき思ひも、自然打混るものなるめれど、且は心苦しき思ひ亂るゝを、また父母など然るべき人に立ち後れて、頼む蔭に別れぬる後、心を立て、世の

中に過ぎむことも、昔は人の心平かにて、世に許さるまじき程の事をば、思ひ及ばぬものと馴れ來たりけむ、今の世には、好色しく濫りがはしき事も、類に觸れて聞ゆめり、昨日まで貴き親の家に崇められ、傳かれし人の女の、親などなくなりて、今日は平凡しく下れる分際の、好色者どもに、尙打欺かれて、亡き親の面を伏せ、影を辱しむる類、多くぞ聞ゆる、言ひもてゆけば、上も下も皆同じ事なり、身分々々につけて宿世あり、などいふなる事は、知り難き業なれば、萬事に後めたくぞある、凡て悪しくも善くも、然るべき人の心に、親の許し置きたるまゝにて、世の中を過すは、其の女の宿因々々にて、もし後の世に衰へある時も、自身の過失にはならず、在經てこよなき幸福あり、目安き事になる時節は、かくても悪し

からざりけりと見ゆれど、猶忽にふと打ち聞きつけたる間は、親に知られず、然るべき人も許さぬに、吾心つからの、忍び業爲出でたるぞ、女の身には増す事なき瑕瑾と覺ゆる業なる、そは凡卑しき平人の習慣にてさへ、淡つけく心づきなき事なり、また自身の心よりは、馴れてあるべきにもありぬを、思ひの外に、人にも見られ、我が宿因の程を定められむぞ、いと軽々しく、身の態度、容姿、推量らるゝ事なるを、まして姫宮は、怪しく物はかなき心様にやと見ゆめる御様なるを、其方ども、彼此の心に任せて、軽々しく待遇し申すな、然様なる事の、世に洩り出でむ事、いと憂き事なり、など宣ひて、院は御遁世ましくて、姫宮を見棄て奉り給はむ後の世を、後めたげに思ひ申させ給へれば、乳母もいよく煩

朱雀院案
女三宮降嫁

はしく思ひあへり、
 朱雀院は、姫宮を、今少し物をも思ひ知り給ふほどまで、見過
 さむところそは、年來念じつるを、御遁世の、深き本意も遂げず
 なりぬべき心地のするに、思ひ催されて、見過すことも得ず、さ
 てかの六條の大殿源は妃妾方々多く物せらるれど、さりとも實
 に物の心得て、後安き方は、此上なかりなむよ、さればその數
 多物せらるべき人々を、我が知るべきにもあらず、とてもかく
 ても後安きと、後安からざるとは、其の人の心からなり、六條
 院は、長閑に沈着て、後安き方は雙なく、大方の世の例ともな
 りぬべく物せらるゝ人なり、院ならで宜しかるべき人、誰ばか
 りかはあらむ、兵部卿、宮營は、人品は見安し、同じ皇系にて、
 他人と辨別へ貶しむべきにはあらねど、あまり甚く優柔かしめ

大納言○系
圖になし

く程に、威嚴き方後れて、少し輕躁たるおぼえや進みにたらむ、
 猶兵部卿、宮の如き人は、いと頼もしげなくぞある、また大納言の
 朝臣の女三宮の家司望むなる、この朝臣も、然る方に、物眞實
 なるべき事にはあなれど、さすがに姫宮を後見せさする事は、い
 かにぞや、左様に普通たる分際は、猶目覺しくぞあるべき、往
 時も斯様なる皇女降嫁の撰定には、何事も人に特殊なる威勢あ
 るに偏頗てこそありけれ、唯偏に雙なく持ち居む方ばかりを、賢
 き事に思ひ定めむは、いと飽かず口惜しかるべき業にぞある、右
 衛門督木柏の、内心に女三宮を戀ひ詫るよし、朧月夜、尙侍の、曾
 て申されし、その右衛門督ばかりぞ、位階など今少し物めかし
 き人になりなば、などは降嫁を許さざらむとも、思ひ寄りぬ
 べき程なるを、右衛門督、また年齢いと若く、一向に輕びたる

身分なり、高貴き志深くて、鰥居にて過しつゝ、甚く沈着り思ひ揚れる氣色の、他人には抜けて、學問なども非難もなく、遂には世の重臣となるべき人なれば、行末も頼もしけれど、猶又この女三宮の爲にと思ひ果てむには、限なき人とは思はれぬよ、と万事に思し煩ひ給へり、斯様にも思しよらぬ姉宮達をば、心に懸けて申し惱し給ふ人もなし、怪しく内々に宣はする御耳語どもの、自然事廣りて、心を盡す人々多かりけり、藤太政大臣柏木も、この右衛門督柏木の今まで獨身にのみありて、皇女達ならずば、妻には得じと思へるを、かゝる女三宮の御後見の御評定ども出できたるなる時に、さやうにも面向け奉りて、宮の方へ、右衛門督を召し寄せられたらむ時、いかばかり我が爲にも面目ありて、嬉しからむ、と思し言ひて、臈尙侍には、か

諸人競望
女三宮

の姉あねの北きたの方かたの柏木の母して、傳へ申し給ふなりけり、萬事限なき詞を盡して、朱雀院に奏せさせ、御氣色を伺はせ給ふ、兵部卿宮螢は、左大將の北の方玉を、申し失し給ひて、玉葛尙侍の、聞き給ふらむ處もあれば、新に迎ふる我が妻の、片帆ならむ事は、と撰り過し給ふに、いかゞは女三宮に御心の動かざらむ、限りなく思し入られたり、藤大納言は、年來院の別當にて、親しく奉仕りて、伺候ひ馴れたるを、院の御山籠り爲給ひなむ後、據なく心細かるべきを、この女三宮の御後見に事寄せて、眷顧させ給ふべく、院の御氣色を、切に伺はせ給ふなるべし、權中納言も、かゝる事どもを聞き給ふに、人傳にもあらず、あれほど面向けさせ給へりし、院の御氣色を見奉りてしかば、自然便宜につけて、漏し聞召さす事もあらば、よも持て離れてはあら

じ、と心動悸もしつべけれど、雲井、雁の、今はと打解けて頼み給へるを、年來辛きにも託けつべかりし程だに、外様の心もなくて過してしを、生憎に、今更に、立歸り俄に物をや思はせ申さむ、女三宮の、普通ならず、やむことなき方に關係ひなば、何事も思ふまゝならで、左右に安からずば、我が身も苦しくこそはあらめ、素より權中納言は、好色しからぬ心なれば、思ひ鎮めつ、打出ねど、さすがに外様に定まり果て給はむも、いかにぞや覺えて、耳は留まりけり、春宮にも、かゝる事ども聞召して、

(春) 皇女降嫁の事は、差當りたる只今の都合よき事よりも、後の代の例ともなるべき事なれば、能く思召し廻らすべき事なり、人品善良しとても、平人は限りある事なれば、尙い

よく降嫁の事、思し立つことならば、彼の六條院源氏にこそ、親様に譲り申して、御後見を願ひ給はめ、

とぞ、故意との御消息にはあらねど、かく御氣色ありけるを、朱雀院は、待ち聞かせ給ひても、

(朱) 實に然る事なり、いと能く思し言はせたり、

とて、いよく御心立たせ給ひて、先彼の左中辨してぞ、六條院の御方へ、かつく案内傳へさせ給ひける、朱雀院の、この女三宮の御事を、かく思し煩ふ様は、六條院には、前々も、皆聞き置き給へれば、

(源) 女三宮の御事、御氣の毒なる御事にもあなるかな、然はありとも、院の御世の残り少しとて、我もこゝにまた幾何立ち後れ奉るべきとてか、その御後見の事をば請取り申さむ、實

朱雀院托
女三宮後見
於源大臣

院の御世の
云々○朱雀
院は源氏に
は三歳の御

兄にて此時
四十二歳に
ならせ給へ

○若菜上

に年齢の次第を誤またぬことにて、今暫の間も、我が残り留
る限りあらば、大方につけて、何れの皇子皇女達をも、餘所
に聞き放ち奉るべきにもあらねど、特別に御鍾愛ある、女二
宮の事、またかく取別きて聞き置き奉りてむをば、特にこそ
は後見申さめと思ふを、それさへ、いと不定なる世の定めな
りや、

と言ひて、

又況して偏に我が正妻として、御後見頼まれ奉るべき筋に、
睦び馴れ申さむことは、我も院に打續き世を避らむ刻に、二
宮の爲、いと却て心苦しく、自分の爲にも、淺からぬ羈絆に
ぞあるべき、中納言タなどは、年齢も若く、身分はまた輕々
しきやうなれど、行先遠くて、人柄も、遂には大臣にもなり

て、朝廷の御後見ともなりぬべき生先なるめれば、これへ降
嫁ありて、御後見の事、然やうにも思し寄らむに、何どか此
上なく似合しきことなからむ、然れど、彼の中納言は、いた
く眞實だちて、雲井、雁の如き、思ふ人決定りてぞあるめれば、
降嫁の事、申しても、それに遠慮らせ給ふにやあらむ、
など言ひて、御自分は、思し離れたる様なるを、左中辨は、朱
雀院の、女二宮御後見の事を、六條院へ御頼みあるは、大方に
思し定めて宣はするにはあらぬを、今かく源氏の否み言へば、い
と御氣の毒にも、口惜しくもあるべきと思ひて、院の内々に思
し立ちにたる様など、委細しく申し上ぐれば、源氏はさすがに
打笑みつゝ、

(源) 彼の姫宮は、院のいと慈愛しく爲奉り給ふ皇女なるめれ

○若菜上

ば、來し方行く先の御勘考も、かく強に深きなるめりな、唯禁裏にこそ奉りて、入内させ給はめ、貴き故參の人々おはすとて、遠慮り申し給ふことは、無益ことなり、決してそれに故障るべきことにもあらず、後參の人なりとて、必しも寵愛の疎略なるわけもなし、故院桐壺帝の御時に、弘徽殿、太后は、故院の、また東宮の初に、入内したる女御にて、いきまき給ひしがど、極めて末に入内り給へりし、薄雲、女院藤壺に、暫くは壓され給ひにき、この女三宮の御母女御源氏こそは、彼の薄雲女院の、御同胞にもし給ひけめ、容貌も女院に差次いで、いと美しと言はれ給ひし人なりしかば、何方につけても、この姫宮女三宮、普通の分際には、よもおはせじものを、など、源氏は、この女三宮をば、半ばゆかしくも、思ひ申し給

朱雀院行女
三宮着装式
柏殿○朱雀
院にありて
皇后宮の御
在所なり

ふべし、
年も暮れぬ、朱雀院には、御心地尙平癒る様にもおはしまさねば、萬事惚忙しく思し立ちて、女三宮の御裳着の事、思し急ぐ様、來し方行く先、二と有り難げなるまで、嚴重しく言ひ騒ぐ御修飾は、柏殿の西面に、御几帳より始めて、和製の綾錦を混ぜさせ給はず、唐土の后妃の裝飾を想像りて、端麗しく、仰々しく、輝くほどに調へさせ給へり、御腰結には、豫てより致仕、太政大臣府内に申させ給へりければ、この大臣、仰々しくおはする人にて、参りにく、思しけれど、朱雀院の御言を、昔より背き申し給はねば、参り給ふ、今二所の左右大臣達、その残りの公卿などは、是非なき故障あるも、強に差繰り助けつゝ、参り給ふ、親王達八人、殿上人は、また言ふに及はず、禁中の殿上人も、

尊者の大臣
○正客とし
て饗待する
大臣なり

春宮の殿上人も、残らず参り集ひて、嚴重しき御儀式の評判な
り、朱雀院の御榮事は、此度こそ終結なれ、と天皇春宮を始め
奉りて、御氣の毒に聞召しつゝ、藏人所、藏殿の唐物ども、多
く献らせ給へり、六條院よりも、御祝訪いと仰山し、贈物ども、
人々の祿、尊者の大臣の御引出物など、凡て六條院よりぞ献ら
せ給ひける、中宮好秋よりも、御装束、櫛の匣、心特別に調ぜさ
せ給ひて、彼の昔、我が入内の時に、朱雀院より賜はりし御髪
上の具、由緒ある様に改め加へて、さすがに本の心はえも失は
ず、昔の物と見せて、その日の夕方、女三宮へ進上らせ給ふ、中
宮權亮、朱雀院の殿上人なるが、これを御使にて、女三宮の御
方に参らすべく言はせつれど、かゝる事ぞ、御書の中にありけ
る、

(秋歌) さしながら、昔を今に、傳ふれば、玉の小櫛ぞ、神さ
びにける。

朱雀院、御覽じつけて、愛憐に思し出でらるゝことどもありけ
り、中宮の、院より賜はりし御具、此度の裳着につけてのあや
かり物として、怪しうはあらず、と姫宮女三へ譲り申し給へる
程、實に面起しき頭挿なれば、御返事も、昔の愛憐をば差置い
て、

(朱歌) さしつぎに、見る物にもが、萬世を、つげの小櫛の、
神さぶるまで、

とぞ、喜び申し給へる御心地、いと病苦しきを念じつゝ、思し
起して、この姫君の御裳着終てねれば、三日過して、御落飾し
給ふ、普通の人の上にてさへ、今はとて薙髪るは、悲しげなる

さしながら
云々○昔君
より賜はり
し御髪上の
具をそのま
ゝ傳受して
姫君に献る
とてさしは
櫛の縁にい
ひてしは助
字なり

さしつぎに
云々○中宮
の差次にこ
の女三宮を
見むと祝ひ
たるにて黄
楊に告をか
けたり
朱雀院落飾

業なれば、院の御上にては、況していと哀しげに、女御更衣達
思し惑ふ、尙侍君朧月は、つと伺候ひ給ひて、いみじく悲哀し
げに思し入りたるを、院は堪忍へ兼ね給ひて、

(朱) 子を思ふ道は限あれど、其方のかく思ひ染み給へる別離
の、堪へ難くもあるかな、

とて、御心亂れぬべけれど、強て御脇息に懸り給ひて、延暦寺
の座主より始めて、御受戒の阿闍梨、三人伺候ひて、法服など
着せ奉る間、此世を別れ給ふ御作法、いみじく哀し、今日は世
を思ひ澄ましたる僧達などさへ、涙もえ止めねば、況して皇女
達、女御、更衣、多くの男女、上下動揺りみちて泣き響むに、院
はいと御心惚忙しく、かく騒がしからで、閑靜なる所に、やが
て籠るべく、豫て思し儲け、る本意、違ひて思し召さるゝも、唯

この幼稚き姫宮女三に引かされて、と思し宣はず、主上冷泉よ
り始め奉りて、御訪問の繁多きは、言ふも更なり、六條院源も、
朱雀院御出家の後は、少し御心地平癒しくと聞き奉らせ給ひて
參り給ふ、さて六條院は、御封戸などこそ、皆同じ如く、太上
天皇と、同等しく定まり給へれど、眞の太上天皇の儀式には、准
へ給はず、世の待遇し、思ひ申したる様などは、心特別なれど、
御自身は、故意に事省き給ひて、例の仰山しからぬ御車に召し
給ひて、公卿など、然るべき限り、車にてぞ供奉し給へる、朱
雀院には、いみじく待ち悦び申させ給ひて、苦惱しき御心地を
思し強りて、御對面あり、正式しき様ならず、唯常のおはしま
す方に、御座所裝飾ひ加へて、六條院を入れ奉り給ふ、かくて
六條院は、朱雀院の、變り給へる御有様を見奉り給ふに、來し

方行く先、搔昏れて悲しく、御涙も止め難く思さるれば、頓にもえ猶豫らひ給はず、

(源) 故院帝桐壺に後れ奉りし頃より、世の中無常く思ひ候らひしかば、出家の本意深く進み候ひにしを、心弱く思ひ候ふて、躊躇ふことばかり候ひつゝ、遂にかく君の御出家を見奉り成し候ふまで、後れ奉りぬる心の緩さを、耻しく思ひ候はるゝかな、御身に比べ奉りては、物の數にも候はぬ此身の、出家を思ひ立ち候ふ折々あるを、いと忍び難きこと、多かりぬべき業にこそ候ひけれ、
と言ひて、慰め難く思したり、朱雀院も物心細く思さるゝに、え心強からず打萎たれ給ひつゝ、古今の御物語、いと弱げに申させ給ひて、

今日か明日
○朝忠集に
人の身の老
をばてにし
せましかば
今日か明日
かといそが
ざらましと
あり

(朱) 今日か明日かと思ひ候ひつゝ、さすがに程經ぬるを、打撓みて、深き本意の片端にても、遂げずなりなむことよ、と思ひ起してぞ、かくても餘命なくば、修行の志も叶ふまじけれど、先假にても、心を閑め置きて、さて念佛をなりともせむ、と思ひ候ふ、病の餘り、確乎しからぬ身にても、世に長らふることに、唯この志に引き留められたる、と思ひ知らぬにしもあらぬを、今まで佛行を怠慢りし罪、安からずぞ思ひ候ふとて、思し掟てたる様など、委細しく宣はする序に、
(又) 皇女達を、數多打捨て候ふぞ、心苦しき中にも、またかの女三宮を、思ひ譲る人なきをば、取別きて心配たく、見煩ひ候ふ、
と、判明には宣はぬ御氣色を、六條院は、御氣の毒に見奉り給

ふ、さて御心の中にも、女三宮の、さすがにゆかしき御有様なれば、思し過し難くて、

(源) 實に常人よりも、かゝる筋は、私様の御後見なきは、口惜しげなる業にぞ候ひける、春宮かくておはしませば、末の世には、いと賢き儲君と、天下の頼み所に仰ぎ申さするを、況してこの皇女の御事、御遺言あらむには、一事といへども、疎略に輕め申し給ふべきには候はねば、更に行く先のこと、思し悩むべきにも候はねど、實に事には制限あれば、春宮たとひ御位に登り給ひて、世の政事、御心に叶ふべしとはいひながら、皇女の御爲までには、何程の判然なる御心寄あるべきにも候はず、凡て皇女の御爲には、様々眞の御後見とすべきものは、猶夫婦となりて、然るべき筋に契りを交し、如何に

しても去り難く、養育み申す御守目あるこそ、安心かるべきことに候ふを、尙強ひて後世の御疑残るべくば、豫め皇女の御後見を、大概に思し撰びて、御在世の間に、忍びて然るべき御預人を、定め置かせ給ふべきにぞ候ふ、と奏し給ふ、

(朱) 然やうに思ひ寄ること候へど、それも難き事にぞありける、古の例を聞き候ふにも、位にありて、世を保ち、盛りの時にさへ、皇女に壻を撰びて、然る様の後見をせさせ給へる類、多かりけり、吾等が如きは、況してかく今はと此世を厭離るゝ際にて、仰々しく思ふべきにもあらねど、また然やうに捨つる中にも、捨て難きことありて、様々に思ひ煩ひ候ふ間に、病氣は重り行く、復取り返すべきにもあらぬ月日の、過

月日の過ぎ
行けば云々

○論語に日月逝矣歲不我與とあり

○若菜上

ぎ行けば、心惚忙しくぞ候ふ、笑止千萬譲りなれど、君にはこの幼稚き内親王宮女三一人、取別きて養育み思して、然るべき縁を、と御心に思し定めて、預け給へと申さまほしきを、權中納言霧などの、また定まれる妻もなくて、獨居しつる間に進み寄るべくこそありけれ、さるを太政大臣府内に先ぜられて、かの女君雁井を預けられけるこそ、妬く覺え候ふ、

と申し給ふ、六條院は、

(源) 吾子の權中納言の朝臣、眞實やかなる方は、いとよく奉仕りぬべく候ふを、官位といひ、分別といひ、何事もまだ淺くて考慮少くこそ候はめ、恐多くとも、某深き心にて、後見申し候はむに、君のおはします御蔭に變りては、姫宮も思されまじを、但某の行先短くて、御後見奉仕り果てぬことや候

六條院諸女三宮後見

別當○別當は院司の長官なり

はむと、唯この疑はしき方のみぞ、心苦しく候ふべき、と奏しながら、承引き申し給ひつ、夜に入りぬれば、主人の院方の院司も、客人の供奉の公卿達も、皆院の御前にて、御饗應のこと、精進物にて、正式しからず、艶めかしく爲させ給へり、院の御前に、淺香の懸盤に、御鉢など、昔に變りて、供御進るを、人々見奉りて、涙推拭ひ給ふ、尙哀なる筋の事どもあれど、煩雜ければえ書かず、かくて六條院は、夜深けて還り給ふ、供奉のものどもには、祿ども次々に賜ふ、別當大納言藤大納言も、御送りに参り給ふ、主人の院は、今日の雪に、いと、御風氣加はりて、搔き亂り惱ましく思さるれど、御心に懸りける女三宮の御事、六條院、御後見を引き受け給へれば、心安く思しけり、六條院は、女三宮の御後見、引受け給ひつることを、紫、上に語

○若菜上

り給はむにつけても、生心苦しく、様々思し亂る、紫上も、か
 かる御約定など、豫ても微聞き給ひけれど、それさうもあらじ、
 前齋院朝貞姫君をも、懇切に後見申し給ふ様なりしがど、故意とし
 も思し遂げずなりにしを、など思して、六條院に、女三宮の御
 後見、引受け給ひし事やある、とも問ひ申し給はずして、何心
 もなくておはするに、院は御心の中に、いと氣の毒に、此事を
 ば紫上は、いかゞ思さむ、我心は紫上に對けては、少しも變る
 まじく、まことにかの姫君の御後見、引受けむにつけては、却
 て紫上に對けての心深さこそ、いと、勝らめ、紫上の、この行
 末見定め給はざらむ間の年輩となりては、況して互に隔心で申
 し給ふことなく、愛憐なる御交情なれば、よし暫時心に隔て殘
 したることあらむも、悒鬱ければ、その夜は紫上に、彼の事語

り出て給はずして、打休寢み、明かし給ひつ、翌の日、雪打降
 り、空の景色も、物哀に、過ぎにし方行く末の御物語、紫上に
 申し交し給ふ、

(源) 朱雀院の御病惱にて、頼もしげなくなり給ひにたる御訪
 問に參りて、哀なる事どもものありつるかな、姫君女三宮の御
 事を、いと捨て難げに思して、御後見の事、かやうく、に御
 遺命しかば、御氣の毒にて、え申し辭びずなりにしを、吾を
 ば院の御聲になど、仰山しくぞ人は言ひ成さむかし、今は吾
 身も齡更けて、さやうの事も、初々しく、不似合しく思ひ成
 りにたれば、曩に、左中辨などして、女三宮の事、人傳に氣
 色ばませ給ひしかば、とかく遁れ申し、を、今度は、直接御
 對面の序に、院より、心深き様なることどもを、宣ひ續けし

かば、え木強しくも辭退申さず、院の御遁世ありて、深き御山住に移ろひ給はむ時にこそは、彼の姫宮を渡し奉らめ、それを其方は、味氣なく思さるべきにや、如何なる事ありとも、其方の爲には、我心は世に變ることは、更にあるまじきを、心な置き給ひそよ、院の御爲こそ、まことに御氣の毒なれば、彼の姫宮をも、片輪ならず待遇してむに、誰もく恨み給はで、平穩にて過し給はゞ、いと嬉しかるべきを、

など、申し給ふ、紫、上は、果敢なき御戯事さへも、實眞に、目覺しき物に思して、嫉妬の方には、心安からぬ御心様なれば、六條院は、此度のこと、如何思さむと思すに、紫、上は、いとつれなくて、

(紫) 哀なる御讓物にこそはあるなれ、某には如何なる心を置

き奉るべきにかあらむ、君の御方より、目覺しく、かくてはなど咎らるまじくば、某には、この儘にて心安くても候ひなむを、彼の母女御源氏宮の、御方様につけても、某と、女三宮とは、従姉妹の間柄なれば、女三宮には、某に對けて、疎からず思し數まへてんよ、

と卑下し給ふを、

(源) 餘りかく打解け給ふ御許しも、如何なればと、却て不安心たくこそあれ、實はさやうになりとも思し許して、我も人も心得て、平穩に待遇し過し給はば、いよく愛憐にぞあるべき、讒言申しなどせむ人の言、聞き入れ給ふな、凡て世の人の口といふものぞ、誰が言ひ出づることともなく、自然人の交情など、辟曲み思はずなること、出で來るものなるめるを、心一

つに思ひ鎮めて、實否とも、正確なる有様に従ふぞよき、實も否も、見定め聞糺さるる先に騒ぎて、あいなき物恨みし給ふな、

と、いとよく教へ申し給ふ、紫上は、心の中にも、女三宮御後見のこと、かく空より出で來にたるやうなる俄事にて、君も遁れ給ふ方なく、承引き給ひしことなるめれば、憎げにも申し成さじ、此度の事は、院よりの御頼みにて、我心に憚りて、我諫むることに従ひ給ふべき、君が心より起れる懸想にもあらざれば、此方より、諫め責かるべき方なきものながら、心の裏には、愚痴がましく思ひ結ぼるゝ様、世の人に漏り聞えじと思す、さては父君式部卿宮の太妃紫上の繼母毎に呪咀しげなることゝもを言ひ出でつゝ、彼のあぢきなき鬚黒大將の事にてさへ、玉葛君を、

吾が執り持ちしなど奇怪しく恨み妬み給ふなるを、此度のこと、かやうに聞きては、著しく、かの大將の事と思ひ合せ給はむ、など紫上は、大様なる御心といへども、いかでかはこれほどの心配りはなからむ、今は然りともとはかり、我身を思ひ上り、隔心なくて過しける世の人笑ならむことを、心の裏には思ひ續け給へど、いと大様にばかり待遇し給へり、
年も返りぬ、朱雀院には、皇女女三宮、六條院に移徙ひ給はむ御用意をし給ふ、これまで各々志の程を申し出で給ひつる、螢兵部卿宮、柏木右衛門督、藤大納言などの人々、女三宮をば、六條院に奪られつると聞きて、いと口惜しく思し歎く、主上冷泉院にも、御心ばえありて、入内させむと申し給ひける程に、かゝる御決定を聞召して、その事やがて思し止まりにけり、さはる

正月二十三日
賀正月子日
を用ゐるこ
と古例なり
玉葛尙侍献
若菜
壁代○壁の
代に仕切り
に立つるも
のなり
泔器○盥盥
なり

六條院今年ぞ四十歳になり給ひければ、御賀の事、朝廷にも聞
召し過さず、世の中の營み騒ぎにて、前日より響き渡るを、六
條院は、事の煩ひ多く、嚴重しきことは、昔より好み給はぬ御
心にて、皆辞退申し給ふ、正月廿三日、子の日なるに、鬚黒、左
大將の北方、玉葛、若菜進上り給ふ、御賀の事、豫て氣色も漏らし
給はで、いと甚く忍びて思し設けたりければ、俄にて、玉葛、君
の奉献を、え制め返し申し給はず、忍びたれど、それ程の御威
勢なれば、玉葛、君渡り給ふ儀式など、いと評判特別なり、南の
大殿の西の放出に、御座所裝飾ふ、屏風壁代より始めて、新し
く拂ひ修はれたり、端正しく倚子などは立てず、御地鋪四十枚、
御脇息など、凡てその御具ども、いと清らに爲させ給へり、螺
鈿の御厨子二具に、御衣箱四個するて、夏冬の御装束、香壺、藥

挿頭の臺○
金銀の作花
を立つる机
なり

の筥、御硯、泔器、搔上匣などやうの物、内々清麗を盡し給へ
り、御挿頭の臺には、沈、紫檀を作り、珍しき文綾を盡し、同
じき金具をも、彩色ひ成したる、心ばえあり、玉葛、君、當世め
かしく、物の風流深く、才氣めき給へる人にて、目馴れぬ姿に
爲成し給へり、嚴重しきことを嫌ひ給へば、故意に仰山しから
ぬ程度なり、親王公卿達、數多參院などし給ひて、六條院は、御
座所に出で給ふとて、玉葛、君に御對面あり、御心の中には、昔
の關係思し出ることとも様々なりけむかし、さて六條院には、御
様子いと若く清らにて、かく四十の御賀などいふことは、違算
にやあらむ、と覺ゆる様の、艶めかしく、人の親らしくもなく
おはしますを、玉葛、君は、珍らしく、年月隔て、見奉り給ふは、
いと耻しけれど、猶判明なる隔もなく、御物語申し交し給ふ、

二人の御子
○後に右兵衛督右大辨となる
振分け髪○
伊勢物語に
くらべこし
振分け髪も
肩すぎぬ君
ならずして
誰かあぐべ
きとあり

大將の御子、幼き君も、美しくて、母君玉葛に添そふて居給ふ、さて母君は、二人の御子を、打續うちつづきても、六條院に御覽ごらんぜられまじと申しけるを、大將は、かゝる序ついでになりとも、御覽ごらんせさせむとて、二人同じ様に装束しょうそくひて、振分け髪がみの、何心なにごころなき直衣姿なほしすがたともにておはす、

(源) 過すぐる齡よはひも、自分の心こころには、殊ことに思おもひ咎とがめられず、唯昔たゞむかしながらの、若々わかしき有様ありさまにて、改あらたむることもなきを、かゝる孫まごども出いで來くるにぞ、生不都合なまはしたなきまで、老齡おらのよはひを思おもひ知しらるゝ折をりもありける、中納言ちゆうなごん霧きりの、何時いつしかと儲たくわけたるなる子を、疎うと々うとしく思おもひ隔へたてゝ、また見みせずかし、君きみの、他人ひとより特別とくべつに、吾わが四十よそぢの賀がを、數かずへ取り給たまひける、今日けふの子日ねのひこそ、尙憂なほうれれたけれ、さるは、暫時しばしは老おいを忘わすれてもあるべきを、

と申し給ふ、玉葛たまが君も、いとよく壯ねび勝まさり、重々おもしき氣けさへ添そひて、見みるかひある様さまし給たまへり、さて、

(玉歌) 若菜わかさす、野邊のべの小松こまつを、引ひきつれて、もとの岩根いわねを、祈いのる今日けふかな、

と、強しひて音おとなび申し給ふ、沈ちんの折敷せしき四個よつして、御若菜おんわか、御祝儀おんいはひの様さまばかり獻たま上あり、六條院むつじょういんは、御蓋おんかほらけ取り給たまひて、

(源歌) 小松原こまつはら、末すまのよはひに、引ひかれてや、野邊のべの若菜わかも、年としをつむべき、

など申し交かはし給たまひて、公卿かんたうめ數多あまた、南みなみの廂ひさしに就つき給たまふ、式部卿しきぶくさう宮みやは、紫むらさ上の御父君おんちちきみにおはせば、御祝賀おんしうがひに參まゐり給たまふべきを、また鬚ひげ黒大將くろおほしやうの、先妻まゐづまの父君おんちちきみにおはせば、參まゐりにく、思おもしたれど、六條院むつじょういんよりは、やがて御消息おんせうそくありければ、かく親したしき御交情おんおからひに

若菜わかさす○
今日は御子
達たちを連れて
御父おんちちの千年
を祝いわふとな
り

小松原こまつはらの末
遙とほなる若子
を連れて祝
ひ給たまへば我
もそれに引
かれて久し
き年としをつむ
べしとて積
に摘とむかけ
たり

致仕大臣○
藤太政大臣
なり

て、隔心あるやうならむも便なくて、日高けてぞ渡り給へる、大將の得意顔にて、致仕大臣玉葛君六條院同養父につけても、かゝる新聲の御交情に、自慢りてものし給ふを、宮は心疾しげなる業なるめれど、大將の御子達は、即ち宮の御外孫達にておはせば、その御孫の君達、いつ方につけても下り立ちて、雑役し給ふ、籠物四十棒、折櫃四十個、中納言霧を始め奉りて、然るべき限りの人々、執り續け給へり、御盃下り、若菜の御羹進る、院の御前には、沈の懸盤四個、大御杯ども、懐かしく當世めきたる程度にせられたり、朱雀院の御醫療の事、尙平癒ぎ果て給はぬにより、樂人などは召さず、御笛など、致仕大臣の、其方は調へ給ひて、世の中に、この御賀より、またと珍しく清らを盡すべきことあらじ、と言ひて、勝れたる音の限りを、豫てより

思し設けたりければ、忍びやかに御樂遊あり、銘々に音楽し給ふ中に、和琴は、かの致仕大臣の、第一に秘藏し給ひける御琴なり、さやうの音楽の上手の、心を留めて弾き鳴し給へる音、いと無雙きを、他人はこれに臆ちて、搔き立てにくし給へば、大臣の長子、柏木右衛門督の、固く辭ふるを、責め給へば、實にいと面白くし給ひて、をさく父君に劣るまじく弾く、何事も上手の繼承といひながら、かやうにしもえ繼承れぬ業ぞかし、と奥ゆかしく、感歎に人々思す、凡そ調子に従ひて、譜ある手ども定まれる、唐土の秘傳どもは、却て研究ね知る方容易きを、和琴は譜も定まれることなく、意に任せて、唯笛に搔き合せたるすがききに、萬の樂器の音調へられたるは、妙に面白く怪しきまで響く、父大臣は、琴の緒も、いと緩に張りて、いたく音を

宜陽殿○宜陽殿は累代の樂器等を納め置く所なり

下して、調子餘響、多く合せてぞ搔き鳴し給ふ、右衛門督のは、いとわらゝかに上る音を、懐かしく、愛敬づきたるを、親王達、彼はこれまで、いとかくも上手に聞かざりしを、と驚き給ふ、琴は螢兵部卿宮彈き給ふ、この御樂器は、宜陽殿の御物にて、代に第一の名ありし御琴なりしを、故院桐壺の末つ方、朱雀院の御同腹の皇女、一品宮宮女一好み給ひし御琴にて、賜はり給へりけるを、此度の御賀に、清麗を盡し給はむとする爲に、大臣の申し賜はり給へる、主人の院は、この御琴の、故院よりの傳歴を思すに、いとあはれに、昔のことも戀しく思し出でらる、螢親王も、酔ひ泣きえ止め給はず、親王、院の御氣色とり給ひて、琴は御前に譲り申させ給ふ、院は物の面白さをえ過し給はで、珍らしきもの一曲ほど弾き給ふに、盛大しからねど、限な

青柳○催馬樂に青柳を片糸によりて置けや鶯の縫ふてふ小笠はおけや梅の花笠とあり

年月の○孟津抄に年月の行くへもしらぬ山かづは瀧の音にや春を知らんとあり
數へ知らせ
○細流抄に
數へしる人

く愉快き夜の御樂遊なり、唱歌の人々、御階に召して、優れたる聲の限り出して、呂律になる、夜の更け行くまゝに、音樂の調子ども、懐かしく變りて、青柳遊び給ふ間、實に埒の鶯驚きぬべく愉快し、私事の様に爲成し給ひて、祿などいと結構に設けられたりけり、曉に玉葛君歸り給ふ、院よりは御贈物などありけり、

(源) かく世を捨つるやうにて、明かし暮らす間に、年月の行く邊も知らず顔なるを、かく數へ知らせ給へりけるにつけては、心細くぞある、時々は、老や勝ると見給ひ比べよかし、かく古るめかかしき身の、所狭く思ふまゝに、對面なきも、いと口惜しくぞある、
など申し給ひて、愛憐にも、面白くも、思ひ出で申し給ふこと

玉葛侍若
菜献上圖

玉葛君

若菜さす

野邊の小

松をひ

きつれて

もとの

いは根を

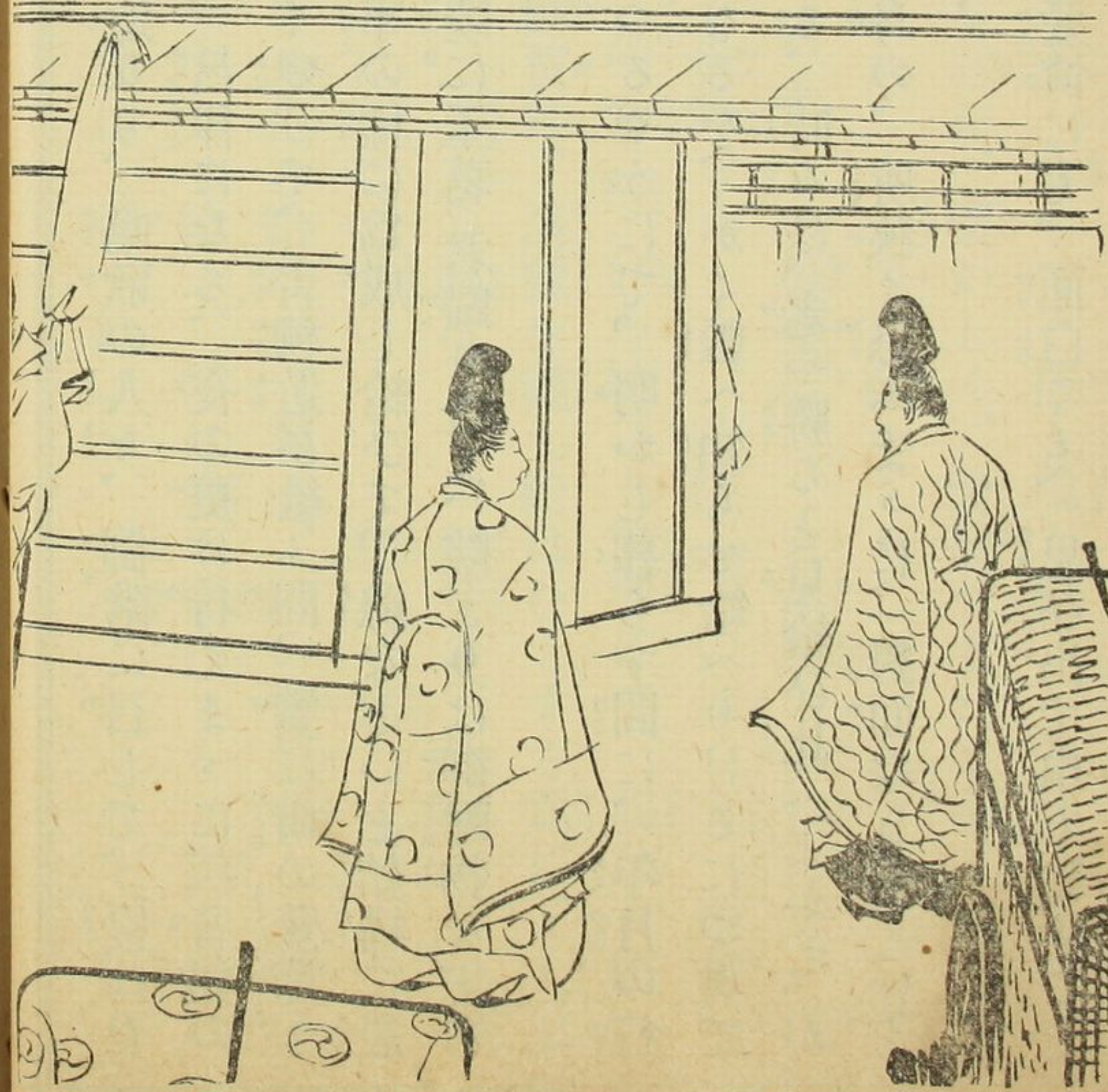
いのる

今日かな



○若菜上

五十八



六條院
小松原

すゑの

よほひ

に引か

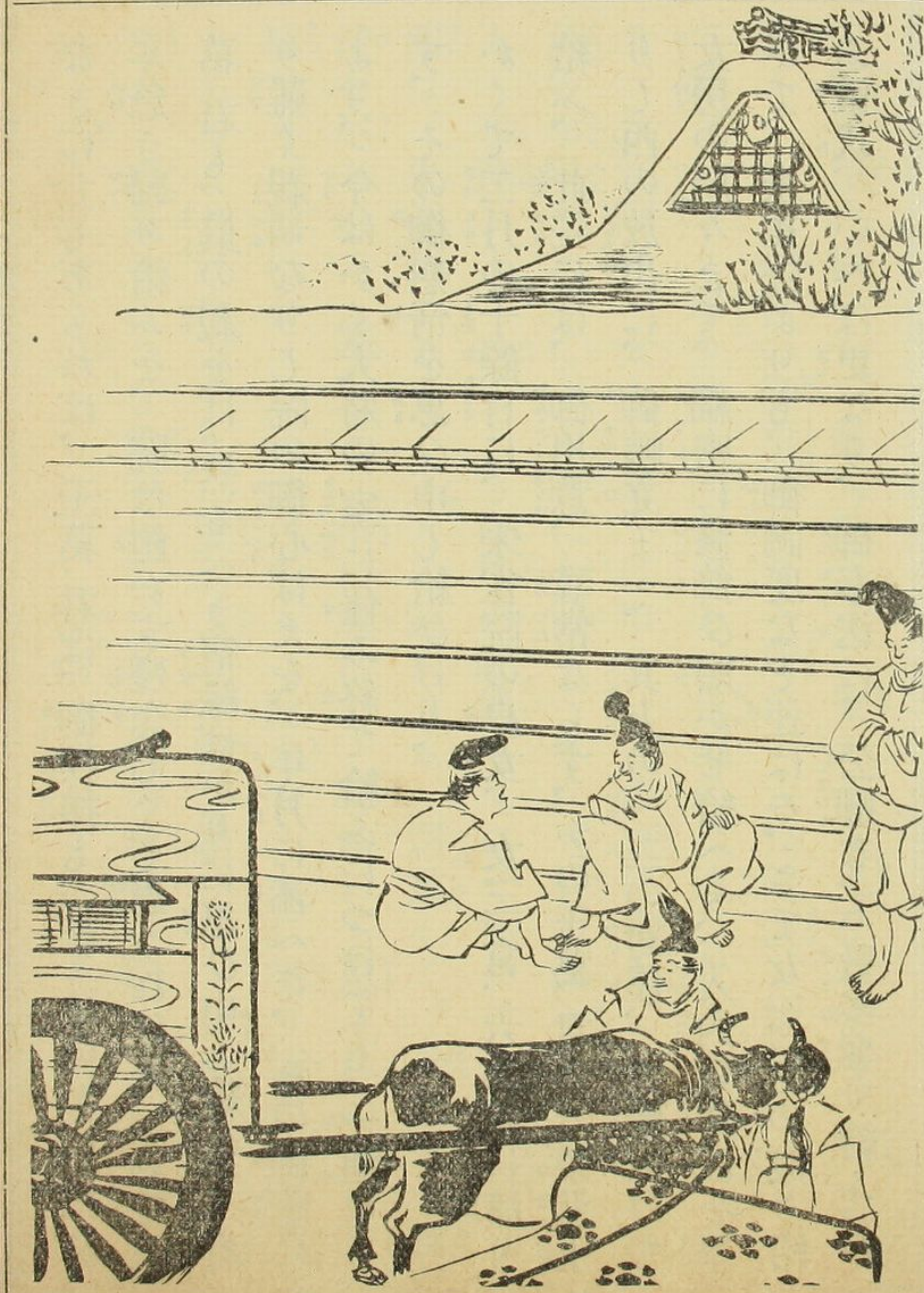
れてや

野邊の

若菜も

年をつ

むべき



○若菜上

五十九

なかりせば
いたづらに
谷の松とや
年をつま
しとあり

女三宮徒
六條院

なきにしもあらねば、玉葛君は、御挨拶も、却てほのかにて、かく急ぎ歸り給ふを、院は飽かず残念しくぞ思されける、さて玉葛君も、眞の親をば、然るべき宿縁ばかりに思ひ申し給ひて、有り難く親切なりし院の御心ばえを、年月に添へて、その御蔭により、今はかく大將の室に住み終て給ふにつけても、一通ならず、その御懇情を思ひ申し給ひけり、かくて二月の十餘日に、朱雀院の皇女、女三宮、六條院に渡り給ふ、此院には、御用意、尋常ならず、かの玉葛君の若菜進上りし西の放出に、御帳立て、其方の一二の對屋、渡殿兼けて、女房の局々まで、細密に修飾ひ磨かせ給へり、入内の作法を學びて、朱雀院よりも、御調度など連ばる、さて女三宮の渡り給ふ儀式、いへば更なり、御奉送に、公卿など、數多參り給ふ、か

聳の諸王○
催馬樂に大
君きませ聳
にせむ云々
箒木の頭注
に出つ

の家司望み給ひし、藤大納言も、安からず思ひながら、侍らひ給ふ、さて姫宮の御車寄せたる所に、六條院渡り給ひて、やがて姫宮を下し奉り給ふ間なども、先例には違ひたることどもなり、六條院は、太上天皇とは申せ、その實は常人におはすれば、萬の事限りありて、入内にも似ず、されど聳の諸王といはむにも、事違ひて、珍らしき御中の配偶どもにぞありける、三日が間は、朱雀院よりも、主人の院よりも、嚴重しく、珍らしき風流を尽し給ふ、紫、上も、事に觸れて、尋常にも思されぬ身の有様なり、實にかゝるにつけても、此上なく人に劣り消たる、ことあるまじけれど、また雙ぶ人なく慣ひ給ひて、花やかに生先遠く、輕蔑りにくき氣容にて、女三宮の移徙ひ給へるに、紫、上は、生不都合く思さるれど、無情くばかり待遇して、女三宮の

御渡りの間も、院と諸心に、はかなき事ども爲出で給ひて、いと可愛げたる御有様を、院は有り難しと思ひ申し給ふ、女三宮は、實にまたいと小く、片成におはする中にも、いと幼なき御氣色して、一向に若び給へり、院は、かの北山にて、紫の縁尋ね取り給へりし折、思し出るに紫上は、洒落ていふかひありしを、女三宮はいと幼なくのみ見え給へば、よかるめり、憎げに養育たることなどは、あるまじかるめりと思すものながら、いと餘り物の光榮なき御様かな、と見奉り給ふ、三日が間は、夜離なく、院は女三宮の御方へ渡り給ふを、紫上は、年來さやうにも習ひ給はぬ心地に、忍ぶれど猶物哀なり、御衣どもなど、いよく、吾が香に焼き染めさせ給ふもの、紫上、打詠めて物思ひ爲給ふ氣色、いみじく可愛げに面白し、院は御心に、何ど

て萬の事ありとも、紫上の外には、また女をば並へて見るべきぞ、仇々しく心弱くなりける我が怠慢に、女三宮を引受くるやうなる事も、出で来るぞかし、若けれど、中納言霧は、眞實なれば、雲井、雁の外には、他し女は引受けまじと、朱雀院は思して、中納言には、え思し懸けずなりぬなるめりしを、と今更我ながら辛く思し續けらるゝに、涙催まれて、紫上に、
 (源) 今夜ばかりは、女三宮へ參ることも、道理と許し給ひてむな、これより後の間絶あらむこそ、全く此身の怠慢にて、我ながら不都合るべけれ、またさりとて、彼の御父院の、聞召さむこともあはれよ、
 と思ひ亂れ給へる御心の中、いと苦しげなり、紫上は、少し含笑みて、

目に近く云々
○源氏の御心の目前に變るをも知らで長く頼みしことよとなり
命こそ云々
○限ある命は絶ゆとも二人が中の契約は尋常に異なれば變るまじとなり

(紫) 今より問絶あらじと宣ひながら、また朱雀院の思さむこと、思ひ給ふなるめれば、御自身の御心にさへ、え定め給ふまじきことを、況して某は道理なりとも、何とも、いかでかえ定め候はむ、

といふかひなげに、執り成し給へるに、院は、耻しくさへ覺え給ひて、頼杖をつきて、倚り臥し給へれば、紫上は、御硯を引き寄せて、

(紫歌) 目に近く、うつれば變る、世の中を、行く末遠く、頼みけるかな、

とて、古言など書き交ぜ給ふを、院は、取りて見給ひて、果敢なきことなれど、實にと、道理にて、

(源歌) 命こそ、絶ゆともたえめ、定めなき、よの常ならぬ、中

の契りを、

かくて六條院は、頼にも女三宮の御方へ渡り給はぬを、紫上は、いと御氣の毒なる業かな、と勧誘し申し給へば、院は御装束、柔和に、面白き程に、薰物一通ならず匂はせて、渡り給ふを、紫上は見出し給ふも、御心の中、いと尋常にはあらずかし、さて御心に、權齋院などの事につけても、年頃さもやあらむと思ひしことども、今はさやうの事も全く持て離れ給ひつゝ、さては君の御心も、かく定まり果て給ふものによ、と打解け行く末に、現在ありて、今更彼の姫宮を、引受け申す如き、世間の評判も、一通ならぬことの出で來ぬるよ、かくてはまた思ひ定むべき世の有様にもあらざりければ、今より後も、いかゞ成り行くならむと不安心くぞ思し成りぬる、紫上は、さやうにこそつれなく紛

らはし給へど、伺候ふ女房達も、案外なる世なりや、院は妃妾の御方々、數多ものし給ふやうなれど、何方も皆紫、上の御氣容には、所を置き、遠慮る様にて、過し給へばこそ、無事く平穩にもあれ、さるを今度、女二宮御渡りありて、かくばかりなる有様に、吾が主君の、厭倒されてもえ過し給はず、またさりとて、果敢なき事につけても、不安らぬ事のあらむ折々、必煩はしきことども出て來なむかし、など各自打語らひ、歎かしげなるを、紫、上は、少しも見知らぬやうに、氣容いと美しく、物語などし給ひつゝ、夜更くるまでおはす、かく女房どもの、一通ならず言ひ思ひたるも、聞き悪しと思して、

(紫) 吾君には、女君此彼、數多ものし給ふめれど、御心に叶ひて、當世めかしく勝れたる分際にもあらず、と目馴れて物

寂しく思したりつるに、かの三宮の、かく渡り給へるこそ、安心けれ、かの姫宮は、尙童心の失せぬにやあらむ、我も睦び申してあらまほしきを、あいなく妬隔ある様に、人々や執り成さむとすらむ、彼の姫宮は、我と同等しき程、或は劣り様の、など、挑み思ふ人にこそ、一通ならず耳立つことも、自然出で來る業なれ、彼の姫君は、皇女といひ、殊には辱なくも、朱雀院の切なる御依頼なるめれば、吾は、いかで心置かれ奉らじとぞ思ふ、

など言へば、女房中務、中將、君などやうの人々、互に目を交せつゝ、餘りなる御思ひ遣りかな、などいふべし、この女房達、昔は院も普通ならぬ様に、使ひ馴らし給ひし人どもなれど、年來は紫、上の御方に伺候ひて、皆心寄せ申したるなるめり、此度女

我身までの
事は○六帖
にいかにか
と思ふ心の

紫上聞怨

三宮の渡らせ給ひしにつけては、花散里や、明石上の如き、他御方々よりも、紫上の、いかに思すらむと、舊より思ひ見馴れたる人々は、却て心安ければ、さやうに面向けつゝ、紫上の機嫌をはかりて、訪らひ申すもあるを、紫上は、かく推量る人こそ、却て苦しけれ、世の中も、いと無常きものを、何どてか、さやうにばかり、深くも思ひ悩まむ、など思す、さて紫上は、久しき夜居も、例ならず人や咎めむ、と吾ながら心の鬼に思して、御寢所に入り給ひぬれば、御夜具参りぬれど、實に傍寂しき夜夜經にけるも、尙尋常ならぬ心地すれど、かの須磨の御別の折を思し出れば、今はと院に懸け離れ給ひても、唯同じ世の内に聞き奉らましかば、かくても遺憾には思はじ、と我身までの事は、打置きて、今更須磨の別離を、新しく悲しく思して、さて

ある時は我
身をおきて
人ぞ戀しき
とあり

その別離の間切に、我も君も命堪へずなりなましかば、いふかひある世とはいはれまじ、と今宵一夜の離居をば、思し直す、風打吹きたる夜の景容、冷にて、ふとも寝入られ給はぬを、紫上は、近く伺候ふ女房ども、怪しとや聞かむと思して、打身動き給はぬも、尙いと苦しげなり、夜深き鶏の聲の聞えたるも、物哀なり、紫上は、故意と辛しとはあらねど、かやうに思ひ亂れ給ふ故にや、院の御夢に見え給ひければ、院は打驚き給ひて、いかなることにとやと、心騒がし給ひて、早く紫上の方へ歸りまさむと、鶏の音待ち出で給へれば、夜深きも知らず貌に、急ぎ出で給ふ、女三宮は、幼なき御有様なれば、乳母達近く伺候ひけり、院は妻戸押開けて出で給ふを、乳母達見奉り送る、明け昏き空に、雪の光見えて、おぼつかなし、名残まで留まれる御移香

やみはあやなしと乳母達、獨言たる、雪は所々消え残りたるが、いと白き庭の、ふと雪と砂との區別見え分かれぬ程なるに、

(源) 猶残れる雪、

と忍びやかに、口吟み給ひつゝ、紫上の御方の、御格子打叩き給ふも、久しくかゝる夜離たる例なかりつる習慣に、女房ども、空睡をしつゝ、やゝ暫く待たせ奉りて、御格子引き上げたり、

(源) 此上なく久しく待たせたりつる故に、身も冷にけるは、これも其方に畏ち申す心の、疎略ならぬにこそあるめれ、されば罪もあるまじ、

とて、紫上の御衾、引き遣りなどし給ふに、紫上は、少し涙に濡れたる御單の袖を引隠して、裏心もなく懐かしきものながら、また打解けてもあらぬ御用意など、いと耻しげに美し、院は御

やみはあやなし古今集に春の夜のやみはあやなし梅の花香をたづねてぞ知るべかりけるとあり
猶残れる雪
○白樂天の詩に于城陰處猶殘雪とあり于城は北方にて紫上の方は北なり

心に、女二宮は、此上もなき人と聞ゆれど、紫上ほどの用意は缺けたり、少しも批難なき人は、世に有り難かるめる、と思し比較べらる、院は、萬事紫上の幼なかりし、古の事ども思し出でつゝ、紫上の打解け難き御氣色を、恨み申し給ひて、その日は暮らし給へれば、女二宮の御方へは渡り給はで、女二宮の居給ふ寢殿には、御消息をぞ申し給ふ、

(源文) 今朝の雪に、心地損ひて、いと惱ましく候へば、心安き方に、猶豫ひ候ふ、とあり、御乳母出で、

(乳) 姫宮に、然申上げ候ひぬ、とばかり、口上にて申したり、院は御心に、特別なること無の御返事よと思す、朱雀院に、かく聞召さむことも、いと御氣の

六條院消
息女三宮

中途を云々
○障る程の
雪にはあら
れど思ひ亂
るゝとなり

毒なれば、當分ばかり修飾はむと思せど、さやうにもえ爲られぬを、豫てより女三宮は、紫上には、萬事及ぶまじとは思ひしことぞ、さはいひ、父院の御爲を思へば、あな苦し、と自思ひ續け給ふ、紫上も、姫宮の、あまり思ひ遣りなき御心かな、と苦しがり給ふ、さて六條院は、紫上の御方に、今朝は例のやうに御寝起きさせ給ひて、女三宮の御方に、御文奉り給ふ、姫宮は、殊に耻しげもなき御様なれど、御筆など引き修ひて、白き紙に、

(源歌) 中途を、隔つる程は、なけれども、心亂るゝ、今朝の沫雪、

とありて、梅枝に附け給へり、人召して、西の渡殿より奉らせよ、と言ひ、やがて見出して、端近くおはします、白き御衣ど

友待つ雪○
家持集に白
妙の色わき
がたき梅が
枝に友待つ
雪と消え残
りけりとお
り

もを着給ひて、文附けたりし梅の、残りたる花を手探り給ひて、友待つ雪の、ほのかに残れる上に、またも打散り添ふ空を詠め給へり、鶯の若やかに、近き紅梅の梢に、打啼きたるを、袖こそ匂へと、花を引き隠して、御簾押上げて詠め給へる様、夢にも、かゝる姫君の准父にて、重き太上皇と見え給はず、若く艶めかしく御様なり、女三宮の御返詞、少し間経る心地すれば、院は内に入り給ひて、紫上に花を見せ奉り給ふ、

(源) 花といはぶ、かくこそ匂はまほしけれな、この香、櫻に移しては、やがて櫻にはかり心引かれて、また塵ほども、他に心を分く方なくやあらまし、

と言ふ、
(又) 梅も、數多の花うつろはぬ先に咲けば、目留るにやあら

女三宮返詞

はかなくて
云々○源氏
の夜離を恨
みたるなり

む、櫻の盛に並べて見ばや、
 など言ふ間に、女三宮より御返詞あり、紅の薄葉に、鮮かに押
 包まれたるに、御書のいと若きを、院は胸潰れて、この御手跡
 暫時は紫上に見せ奉らであらばや、隔意とはなけれども、御手
 跡の、かくあはくしきやうならむは、女三宮の御爲にも、却
 て畏多しと思すに、引隠し給はむも、心置き給ふべければ、片
 側廣げ給へるを、紫上は側目に見越せて、添ひ臥し給へり、
 (三歌) はかなくて、うはの空にぞ、消えぬべき、風に漂ふ、春
 の沫雪、
 御書、實にいと若く幼げなり、皇女として、あれほどの年輩に
 成りぬる人は、いとかくはおはせぬものを、と紫上は目留むれ
 ど、見ぬやうに紛らはして止み給ひぬ、院は御心に、他人の上

六條院詣
女三宮

ならば、御手跡の様、さやうにこそあれ、など忍びて申し給ふ
 べけれど、これはいと御氣の毒にて、紫上に、
 (源) たゞ心安く、思ひ成し給へ、
 とばかり申し給ふ、今日は六條院は、女三宮の御方に晝渡り給
 ふ、心特別に打懸想じ給へる御有様、今見奉る女房などは、況
 して見るかひありと思ひ申すらむかし、御乳母などやうの、老
 いぼれたる人々ぞ、いでやこの御有様、紫上一所に取れてこそ
 愛甚けれ、姫宮に取りては、却て目覺しく、憂きことは出で來
 なむかし、と打交せて思ふもありけり、女三宮は、いと可愛げ
 に、幼き様にて、御装束などの、盛装しく、世長て端正しきに、
 御自身は、何心もなく、物はかなき御程にて、いと御衣がちに、
 身もなく細小なり、特に耻ぢなどもし給はず、たゞ乳兒の面嫌

せぬ心地して、心安く美しき様し給へり、御父帝朱雀院は、雄しく剛直なる方の、御學問などこそ、心得なくおはします、と世の人思ひたるめれ、風流しき筋、艶めき由緒々々しき方は、人に勝り給へるを、皇女は、何どてかく平庸に、養育て給ひけむ、然るは、いと御心留め給へる皇女と聞きしを、と院は思ふも、生口惜しけれど、憎からず見奉り給ふ、かくて女三宮は、院の申し給ふまゝに、なよくと靡き給ひて、御返答などを、覺え給ひけることは、幼なく打言ひ出で、笑み放たず見え給ふ、院は昔の若き間の心ならましかば、うたて心劣りせましを、今は世間を皆様々に思ひ平らめて、とあることも、かゝることも、群を抜き出でたるは難きものなりけり、銘々にこそ足はぬところ多くはありけれ、餘所の見る目には、女三宮は、吾が本臺とし

ても、いとあらまほしき分限なりと思すに、昔より差雙び、目離れず見奉り給へる年頃よりも、今の御有様ぞ、尙有り難く、我ながら、よく教育てけりと思す、かく女三宮を預り後見たまふにつけては、却て紫上をば、一夜の間、朝の間も、戀しく心配く思して、いとゞしき御志の勝るを、何どてかく覺ゆらむ、と忌々しきまでぞ思しける、朱雀院は、この月の内に、仁和寺に移徙ひ給ひぬ、さて六條院に、哀なる御消息ども申し給ふ、皇女女三宮の事は、言ふも更なり、煩はしく、いかに聞く所やあらむ、と憚り給ふことなくて、ともかくも、唯御心に懸けて、待遇し給ふべくぞ、度々申し給ひける、されど姫宮の、まだ幼稚くおはするを、愛憐に不安心く思ひ申し給ひけり、紫上にも、朱雀院より、特別に御消

遠からぬ間柄○紫上と女三宮とは母方の従姉妹なり
背きにし○世を捨て、山に入るに尙此世に残る心はその路の羈絆なりとて古今集の世にうきめ見えぬ山路に入らむには思ふ人こそほだしなりけりとあるを引

息あり、

(朱文) 三宮の、幼稚く無心き様にて、移徙ひものすらむを、罪なく思し免して、後見たまへ、其方とは、遠からぬ間柄にて、尋ね給ふべき由緒もやあらむとぞ覺ゆる、背きにし、この世に残る、心こそ、入るや山路の、羈絆なりけれ、闇をえ霽らさで申すも、愚痴がましくやあらむ、

とあり、六條院も見給ひて、紫上は、

(源) 哀なる御消息を、無益に思ひ給ふな、御返詞、畏まり申し給へ、

とて、彼方の御使にも、女房して、蓋差出させ給ひて、御酒強ひさせ給ふ、紫上は、御返詞いかゞせむ、など申し難く思したれど、仰山しく面白かるべき折のことならねば、唯懐を述べて、

(紫歌) 背く世の、後めたくば、去り難き、羈絆を去ひて、懸けな離れそ、

などやうにぞあるめりし、御使には、女の装束に、細長添へて纏頭け給ふ、紫上の御書などの、いと優美きを、朱雀院御覽じて、何事も打揃ひて、耻しげなるめる邊に、吾が姫宮の、幼稚くて見え給ふらむこと、いと心苦しく思したり、かくて院には、御寺へ移り給ふに、今はとて、女御更衣達など、各自別れ給ふも、哀なることぞ多かりける、

朧月夜尙侍は、故弘徽殿、太后のおはしまし、二條宮にぞ住み給ふ、皇女女三宮の御事を差置きては、朱雀院は、この尙侍の御事をぞ、顧みがちに思したりける、尙侍は、かくて尼になりなむと思したれど、院の御寺に移徙ひ給へればとて、直に尼に

きたるなり闇を云々○孟津抄に人の親の心はやみにあられども子を思ふ道にまどひぬるかたとあり背く世の云々○此世に残る御心あらば強ひて世を捨て給ふなとなり細長○女の装束の一具なり二條宮○此はもと太后の父大臣の邸なり

なりては、競ひ慕ふやうにて、執着がましく、心惚忙し、と自ら制め給ひて、漸々に佛の御事など、用意せ給ふ、六條院は、尙侍には愛憐に飽かずばかり思ひて、中止にし御邊なれば、年來も忘れ難く、如何ならむ折に、對面あらむ、今一度相見て、當時の事ども、申さまほしくばかり思ひ渡るを、院も尙侍も、互に世の外聞も、憚り給ふべき身の分限に、かの須磨の謫居など、いとほしげなりし世の騒動なども、思し出でらるれば、萬事に包み過し給ひけるを、かく長閑に成り給ひて、一人が交情を、思ひ鎮まり給ふらむ頃ほひの、御有様、いよくゆかしく、待遠ければ、今更尙侍へ音信し給ふは、あるまじきこと、は思しなから、大方の御訪問に託けて、愛憐なる様に、毎に御消息申し給ふ、尙侍も今は若々しかるべき御交情ならねば、御返事も、時

時につけて、申し交し給ふ、尙侍の御消息の、昔よりも、此上なく打具し整へ果てにたる、御氣容を見給ふにも、尙忍び難くて、昔の媒介申し、女房中納言君の許にも、心深きこと、常と言ふ、中納言君の兄なる、和泉前司を召し寄せて、若々しく、古に返りて語らひ給ふ、
 (源) 彼の尙侍君に、人傳ならで、直接に物越に申し知らすべきことぞある、然りぬべく申し靡かして、いみじく忍び参らむ、今はさやうの微行も、所狭き身の分際に、一通ならず忍ぶべきことなれば、其方にも、また他人には漏らし給はずと思ふに、互に後安くぞある、
 と言ふ、尙侍君は、いでや世の中を思ひ知るにつけても、昔より六條院の、辛き御心を、幾多思ひ詰めつる年來の終に、朱雀

心の問はむ
○細流抄に
なき名ぞと
人はいひ
てありぬべ
し心の問は
ばいかゞ答
へむとあり

六條院訪
臈尚侍
立ちにし我
名○古今集
に村鳥の立
ちにし我名
今更にこと
なしふとも
しるしあら
めやとあり

信田森○花
鳥餘情に和
泉なる信田
の森の楠の
葉の干枝に
分れて物を
こそ思へと
あり森は道
のしるべに
なる故にや
がて和泉前
司を案内と
する意なり

○若菜上

院の、哀に悲しき山籠りの御事を差置きて、今更六條院と、如何なる昔語をか申さむ、實に他人は漏り聞かぬやうありとも、心の問はむこそ、いと愧かしかるべけれ、と打長息き給ひつゝ、尙更に御對面はあるまじき由のみ、前司して、御返答申さしむ、院は御心に、古父大臣の世に在して、面倒かりし時にてさへ、心交はし給はぬことにしもあらざりしを、實に今朱雀院世を背き給ひぬる御爲には、不安心きやうにはあれど、これまで相見しことのあらざりしにもあらねば、今しも明白に清潔りたりとて、立ちにし我名、今更に取返し給ふべきかは、と思し起して、この信田森を、道の案内として、和泉前司を先駈にたて、臈月夜、尙侍の方へ、詣で給ふ、紫上には、

(源) 東の院に居給ふ常陸君末摘花の、日頃煩らひて、久しくな

りにけるを、此間の物騒がしき紛雜に、訪問はねば、いと氣の毒にぞある、晝など、明白に渡らむに、便なきを、夜の間に、忍びて渡らむとぞ思ひ候ふ、他人にもかくとも知らせじ、と申し給ひて、いと甚く心懸想し給ふ、紫上は、院の常陸君に對けては、これまではさやうにも見えぬを、怪しと見給ひて、臈尚侍の事、思ひ合せ給ふこともあれど、女三宮の御事の後は、何事もいと過ぎぬる方のやうにはあらず、少し隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす、その日、院は寢殿の、女三宮の御方へも渡り給はで、御文書き交し給ふ、さて尙侍の方へ參り給ふ御用意に、薰物など心を入れて、暮らし給ふ、宵過して、睦しき近侍の限り、四五人はかり、網代車の昔覺えて、瘦れたる姿にて、忍びて出で給ふ、尙侍へは、和泉前司して、御消息申し給

○若菜上

ふ、前司は六條院の、かく渡りおはしましたる由、私語き申せば、尙侍は驚き給ひて、

(臈) 怪しく、先方へは、如何やうに申したるにかあらむ、と立腹り給へど、

(和) 無情くて、返し奉らむには、いと便なく候はむ、とて、強に思ひ廻して入れ奉る、院は、久々の御訪問など申し給ひて、唯此處にて、物越にても對面申さむとて、

(源) 更に昔のあるまじき心などは、皆無になりけるを、無理く申し給へば、尙侍は甚く歎くく、膝行り出で給へり、院は御心に、さればよ、尙氣近さはと、且は思さる、互に通ならぬ御身動なれば、哀も尠からず、こゝは二條邸の、東の對なりけり、巽の方の廂に、六條院を居る奉りて、御障子の

後は、差固めたれば、やがて院は尙侍に、

(源) いと若やかなる心地もするかな、逢はで久しき年月の積りをも、紛れなく敷へらるゝ心習慣に、かく耄却かしきは、いみじく辛くこそあれ、

と申し給ふ、夜いたく更け行く、玉藻に遊ぶ鴛鴦の聲々など、哀に聞えて、あめくくと人目少き邸の内の有様に、二條相國弘徽殿太后并に尙侍の昔を回想れば、さやうにも移り行く世かな、と思し續くるに、平仲がまねならねど、眞に涙脆にぞありける、院は昔に變りて、大人々々しくは申し給ふものながら、この御障子、何時までかくてのみあるべきやは、と引き動かし給ふ、

(源歌) 年月を、中に隔て、逢坂の、さもせき難く、落つる涙か、

玉藻に遊ぶ
○細流抄に
春の池の玉
藻に遊ぶ鳩
鳥の足のい
となき戀も
するかなと
あり
平仲○平仲
が空泣の事
末摘花の帖
に擧げたり
年月を云々
○久しく逢
ひ難かりし
ことよとて
障子を逢坂
關にたとへ
て涙のせき
を關にかけ
たり

と言へば、尙侍、

涙のみ云々
○涙は盡せ
て逢ふ事は
絶え果てた
りとなり

(麗歌) 涙のみ、せきとめ難き、清水にて、行き逢ふ道は、早く絶えにき、

など、懸け離れ申し給へど、古を思ひ出づるに、男君の須磨の
謫居も、誰ゆるるに、然るいみじきこともありし世の騒動ぞ、と
思ひ出づれば、皆吾身より起りしことなるめれば、實に今一度
の對面は、ありもすべかりけり、と思し弱るも、元來尙侍は謹
慎なる所おはせざりし人にて、年頃は様々に世上を思知り、過
去方を後悔しく、公私の事に觸れつゝ、無數く思し集めて、何
事もいといたく経過し給ひにたれど、今昔覺えたる久々の御對
面に、當時の事も遠からぬ心地して、え心強くも待遇し給はで、
遂に隔を許して逢ひ奉りぬ、今もなほ尙侍の愛々しく、若う懐

藤の宴○二
條右大臣の
邸に藤宴せ
しこと花宴
帖にあり

この蔭○古
今集に今日
のみと春を
思はぬ時だ
にも立つこ
とやすき花

かしくて、一方ならぬ世の愼ましさを、哀をも思ひ亂れて、長
息がちにてもものし給ふ氣容など、院は今始めたらむよりも、珍
らしく愛憐にて、夜の明け離るゝも、いと口惜しくて、出で給
はむ空もなし、朝ぼらけの一通ならぬ空に、百千鳥の聲も、い
と麗和なり、花は皆散り過ぎて、名残霞める梢の淺緑なる木立、
昔藤の宴し給ひしは、此頃のことなりけむと思し出るに、年月
の積りにける程も、その折の事搔き續け、あはれに思さる、女
房中納言君、見奉り送るとて、妻戸押開けたるに、院、立返り
給ひて、

(源) この藤よ、いかに染めけむ色にかあらむ、猶一通ならぬ
心添ふ匂にこそあれ、いかでかこの蔭は立離るべき、
と言ひて、無理く出で難に思し休息ひたり、山際より差出る日

のかけかな
とあり

の、花やかなるに、院の御光の射合ひ、目も輝く心地する御様の、此上なく壯び加はり給へる御氣容などを、中納言、君は、珍らしく、程經ても見奉るは、況して尋常ならず覺ゆれば、吾主君をば、何どてか院に娶して、見奉り過し給はざらむ、さるを強ひて御宮仕に出し奉りしを、それさへ制限ありて、僅に尙侍に止まりて、女御にもなり給ふこともなかりしを、故太后、宮後殿太の、萬事に心を盡して、源氏須磨の左遷など、よからぬ世の騒ぎに、主君の軽々しき、御名さへ響きて止みにしよ、など思ひ出らる、餘波多く残りぬらむ御物語の結局には、實に今少し残りあらせまほしき業なるめるを、院は御身を心にえ任させ給ふまじく、幾多の人目もいと恐しく、慎ましければ、漸く朝日の差異り行くに、心惚忙しくて、廊の外に、御車差寄せたる

沈みしも云々○須磨の
謫居も懲り
すに又朧月
夜尙侍に關
係すとして懲
りすまに須
磨藤原に淵
波をかけた
り古今集に
こりすまに
又もなき名
は立ちぬべ
し人にくか
らぬ世にし
すまへばと
ありこれに
よれり
身をなげむ

御迎の人々も、忍びて聲作り申す、院は人召して、かの咲き懸りたる藤花、一枝折らせ給へり、
 (源歌) 沈みしも、忘れぬ物を、こりすまに、身をなげつべき、
 宿のふぢ波、
 と言ひて、いと甚く思し煩らひて、倚り居たまへるを、中納言、君、御氣の毒に見奉る、尙侍も今更にいと慎ましく、様々に思ひ亂れ給へるに、院の蔭、否、花の蔭は、尙懷かしくて、
 (朧歌) 身をなげむ、ふちも眞の、淵ならで、かけじや更に、こりすまの波、
 と申す、院はいと若やかなる、吾が御舉動を、吾が心ながらも、許さぬことに思しながら、今尙侍の寡居にて、關守の堅固からぬ撓みにやあらむ、いと能く語合ひ置きて出で給ふ、當時も他

云々○君の言は眞實ならねば我は心に懸けず前に懲りたればといひてさて眞實なれば又更に靡かむとの意を前の文に含めたり

人より、此上なく心留めて思ひ給ひし御志ながら、暫時にて中止にし御交情には、いかでか哀感も少からむ、六條院は、いみじく忍びて、我方に入り給へる、御寝顔の様を待ち受けて、紫上は、臙、尙侍の方よりおはしたるならむ、と心得給へれど、わざと耄却かしく待遇しておはす、院は御心に、却て打嫉妬などし給へらむよりも、心苦しく、何どてかくも見放ち給へらんと思さるれば、ありしよりげに、深き契をばかり、永き世を懸けて申し給ふ、尙侍の御事も、また漏すべきならねど、紫上は、古の關係も知り給へれば、
(源) 尙侍君には、正面にはあらねど、物越に、少時なりつる対面せしぞ、残りある心地する、いかで人目咎めあるまじく、持て隠して、今一度も対面せまほし、

中空○伊勢物語に中空に立居る雲のあともなく身のばかりにけるかなとあり

と語らひ申し給ふ、紫上は、打笑ひて、
(紫) 當世めかしくも成り返る御有様かな、昔を今に改め加へ給ふ程、却て中空なる身の爲、苦しく候ふ、
と申して、涙催み給へる、髪のと可愛げに見ゆるに、
(源) かく心安からぬ御氣色こそ苦しけれ、唯大様に恨み給ふことあらば、その點を指し摘みなどして教へ給へ、隔心あるべくも習はし申さぬを、案外にこそなりにける御心なれ、
と言ひて、萬事に御機嫌取り給ふ間に、何事もえ残し給はず白状し給ひしなるめり、女三宮の御方にも、頓にえ渡り給はず、よき様に假作へ申しつゝ、おはします、女三宮は、何とも思してあらぬを、御後見の女房どもぞ、安からず申しける、姫宮の、煩はしく恨み給ふ御心にても見え給ふ御氣色ならば、其方も況し

明石中宮退
出里邸

て心苦しかるべきを、然あらざれば、大様に、美しき翫弄物に、
 思ひ申し給へり、
 桐壺の御方明石中宮は、入内の後、主上院冷泉の御寵愛いみじけ
 れば、打絶えて御里邸二條院へ退出で給はず、主上御側に纏は
 し給ひて、御暇の有り難ければ、御里邸にて、心安く習慣ひ給
 へる若き御心に、いと苦しくばかり思したり、夏頃病惱しくし
 給ふを、主上には頓にも御暇許し申し給はねば、中宮いと困却
 しと思す、この御惱は、珍しき御懷妊の御心地にぞありける、ま
 た十三四歳の、いと幼少なる御間に、御懷妊の様、いと忌々し
 くぞ、誰もくも思すらむかし、かくて中宮は、辛うじて、御
 暇賜はり、退出で給へり、女三宮のおはします寢殿の、東面に、
 御住室修飾ひたり、御實母明石御方、今は御身に添ひて、出で

入り給ふも、あらまほしき御宿因なり、紫上、此方に渡りて、中
 宮に對面し給ふ序に、

(紫) 女三宮にも、中の戸開けて、對面申さむ、豫てよりも、さ
 やうに思ひしがど、序なきには慎ましきを、かゝる折に、對
 面申さば、心安くぞあるべき、

と、六條院に申し給へば、院は打笑みて、

(源) そはいと思ふ様なる御對面にこそはあるなれ、女三宮は、
 いと幼げにもものし給ふめるを、何事も後安く教へ成し給へ、
 と、許し申し給ふ、紫上は、御心に、女三宮よりも、明石中宮
 の、耻しげにて交際はむを思せば、御髪すまし、引き修ひておは
 する様、比類あらじと見え給へり、院は、女三宮の御方に渡り
 給ひて、

(源) 夕方、かの西對に居候ふ紫、上の、桐壺、中宮明石中宮に對面せむとて、出で立つ序に、其方に近づき申さまほしげにもものすめるを、許して語らひ給へ、彼人は、心などは、いと善き人なり、また若々しくて、御遊相手にも、相應なからずぞある、など申し給ふ、女三宮は、

(三) 耻しうこそはあらめ、何事をか申さむ、と、大様に言へば、

(源) 人への應答は、事に従ひてこそは思し出でめ、何事も、隔て置きてな待遇し給ひそよ、

と委細に教へ申し給ふ、院は女三宮と紫、上と、御中好善しくて過し給へ、と思す餘りに、女三宮の、何心なき御有様を、紫、上に見顯されむも、耻かしく味氣なけれど、紫、上より、對面せむ

と言はむを、心隔て、押遮ぎらむも、無愛と思すなりけり、紫、上には、かく二所に對面せむと用意などし給ふもの、この院の内にては、我より上の人やあるべき、唯嫁娶の儀式もなく、こゝに參れる様を、見せ置き奉りたるばかりこそ、遺憾ならめ、など思ひ續けられて、打案め給ふ、手習などするにも、自然と古言ども、物思はしき筋のみ書かるゝを、さらば我身には、心中に、思ふことありけり、と自ぞ思し知らるゝ、院、此方へ渡り給ひて、女三宮、明石、中宮などの、御有様どもを、美しくもおはするかな、と様々見奉り給へる御目移しに、紫、上を見給ひては、年來見馴れ給へる御姿の、一通ならむが、いとかく驚かるべきにもあらぬを、尙比類なくこそはありけれと見給ふ、實に有り難きことなりかし、さて院は御心に、紫、上は、あるべき

限り氣高く、耻しげに整備へたるに添ひて、花やかに當世めかしく、匂ひ艶きたる、様々の薰りも取り集め、愛甚き盛りに見え給ふ、去年より今年は勝り、昨日より今日は珍らしく、平常に目馴れぬ美しき様のし給へるを、いかでかくもありけむと思す、紫上は、打解けたりつる御手習を、硯の下に差し入れ給へれど、院は見付け給ひて、引き返し見給へば、書などの、いと故意とも上手と見えずして、大人々々しく、美しげに、かき給へり、

(紫歌) 身に近き、秋や來ぬらむ、見るまゝに、青葉の山も、

うつろひにけり、

とある所に、院は、目留め給ひて、

(源歌) 水鳥の、青羽は色も、かはらぬを、萩の下こそ、けし

身に近き○
源氏の御心
にうつろひ
始めたりと
なり

水鳥の○我
心は變られ

と其方の心
こそ異なれ
となり

紫上對三
面
女三宮

きことなれ、

など書き添へつゝ、戯び給ふ紫上の、事に觸れて氣の毒なる氣色の、下にはおのづから漏りつゝ見ゆるを、故意と、事なく消し給へるも、院はかゝる人は、またと有り難く、愛憐に思さる、今夜は、何方にも御暇ありぬべければ、院は、かの忍び所なる、尙侍の方へ、いと是非なく出で給ひにけり、院は、自らいとあるまじきことゝ、いみじく思し返すにも、その意に叶はざりけり、

明石中宮は、實の御母君、明石上よりも、この紫上をば、睦まじきものに、頼み申し給へり、さて中宮のいと美しげに、大人びまさり給へるを、紫上は、思ひ隔てず、至愛しと見奉り給ふ、御物語など、いと懐かしく申し交し給ひて、中の戸開けて、女

三宮にも、対面し給へり、女三宮は、いと幼げにばかり見え給へば、心安くて、紫上の、大人々々しく、親めきたる様に見ゆるに、御従姉妹同志なる、昔の御系統をも申し給ふ、女三宮の御乳母、中納言、乳母といふを、召出で、

(紫) 同じ挿頭を、尋ね申せば、畏多けれど、某と姫君とは、分かぬ間柄に申さすれど、便宜なくて、今までも御対面申さざりつるを、今よりは、疎からず思召し、其方も拙方などへ、参り給ひて、怠慢らむことをば、注意しなども、ものし給はむぞ、嬉しかるべき、

など言へば、中納言、乳母、

(中) 吾が姫君には、御母女御には後れ給ひ、御父院には、山籠りし給ひて、頼もしき御蔭どもに、様々に後れ申し給ひて

心細げにおはしますめるを、かゝる懇切なる御免許候ふめれば、嬉しき、これに増すことなくぞ思ひ候はれける、此世を背き給ひにし御父院の上の、御心向けも、唯かくぞ御心隔だて申し給はず、また姫宮の、幼なき御有様をも、養育み奉らせ給ふべくぞ候ふめりし、姫君御自身にも、内々さやうにぞ、頼み申させ給ひし、

など申す、

(紫) 御父君の院の上より、いと畏多かりし御消息賜はりし後は、いかで御返事なりとも、とばかり思ひ候へど、何事につけても、數ならぬ身ぞ口惜しかりける、と、安らかに、大人びたる氣容にて言ひ、女三宮にも、御心につき給ふべく、繪などの事、雛人形のまた捨て難き様、若やか

六條院四十
賀供ニ養嵯
峨御堂

に申し給へば、女三宮も、紫上をば、實にいと若く心善げなる
人かな、と幼き御心地には、打解け給へり、さてこの後は、常
に御文通はせなどして、面白き遊び業などにつけても、疎から
ず申し交したまふ、世間の人も、後妻同志のことなどは、とや
かくと言ひ扱ふものなれば、初の程は、女三宮の上については、
紫上、いかに思すらむ、御寵いとこの年頃のやうにはおはせじ、
女三宮には、少しは劣りなむ、など、言ひけるを、六條院の、紫
上に、これまでよりは、今少し深き御志の、かくても勝る様な
るを、それにつけても、また女三宮の爲、安からず言ふ人々あ
るに、紫上の、女三宮に、かく憎げなくさへ申し交し給へば、種
々の外評も、事消えて、見安くぞありける、
十月に、紫上、六條院の御賀を執り行ふ爲に、院の建立たまひ

最勝王經云
々〇この三
經を鎮護國
家の三部經
といふ

し、嵯峨野の御堂にて、薬師佛供養し奉り給ふ、嚴重しき御儀
式は、院より切に禁制め給へば、忍びやかに、と思し掟てたり、
佛、經函、帙篋の調整、眞の極樂ぞ思ひ遣らる、最勝王經、金
剛、般若、壽命經など、いと廣大き御祈禱なり、公卿いと多く
参り給へり、御堂の様、面白く言はむ方なく、紅葉の蔭、分け
行く野邊の間より始めて、見物なるに、半は競ひ集まり給ふな
るべし、霜枯れ渡れる野原のまゝに、馬車の行き違ふ音、繁く
響きたり、御誦經、花散里の御方などを始めとして、院の御方
方、我もくと、嚴重しく爲させ給ふ、廿三日を、院の御年齋
の日にて、この六條院は、かく御方々、隙間なく集ひ給へる中
に、紫上の、我が御私の殿と思す二條院にて、御賀の御壽宴は
爲させ給ふ、御装束を始め、大概の事ども、皆紫上の方にて

ばかり爲給ふを、明石上を始め、御方々も、然るべき事とも、分
 擔つゝ、望み奉仕り給ふ、西東の對どもは、人の局々にしたる
 を掃除ひて、殿上人、諸大夫、院司、下人までの設席、嚴重し
 く爲させ給へり、寢殿の放出を、例の修飾ひて、螺鈿の倚子立
 てたり、御殿の西の間に、御衣の机、十二脚立て、夏冬の御
 装、御衾など、例の如く、紫の綾の覆ども、整麗しく見え渡り
 て、覆の内の心は、顯露ならず、御前に、置物の机二脚、唐の
 地の裾濃の覆したり、挿頭の臺は、沈の華足、黄金の鳥、銀の
 枝に居たる心ばえなど、桐壺の御方の御擔任にて、明石の御方
 の爲させ給へる、由緒深く心特別なり、後の御屏風四帖は、紫
 上の御父君、式部卿、宮ぞ爲させ給ひける、いみじく意匠を盡し
 て、例の四季の繪なれど、珍らしき泉水、瀧など、目馴れず面

朱雀院の行
 幸○紅葉賀
 の帖にあり

白し、北の壁に添へて、置物の御厨子、二具立て、御調度ど
 も例の事なり、南の廂に、公卿、左右の大臣、式部卿、宮を始め
 奉りて、次々は況して参り給はぬ人なし、舞臺の左右に、樂人
 の平張打ちて、西東に、屯食八十具、祿の唐櫃四十棒、續けて
 立てたり、末の刻程に、樂人參る、萬歳樂、皇聲など舞ひて、日
 暮れかゝる程に、高麗の亂聲して、落蹲の舞出でたる間、尙常
 の目馴れぬ舞の様なれば、終る程に、權中納言、右衛門、督、柏
 下りて、入綾を微かに舞ひて、紅葉の蔭に入りぬる名殘、飽か
 ず興ありと、人々思したり、古の朱雀院の行幸に、權中納言の
 御父今の六條院、源中、右衛門、督の御父、致仕太政大臣、頭中の兩
 人、舞ひ給ひし青海波の、いみじかりし夕、思ひ出で給ふ人々
 は、夕霧、柏木二人の、また劣らず立ち續き給ひにける、世々

千年をかれ
て○催馬樂
にむしろ田
のくいつ
ぬき川にや
すむ鶴の
くすむつ
るのく千

の勢望、有様、容貌、用意なども、専劣らず、官位は、昔の源
中將、頭、中將よりは、や、進みてさへこそあれなど、年輩をも
數へて、尙然るべき因縁にて、昔よりかく立ち續きたる御交際
なりけり、と目出度く思ふ、主人の六條院も、哀に涙催ましく、
御父桐壺帝、御養母藤壺中宮など、思し出らるゝことども多か
り、夜に入りて、樂人ども退出づ、北、政所上の別當ども、人々
率ゐて、祿の唐櫃によりて、一棒づ、取りて、次々に賜ふ、祿
の白き物どもを、品々纏頭ぎて、築山際より、池の塘を過ぐる
間、餘所の見る目には、千年をかねて遊ぶ、鶴の毛衣に思ひ紛
ひらる、院の御前には、御樂遊始まりて、また愉快し、御琴ど
もは、春宮よりぞ、調へさせ給ひける、朱雀院より渡り參れる、
琵琶、琴、主上冷泉院より賜はり給へる、箏の御琴など、皆昔覺

年をかねて
そ遊びあへ
るくとあ
り

えたる物の音どもにて、珍しく弾き合せ給へるに、院は御心に、
何の折にも過ぎにし方の御有様、禁中邊など思し出でらる、故
薄雲、女院藤壺中宮おはせましかば、かゝる御賀など、自分こそ進み
奉仕らまし、か、何事につけてかは、吾志をも見せ奉りけむ、と
飽かず口惜しくばかり思ひ出て申し給ふ、上主にも、女院のお
はしまさぬことを、何事にも光榮なく、物寂しく思さるゝに、こ
の六條院の御事をなりとも、先例ある朝觀の恭禮を盡しても、え
見せ奉らぬを、世と共に、長く飽かぬ心地し給ふも、今年のこと
の四十の御賀に託けて、此院へ、行幸などもあるべく思し掟て
けれど、世間の煩ひならむこと、更に爲させ給ふまじくぞある、
と院の辭み申し給ふこと、度々になりぬれば、主上は口惜しく
思し止まり給ひぬ、

十二月の廿日あまりの程に、秋好中宮退出させ給ひて、今年
の残りの御祈禱に、平城の京の七大寺に、御誦經布四千段、こ
の近き平安の京の四十寺に、絹四百匹を頒ちて、施させ給ふ、中
宮は、六條院の、有り難き御養育を思し知りながら、何事につ
けてかは、深き吾志をも顯はし御覽せさせ給はむとて、父宮先
母御息所のおはさましかば、院の御爲の志をも、取り添へて、こ
の御賀を、嚴重しくも奉仕るべきを、と思すに、院はかく強に、
朝廷にも申し辭み給へば、諸事ども、多く制止めさせ給ひつ、さ
て、

(源) 四十の賀といふことは、先々の例を聞き候ふにも、残り
の齡久しき例ぞ少かりけるを、此度は、方々の祝賀を謝絶り、
尙世の騒をも制止めさせて、誠に後の五十の賀に、齡の足ら

むことを數へさせ給へ、

とありて、頻に辭み給ひけれど、中宮は、公事様にして、尙い
と嚴重しくぞ賀を擧げられける、かくて中宮のおはします、六
條院の坤の町の寢殿に、御修飾などして、先々の例に變らず、公
卿の祿など、大饗に准へて、親王達には、特に女の装束、非參
議の四位、大夫達など、普通の殿上人には、白き細長一領、腰
差などまで、次々に賜ふ、院の御装束は、限りなく清麗を盡し
て、名高き石帯、御太刀など、中宮の父君、故前坊の御方様に
て傳はり参りたるも、また哀にぞありける、古代の天下一品と、
名ある限りは、皆集ひ参る御賀にぞあるめる、昔の物語にも、物
施させたるを、賢きことには數へ續けたるめれど、いと面倒く
て、澤山き御交際の間のことどもは、得ぞ數へあへ侍らぬよ、主

腰差○正絹
にて巻きな
がら腰に差
すなり

右大将○系
圖になし
夕霧權中納
言兼右近
衛大将

夕霧權中納
言行任大
將賀

上には、行幸の事まで、思し初めてしことどもを、無下に中止
めしことの、口惜しければとて、凡ての御事中納言夕霧にぞ譲り
附けさせ給ひてける、其頃の右大将、疾病して辭し給ひけるを、
この權中納言に、御賀の間、祝意加へむと思召して、俄にその
闕に補して、中納言をば、右大将に爲させ給ひつ、御父六條院
も、喜び申させ給ふものながら、いとかく俄に餘る喜悅をぞ、い
ち迅き心地し候ふと、卑下し申し給ふ、
夕霧中納言は、右大将になりたる賀をば、六條院の、巽の町散花
里の方に、御修飾ひ設け給ひて、隠ろへたるやうに爲成し給へれ
ど、今日は禁中よりの御沙汰なれば、尙作法特別に、儀式勝り
て、所々の饗なども、内藏寮、穀倉院より奉仕らせ給へり、屯
食など、公事様にて、藏人頭、宣旨奉はりて、親王達五人、左

置物の御厨
子○此は第

右の大臣、大納言二人、中納言三人、參議五人、殿上人は例の
禁中のも、春宮のも、朱雀院のも、皆集まりて、残り少し、御
座所、御調度どもなどは、致仕、太政大臣、委細しく承りて奉仕
らせ給へり、今日は致仕、太政大臣、救命ありて、六條院へ渡り
參り給へり、院源もいと辱く驚き申し給ひて、御座に着き給
ひぬ、母屋の御座所に對ひて、太政大臣の御座あり、大臣はい
と清らに、物々しく肥え太りて、この大臣ぞ、今盛りの宿徳と
は見え給へる、主人の六條院は、猶いと若き昔の源氏の君のま
まに見え給ふ、御屏風四帖に、主上の宸筆書かせ給へる、唐の
綾の薄淡に、金泥の下繪の様など、愛甚さ申すも愚なり、面
白き春秋の彩繪などよりも、この御屏風の墨付の輝く様は、目も
及ばず、意匠さへ愛甚くぞありける、置物の御厨子、階々の樂

一階より第
四階まであ
りて各笙琵琶
和琴な
どの樂器を
載せて置物
とするなり
六衛府○左
右近衛府左
右衛門府左
右兵衛府な
り

○若菜上

器など、藏人所より賜はり給へり、右大將霧夕の御威勢も、いと嚴重めしく成り給ひにたれば、打添へて、今日の作法、いと特別なり、引出物として、内裡より引かれたる御馬四十疋、左右の馬寮六衛府の官人、上より次々に引き調へて、賜はる間に、日暮れ果てぬ、例の萬歳樂、賀皇恩などいふ舞、少しばかり舞ひて、太政大臣の渡り給へるに、珍らしく持囃し給へる、御前の御樂遊に、皆人心を入れ給へり、琵琶は例の螢兵部卿宮、何事にも世に有り難き音樂の上手におはして、いと似るものこそなかりけれ、院は琴の御琴を、大臣は和琴を弾き給ふ、院は、年來齡と共に、聞き添ひにける御耳の聞成にや、大臣の和琴を、いと優に哀に思さるれば、琴も御秘手をさくく隠し給はずして、いみじき音ども出づ、昔の御物語どもなど出で來て、院と大臣と

前妻云々○
源氏の前妻
葵上は致仕
大臣の妹に
て源氏の御
子夕霧大將
の妻は致仕
大臣の女な
り

○若菜上

は、今またかゝる御交情に、前妻の里なり、今聳の家なり、何方につけても、申し通ひ給ふべき御親睦など、快く申し給ひて、御酒數多度参りて、物の愉快さも滞りなく、久々の御參會なれば、御醉泣ども、え止め給はず、太政大臣への御贈物には、勝れたる和琴一面に、好み給ふ狛笛を添へて、紫檀の箱一具に、唐の階書の手本ども、倭の草書の手本など入れて、御車に追ひ付いて奉り給ふ、引出物の御馬ども迎へ取りて、右馬寮の官人ども、高麗の樂して立騒ぐ、六衛府の官人の祿ども、右大將霧夕も、賜ふ、御心と事省ぎ給ひて、嚴重しき事どもは、此度は中止め給へれど、六條院は、禁裡、春宮、一院、院、后宮、中宮、次々に御縁淺からぬ間、いひ知らず見え渡ることなれば、猶かゝる折には、目出度ぞ覺えける、六條院は御子とては、たゞ右大將霧夕

一人おはするを、物寂しく、光映なき心地せしがど、その右大將、數多の人に勝れ、勢望特別に、人品も雙ふものなきやうにものし給ふに、唯かの母北方葵、上の、伊勢の御息所六條御息所との妬恨深く、挑み交し給ひけむ間の、御宿因どもの行方見えて、葵上の御腹なる、夕霧君は、大將となり、御息所の御腹なる、秋好君は、中宮となるなどぞ、様々なりける、當日の御装束どもなど、此方の花散里、上ぞ爲たまひける、祿ども、大概の事は、三條、北方雁井ぞ、用意給ふめりし、さて折節につけたる御營み、内々の物の清華をも、花散里の御方には、これまで唯餘所の事にばかり聞き渡り給ふを、何事につけてかは、かゝる物々しき數にも交らひ給はまし、と思したるを、右大將をば、子の如くに扱ひ給ひし御縁に、今度いとよく數入られ給へり、

年も返りぬ、桐壺女御明石姫君、御産近づき給ひぬるにより、正月朔日より御誦法、不斷に爲させ給ふ、寺々社々の御祈禱も、亦數を知らず、院は吾が昔葵、上の御産の時、忌々しき事を見給ひてしかば、かゝる御産の間の事は、いと恐しき物に思し染みたるを、紫、上などの、然る御産などの事、爲給はぬは、口惜しく、物寂しきものながら、か、ればこそ、却て然る忌々しき物を見ざるなるめれ、と嬉しく思さるゝに、明石女御の、また幼少なる御時分に、御産いかにおはせむ、と豫て思し騒ぐに、二月程より、怪しく女御の御氣色變りて惱み給ふに、院を始め奉りて、御心ども騒ぐべし、陰陽師ども、御居室を更へて、謹慎み給ふべく申しければ、外の差離れたる所は、不安心しとて、彼の御實母、明石、上の住み給ふ町の、中の對に移徙し奉り給ふ、此方

は唯大きな對二棟、廊どもぞ廻りてありけるに、御修法の壇、
 空隙もなく塗りて、いみじき験者ども集ひて、祈禱り騒ぐ、母
 君明石上は、この時に、吾が宿因をも見ゆべき業なるめれば、
 いみじき心を盡し給ふ、彼の祖母大尼君も、今は此上なき耄人
 にてぞありけむ、この孫女明石姫君の、御産の有様を見奉るは、
 夢の心地して、いつしかと参り近き馴れ奉る、年頃この母君明
 石上は、姫君桐壺女御明石に、かく添ひ侍ひ給へど、昔の事な
 ど、正面にも女御に申し知らせ給はざりけるを、この大尼君、悦
 喜にえ堪へず、参りてはいと涙がちに、古めかしき事どもを、慄
 き出でつ、語り申す、初の内は、女御も奇怪しく面倒しき人か
 な、と打諦視り給ひしがど、我身に、かゝる祖母ありとばかり
 は、微聞き置き給へれば、今は懐かしく待遇し給へり、さて尼

君は、女御に、

〔尼 其方の、かの明石といふ所にて、生れ給ひし間の事、大
 殿君院の、かの浦におはしましたりし有様、今はとて京へ
 上り給ひしに、誰もく心を惑して、今は限りの御別にて、此
 世にては、かくばかりの宿契にこそはありけれ、と歎息さし
 を、其方の生れ給ひて、かく引き助け給へる御宿因の、いみ
 じく悲しきことよ、

と申して、ほろ／＼と涙落して泣けば、女御は實に哀なる昔の
 事を、かくも聞かざらましかば、何事もえ知らずして、過ぎぬ
 べかりけり、と思して、打泣き給ふ、さて心の中には、我身は
 實に元は種姓も卑くて、いみじかるべき分際にはあらざりける
 を、紫上の御待遇に磨かれて、人の思へる様なども、不充分に

はあらぬなりけり、我身の種姓を知らねばこそ、此身を二人と
 雙ぶものなきものに思ひ、宮仕の間にも、傍輩をば、強に思
 ひ消し、此上なき心驕りをば爲つれ、世の人、下にはいかに誹
 謗るやうもありつらむ、など始めて世情を思し知り果てぬ、吾
 が母君明石上をば、元來かく少し種姓下れる家筋とは知りなが
 ら、我身は然る世離れたる、明石浦にて生れ給ひけむなども知
 り給はざりけり、これもいと餘り大様き給へる故にこそはあり
 けれ、奇怪漠然しかりけることなりや、さて女御は、尙もかの
 祖父入道の、今は仙人の、世にも住まぬやうにて居たるなるを、
 聞き給ふも、氣の毒に、など思して、方々に思ひ亂れ給ひぬ、か
 くて女御は、いと物哀に詠歎めておはするに、母君明石上参り
 給ひて、日中の御加持に、驗者どもの、此方彼方より参り集ひ、

物騒がしく祈り騒ぐに、女御の御前に、特に人も伺候はず、尼
 君所得て、いと近く伺候ひ給ふ、明石上、尼君に、

(明) あな見苦しや、短き御几帳、引き寄せてこそ伺候ひ給は
 め、風など騒がしくて、自然綻びの隙より見る人あらむに、醫
 師などやうの様して、いと盛過ぎ給へりよ、
 など申して、生傍痛く思ひ給へり、尼君は故意と慎みて、由緒
 めき殺ぎて振舞ふとは覺ゆめれども、耄々に耳もおぼくしか
 りければ、

(尼) あ、
 と耳傾けて居たり、然るは、齡の程は、またさいふ程にもあら
 ず、六十五六歳の程なり、尼姿いとかはらかに、貴なる様して、
 目艶やかに泣き脹れたる氣色の、怪しく昔思ひ出でたる様なれ

ば、明石、上は、胸打潰れて、

(明) 古代の辟言どもや申され候ひつらむ、今は當時と、世を更へたる如くなれば、此世の外はやうなる、生覺どもに取交ぜつゝ、奇怪しき昔の事ども、出て參て來つらむはよ、夢の心地こそし候へ、

と、打含笑みて、見奉り給へば、女御はいと艶めかしく、清らにて、例よりも甚く鎮まり、物思したる様に見え給ふ、明石、上は、我が子とも覺え給はず辱きに、祖母尼君の御氣の毒なることども申し上げ給ひて、思し亂るにやあらむ、今はかくばかりと、皇后になり給ひて、御位を極め給はむ世に、始めて昔の事も申し知らせんとこそ思へ、然るを、尼君、残りもなく申し上げたれば、女御には御身の分際を、口惜しく思し捨つべきには

老の浪云々
○今日幸に
参りたれば
許されよと
の意にて詮
に貝海士に
尼をかけた
り

あらねど、いとくほしく思召して、却て身引して、心劣りし給ふらむ、と心の中に覺えけり、御加持終て、驗者ども退出でぬるに、御菓子など、近く賄ひ成して、こればかりをなりとも食召せ、といと氣の毒げに思ひて申し給ふ、尼君は、女御をば、いと愛甚く美しく見奉るまゝにも、涙はえ止めず、顔は笑みて、口つきなどは、見苦しく廣ごりたれど、目つきの邊、涙に打陰れて、潛み居たり、明石、上は、あな傍痛、と目加すれど、尼君老ひ耄けて、聞こえ入れず、
(尼歌) 老の浪、かひある浦に、立ち出て、鹽垂るゝあまを、誰か咎めむ、昔の世にも、かやうなる人は、罪免されてぞ候ひける、
と申す、女御は、御硯なる紙に、

鹽たる、云々○尼君の
話につけて
祖父入道の
住家をも知
らばやとな
り

世を捨て、
云々○父入
道の世を遁
れたる心は
明なれども
子を思ふ間
は晴れまじ
となり

皇子誕生

(桐歌) 鹽たる、あまを浪路の、あるべにて、尋ねも見ばや、
濱の筈屋を、

と書き付け給へば、母君明石上も、え忍び給はで、打泣き給ひ
ぬ、

(明歌) 世を捨て、あかしの浦に、住む人も、心の闇は、晴
けしもせじ、

など、申し紛らはし給ふ、女御は、明石にて、祖父入道に別れ
けむ曉のことは、誠に幼少の間にて、夢の中にも思し出られぬ
を、口惜しくもありけるかな、と思す、

三月の十餘日の程に、桐壺女御は、平安に御産ありて、御子生
れ給ひぬ、豫ては御祈禱や、御加持など、仰山しく思し騒ぎし
がど、甚く悩み給ふこともなくて、男御子にさへおはすれば、限

御對湯○前
湯に同じく

なく思ふ様にて、六條院も、御心安堵給ひぬ、御産所^{明石上}は、
北の隠れの方にて、唯氣近き間なるに、嚴重しき御産養などの、
打頻り響き装ほしき有様、實にかひある浦と、尼君の爲には見
えたれど、此處にては、御儀式も執り行ひ難きやうなれば、女
御は、吾が御方に渡り給ひなむとす、さて紫上も、御産所へ渡
り給へり、白き御装束し給ひて、人の親めきて、若宮をつと抱
きて居給へる様、いとをかし、紫上は、遂に御子もなければ、自
身は、かゝる事知り給はず、他人の上にてても、見習ひ給はねば、
いと珍らかに、美しと思し申し給へり、若宮のむつかしげにお
はする程を、紫上は絶えず抱き取り給へば、眞實の祖母君明石
上は、若宮を紫上に唯任せ奉りて、御湯殿の扱ひなどを、自分奉
仕り給ふ、春宮、宣旨なる、典侍ぞ奉仕る御對湯に、明石、上下り

立ち給へるも、いとあはれに、實は明石、上は、若宮の御祖母な
 る、内々のことも、典侍は微知りたるに、明石、上の、少し不十分
 ならば、いと氣の毒ならましを、淺ましきまで氣高く、實にか
 かる宿因、特別にもおしたまひける人かな、と見申す、その間
 の儀式なども、こゝに學び立てむに、言ふもいと更なりや、六
 日といふに、女御は例の、我が御方に渡り給ひぬ、七日の夜、禁
 中よりも、御産養の事あり、朱雀院の、かく世を捨て、おはし
 ます御代りに、禁中より爲させ給ふにやあらむ、藏人所より、頭
 辨、宣旨奉りて、珍らかなる様に奉仕れり、祿の絹など、ま
 た秋好、中宮の御方よりも、公事には立勝り、嚴重しく爲させ給
 ふ、次々の親王達、大臣の家々、この御産養を、その頃の營み
 として、我もくゝと清華を盡して奉仕り給ふ、六條院も、此間

の事どもは、例のやうにも事省がせ給はで、盛大に執り行ひ給
 ひければ、世に二となく、評判言甚き程に、内部の作法の、艶
 めかしく詳細なる風流事の、記者の學び傳ふべき節は、餘りの
 美しさに、目も及ばずなりにけり、院は若宮を、程なく抱き奉
 り給ひて、右大將霧の、數多御子儲けたるなるを、今まで見せ
 給はぬが恨めしきに、かく可愛き御孫を、我身に添へ奉りたる
 と、慈愛しみ申し給ふは道理なりや、若宮は、日々に物を引き
 延ぶるやうに、成長げ給ふ、御乳母など、心知らぬは、頓に召
 さで、伺候ふ中に、種姓、心、勝れたる限りを撰りて、奉仕ら
 せ給ふ、祖母君明石、上の、御心掟の、上臈じく、氣高く、大様
 なるものゝ、然るべき方には卑下して、憎らかにも威張らぬな
 どを、褒めぬ人なし、紫、上は、正面ならねど、明石、上と見え交

天兒○三歳
までこれを
用ひ萬の凶
事をこれに
負するなり

明石入道消
息明石上

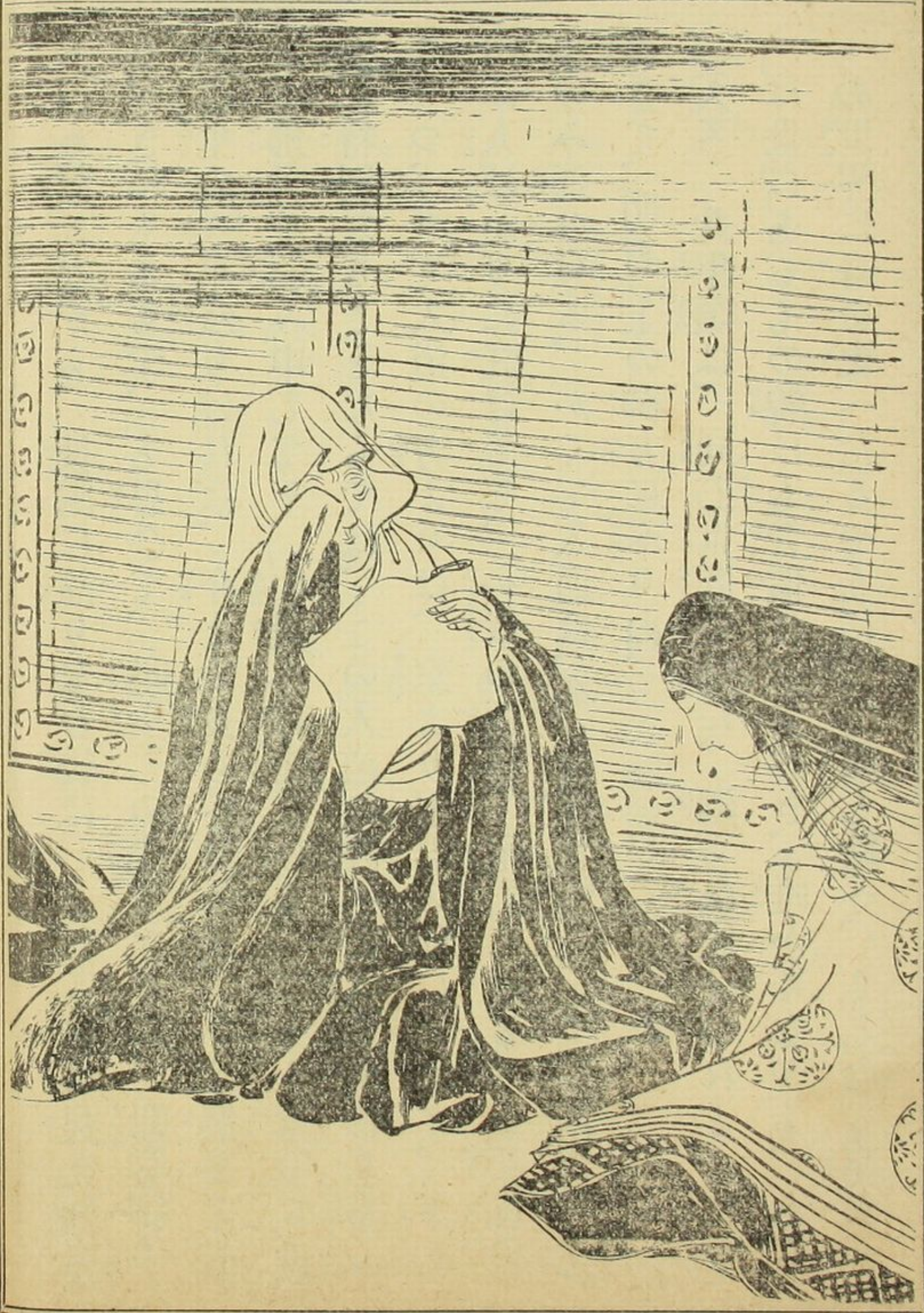
し給ひて、さやうにはばかり嫉妬もありしがど、今は若宮の御徳に、挑むまじく尊く思し成りにたり、さて乳兒慈愛しみ給ふ御心にて、紫上は、天兒など、御手づから作りそ、くりおはするも、いと若々し、旦暮この若宮の御傳きにて、過ぐし給ふ、彼の古代の大尼君は、若宮を心長閑見え奉らぬをぞ、飽かず、覺えける、却て見奉り始めては、戀ひ申すにぞ、命もえ堪ふまじかりける、彼の明石なる入道にも、かゝる皇子御誕生の事、傳へ聞きて、然る遁世たる聖心地にも、いと嬉しく覺えければ、今ぞ現世の境界を、心安く往き離るべき、と弟子どもに言ひて、吾家をば寺に成して、近邊の田などやうの物は、皆その寺の物に爲置きて、この播磨國の、奥の郡に、人も通ひ難く、深き山あるを、年來

も占め置きながら、彼處に籠りなむ後は、また人には見え知らるべきにもあらず、と思ひて、唯少しの覺束なき事、即ち御子御誕生の一事残りければ、今まで長らへけるを、今は然りともと、佛神を頼み申してぞ、山奥へ移轉ひける、近來となりては、京に特別なることならでは、この入道の許へは人も通はし奉らざりつ、さて入道の方よりは、京より尼君の便につけて、下し給ふ人ばかりに託けてぞ、一章の返事、尼君に然るべき折節の事のみ通ひける、かくて入道は、今は思ひ離る、世の終局に、文書きて、明石上の御方に奉りぬ、

(入文) 此年頃は、同じ世間の中に、廻らひ候ひつれど、何かは世にあるもの貌にも音信れ申すべき、唯かくなから、あらぬ世界に身を更へたるやうに思ひ成し給へ、さしたる事なき

明石上尼君
見入道消
息泣圖

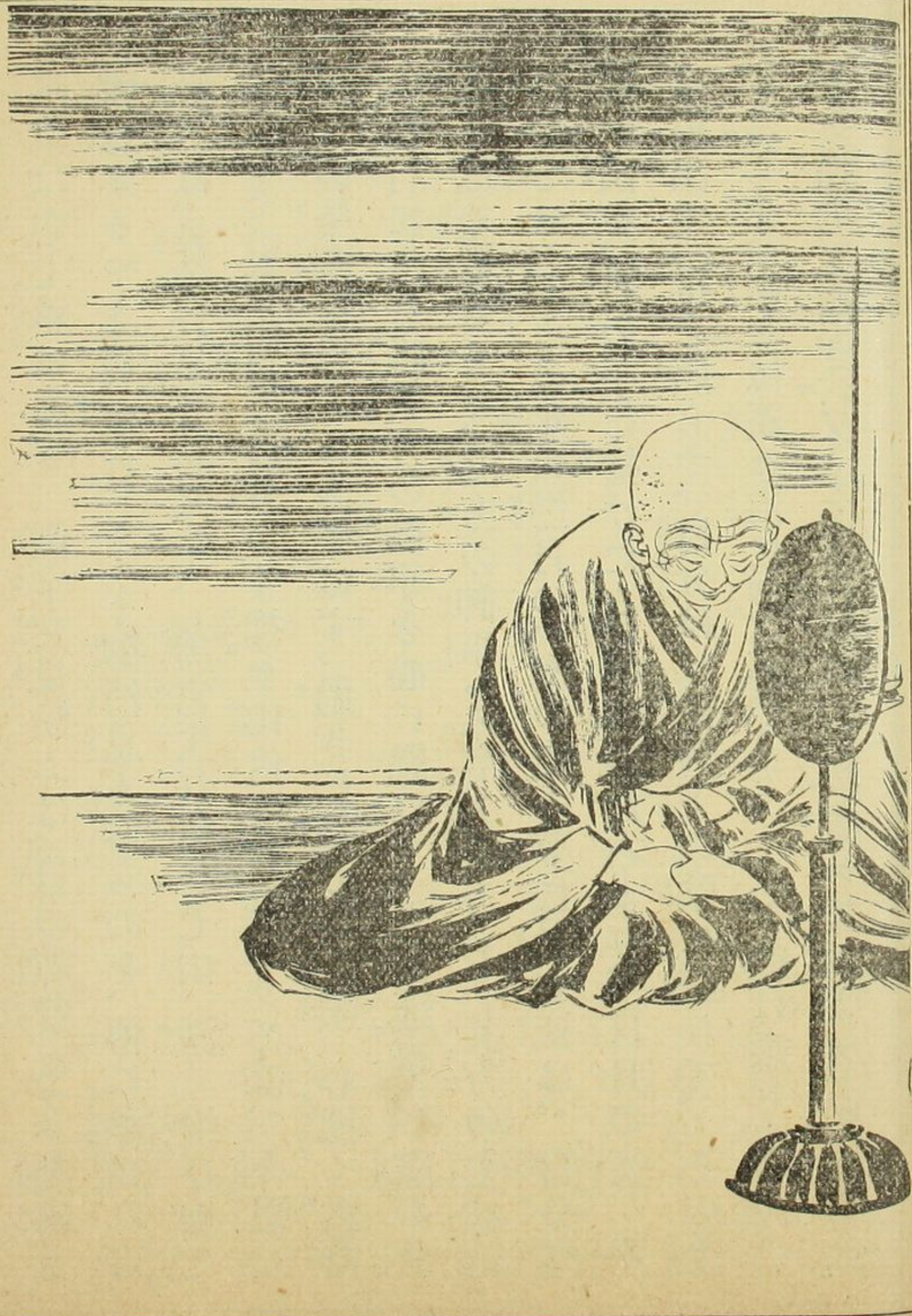
○若菜上



百二十六

明石入道
ひかり
出てむ
曉ちか
くなり
にけり
今ぞ見
し世の
物がた
りする

○若菜上



百二十七

須彌の山〇
梵語に蘇迷
廬山といひ
唐に妙高山
と譯す高さ
八萬由旬四
方に四州あ
りて日月山
腹を廻りて
晝夜を照ら

限りは申し承はらず、假字文見候ふは、目の隙費えて、念佛も
懈怠するやうに、無益くてぞ御消息も奉らぬを、傳に承はれば、
姫君は、春宮に參り給ひて、男宮生れ給ひし由、深く悦び申し
候ふ、その理由は、自分かく拙き山伏の身になりては、今更に
現世の榮華を思ふにも候はず、過ぎにし方の年頃、心穢く六時
の勤行にも、唯其方の御事を心に懸けて、九品蓮臺の、露の祈
願をば差置きてぞ、其方の御事を念じ奉つりし、其方の生れ給
はむとせし、その年の二月の、その夜の夢に見し様は、自分須
彌の山を、右の手に捧げたるに、山の左右より、日月の光、明
に射出で、世を照らす、自分は、山の下の陰に隠れて、その光
に當らず、山をば廣き海に泛へ置き、小き船に乗りて、西の
方を指して漕ぎ行くとぞ見候ひし、夢覺めて朝より、數ならぬ

すとぞ此處
は山を明石
上に月を明
石中宮に日
を春宮にた
とへて海に
泛べたるは
春宮やがて
帝位に昇り
て四海を掌
握し我身は
遁世して山
に入り去る
ことにたと
へたる夢な
り

身に、頼む所出で來ながら、何事につけてか、夢の中に見し如
き、然る嚴重しき事をば、待ち出でむと、心の中に思ひ候ひし
を、その頃より、其方の、今の尼君の腹に懷妊れ給ひにし以
來、外典を見候ひしにも、また内典の心を尋究る中にも、夢
を信ずべきこと多く候ひしかば、卑しき懷の内にも、辱く其
方を思ひ養育き奉りしがど、この夢に合せむにも、力及ばぬ
身に、思ひ兼ねてぞ、かゝる佛の道には面向き候ひにし、ま
た近衛中將を捨て、此國の守に沈淪み候ひて、このまゝ、老の
波、更に京には立返らじと思ひ斷りて、此浦に年頃候ひし間
も、其方の行末を祈りて、姫君を頼むことに、思ひ申し候ひ
しかばぞ、心專一に、多くの願を立て候ひし、その報願、平
かに、思ひの如く時に遇ひ給ふ、さて姫君國母となり給ひて

水草清き○
支賓僧都の
歌にとつ國
は水草清み
事繁き都の
中は住まず
まされりと
あり
光出てむ云
々○春宮の
世を保ち給
ふべき事ま
た入道の淨
土に赴かむ
意を述べて
妄想とは思
へども今ぞ
昔の夢を語
るとなり

○若菜上

祈願満ち給はむ世に、住吉の御社を始め、願果し申し給へ、この端夢の驗に、必男宮誕生れ給はむこと、更に何事を疑ひ候はむ、即この一つの祈願、近き世に叶ひ候ひぬれば、遙に西の方、十萬億の國隔てたる、九品の上の企望は、疑ひなく成り候ひぬれば、今は唯來迎る蓮臺を待ち候ふ間、その夕まで、水草清き山の末にて、勤行め候はむとぞ、山に退り入りぬる、光出てむ、曉近く、なりにけり、今ぞ見しよの、夢がたりする、とて、文の末に、月日書きたり、これはこの月日をもて、吾が命日と思せ、との意にや、後にまた副書して、
(又) 命終らむ月日も、更にな知召しそ、古より、人の染め置ける藤衣にも、更に窶れ給ふな、其方の御身は、變化のものと思し成して、この老法師の爲には、功德を作り給へ、現世

熊狼にも○
薩陞王子飢
虎に身を施
したる故事
あり拾遺集
に身を捨て
て山に入り
にし我なれ
ば熊の食は
むことも知

○若菜上

の快樂につけても、後世を忘れ給ふな、祈願ひ候ふ極樂國にさへ、到り候ひなば、必また對面もし候ひなむ、娑婆の外の岸に到りて、早く相見むと思せ、
とありて、さてかの住吉の社に、立て集めたる願文どもを、大きなる沈の文箱に、封じ籠めて、奉りたり、尼君には、毎事に書かず、たゞ、
(又文) 此月の十四日にぞ、草の庵を退り離れて、深き山に入り候ひぬる、かひなき身をば、熊狼にも施し候ひなむ、其許には、猶京にありて、思ひし様なる、愛甚き御代を待ち出で給へ、何れ淨土にて、また對面はありなむ、
とばかりあり、尼君この文を見て、彼の播磨の使の、大徳に問へば、大徳は、

られずとあり
播磨使大徳
語入道事

(天) 入道殿には、この御文書き給ひて、三日といふにぞ、彼の峻絶たる峯に移ひ給ひにし、某輩も、かの御送りに、麓までは侍ひしがど、皆返し給ひて、僧一人、童二人ぞ、御供に侍はせ給ふ、最初、今はと世を背き給ひし折を、悲しき終結と思ひ候ひしがど、かく山に入り給ふまで、悲はまた残り候ひけり、年頃勤行の間々には、物に倚り伏しながら、搔き鳴らし給ひし琴の御琴琵琶取り寄せ給ひて、搔き調べ給ひつゝ、佛に辭申し給ひてぞ、御堂に施入し給ひし、樂器にあらぬ物ども、多くは御堂に奉り給ひて、その残物をぞ、御弟子ども六十餘人、親しき限り侍ひけるが、その分限につけて、皆分配處分し給ひて、尙その上の餘分をぞ、京の御二方明石上の御料とて、贈り奉り給へる、今はとて搔き籠り、然る遙けき

山の、雲霞に交り給ひにし、空しき御跡に留まりて、悲び思ふ人々ぞ多く候ふ、

など申す、この大徳も、もとは童にて、京より下りし人の、今はかく老法師になりて留まれる、いと哀に、其身も心細しと思へり、釋迦の御弟子の、賢しき聖人さへ、靈鷲山をば、不安心からず、頼み申しながら、猶薪盡きける、世の惑は深かりけるを、況して尼君の悲哀と思へること限なし、明石上は、姫君桐壺、女御のおはする、南の御殿におはするを、明石より、かゝる御消息ぞあると申しければ、明石上は、やがて忍びて、尼君の方へ渡り給へり、さて明石上は、重々しく身を持成して、餘儀なき事ならでは、尼君の方に通ひ、相見給ふことも難きを、哀なる御消息ぞ参りたる、と聞いて、心配ければ、打忍びて渡り

薪盡きける
云々○釋迦
涅槃に入る
をいふ經に
佛此夜滅度
如薪盡火
滅云々と
あり

明石上見
入道消息
泣

給へるに、尼君は、いといみじく悲しげなる氣色にて居給へり、
明石上は、火近く取り寄せて、この文を見給ふに、實に涙もせ
きとめむ方そなかりける、餘所の人ならば、何とも目留むまじ
きことの、これは骨肉を分けたる間なれば、まづ昔來し方の事、
思ひ出で、戀しと思ひ渡り給ふ心には、相見ずして、過ぎ果て
ぬるにこそはあれ、と見給ふに、いみじく言ふかひなし、涙を
得せきとめず、この夢語を、且は行先頼もしく、さらば辟心に
て、父君の、我身をさやうにもあるまじき様に、あこがらし給
ふと、中頃思ひ漂はれしことは、かく果敢なき夢に頼を懸けて、
心高くものし給ひしなりけり、と且々思ひ合せ給ふ、尼君久し
く猶豫ひて、

尼 姫君の御徳には、嬉しく面立しき事をも、身に餘りて、有

り難く思ひ候ふ、あはれに悒鬱き思も、全く其方ゆるに勝れ
てこそ候へ、數ならぬ身分にても、長らへし都を捨て、か
の播磨に沈淪み居しをさへ、世の人に違ひたる宿因にもある
かな、と思ひ候ひしがど、かく入道殿と、生ける世に行き離
れ、隔たるべき中の宿契とは、思ひ懸けず、同じ蓮臺に住む
べき、後の世の頼みをさへ懸けて、年月を過し來て、俄に源
氏、君の御蔭により、かく覚えぬ嬉しき御事出で來て、背きに
し世に立返りて候ふ、かくて姫君の御入内、若宮の御誕生な
ど、かひある御事を見奉り、悦ぶものながら、一方には、入
道殿山に遁れて、不安心く悲しき事の打添ひて、物思の絶え
ぬを、入道殿には、遂にかく相見ず、隔てながら現世を別れ
ぬるぞ、口惜しく覚え候ふ、入道殿は、世に在りし時さへ、世

人に似ぬ心ばえにより、世を持って辟むるやうなりしを、我等夫婦は、若き時より、二人同志頼み習ひて、各々は、二なく契り掟きてければ、互にいと深くこそ頼み候ひしか、さるを如何なれば、かく耳に近き間ながら、かくて生き別れぬらむと言ひ續けて、いと哀に打泣き給ふ、明石、上も、いみじく泣きて、

(明) 人に勝れむ行く先のことは、何とも覺えずよ、數ならぬ身には、吾が姫君も、我が物にしもあらねば、何事も分明に、かひあるべきにもあらぬものながら、父君の、哀なる有様に、不安心くて止みなむばかりこそ、口惜しけれ、かく京にありて、かの御殿に伺候ふも、凡て父君の御爲とこそ覺え候へ、さて打絶えて、山に籠り給ひなば、世の中も定めなきに、やが

て消え給ひなば、宮仕もかひなくぞあるべき、

とて、終夜、哀なることどもを、言ひ明かし給ふ、

(又) 昨日も、院の上の、我身の女御の方にありと見置き給ひてし、然るを俄に這ひ隠れて、此方に忍び参りしも、輕々しきやうなるべし、我身一つは、何ばかりも思ひ憚り候はねど、かく添ひ奉る女御の御爲などの、いと御氣の毒にぞ、心に任せて身をも持成しにくかるべき、

とて、曉に、女御の御方なる、南の對へ歸り渡り給ひぬ、尼君は、

(尼) 若宮は、いかゞおはします、いかでか見奉るべき、

とて、泣きぬ、明石、上、

(明) 今見奉り給ひてむ、女御も祖母上を思し出てつゝ、いと

明石上參
東宮御息所

哀あはれに申させ給ふめる、院いんも、事ことの序ついでに、もし世よの中なか思おもふやう
 になりて、若宮わかみや、東宮とうきゆうにも立たち給ふことにもならば、忌々いづいづし
 き豫言かねごとなれど、尼君にきみその程ほどまで存命なごらへ給はなむ、と宣のたまふめり
 き、いかに思おもすことにかあらむ、
 と言のたまへば、尼君にきみ、また打笑うちわらみて、
 (尼に) いてや、さればこそ、様々さまざま例ためしなき宿世すくせにこそ候へ、
 とて、悦よろこぶ、入道いんどうより寄越よこせし、かの文匣ふはこは、明石あし、上持もちたせて、
 歸かへり給ひぬ、
 春宮はるきゆうよりは、女御にみよに早とく参まゐり給ふべき由よしのみ、仰あふせあれば、紫むら、
 上かみなど始はじめ、
 (紫むら) 東宮とうきゆうの、かく思おもしたる、道理ことわりなり、若宮わかみや御誕生おんたんじやうなど、珍めづら
 らしき事ことさへ添そひて、いかに待遠まちとほく思おもさるらむ、

御息所○東
宮の妃御子
生れぬれば
やがて御息
所といふ例
なり

と、皆々みな申し給ひて、若宮わかみやを、忍しのびて参まゐらせ奉たてまつらむの御心遣おんこころづかひ
 し給ふ、御息所おんしよ 明石姫君
桐壺女御は、これまで御暇おんいその心安こころやすからぬに懲こり給
 ひて、かゝる序ついでに、かくて暫時しばしあらまほしく思おもしたり、さて御
 息所おんしよは、年若としわかき御身おんみに、然さる御産おんそらしき事ことし給へれば、少すこし面瘡おもや
 せ細ほそりて、いみじく艶なまめかしき御様おんさまし給へり、明石あし、上かみなどは、
 (明あ) かく猶豫たためらひ難がたくおはする間ほどには候へど、今少いますこし療養りやうひ給
 ひてこそは参まゐり給はめ、
 など、心苦こころくるしがり申し給ふを、院いんは、
 (源げん) かやうに面瘡おもやせて、見みえ奉たてまつり給はむも、却かへりて哀愍あはれなる業わざ
 なり、
 など宣のたまふ、紫むら、上かみなど、我わが御方おんかたに歸かへり渡わたり給ひぬる夕方ゆふがた、蕭寂しめやか
 なるに、明石あし、上かみ、御息所おんしよの御前おんまへに参まゐり給ひて、かの入道いんどうより参まゐ

りし文匣披いて、申し知らせ給ふ、

(明) 君の立后など、思ふ様に叶ひ果てさせ給ふまでは、取り
隠し置いて候ふべけれど、世の中定め難く、我身も量られね
ば、不安心さにぞ、何事をも、御自身、御心と思し計らひ給
はざらむ以前、ともかくも我身果敢なく成り候へなば、必し
も、今はの終焉を、御覽ぜらるべき身にも候はねば、猶現心
失せず候ふ世にぞ、果敢なきことをも申させ置くべく候ひけ
る、と思ひ候ふて、難澁しく奇怪しき手跡なれど、これも御
覽ぜよ、この御願文は、手近き御厨子などに置かせ給ひて、必
然るべからむ折に御覽じて、この中にある願事どもは爲させ
給へ、疎き人には、な漏らさせ給ひそ、今は若宮も、御誕生
ありて、かばかりと見奉り置きつれば、自分も世を背き候ひ

なむと思ひ候へば、萬事心長閑にも覺え候はず、紫上の御心
疎略に思ひ申させ給ふな、いと有り難くものし給ふ深き御氣
色を見候へば、我身には、此上なく勝りて、長く此世にもあ
らせ奉りなむとぞ思ひ候ふ、元より我身、御身に添ひ申させ
むにつけても、世に劣腹といはれむが、愼ましき身の分限に
候へば、紫上に譲り申し始め候ひにしを、紫上の、いとかく
も懇切にもものし給はじとぞ、年頃は尙尋常に思ひ渡り候ひつ
る、今は來し方、行く先、後安く思ひ成りて候ふ、
など、いと多く申し給ふ、御息所は、涙催みて、聽きおはず、明
石の上は、親子の間なる、かく睦しかるべき姫君御息所の御前に
も、常に禮儀を守り、打解けぬ様し給ひて、無理く物愼みした
る様なり、この入道の文の詞、いといやに剛く憎げなる様を、陸

六條院訪
東宮御息所

奥紙にて、年經にければ、黄ばみ厚肥えたるに、五六枚、さは
いふもの、さすがに香にいと深く染みたるに、書きたり、御
息所は、御額髪の、やうく御涙に濡れ行く御側目、貴に艶め
かし、院は女三宮の御方におはしけるを、中の御障子より、ふ
と此方に渡り給へれば、明石上は、入道の文を得も引き匿さて、
御几帳を少し引き寄せて、自分は端隠れ給へり、院は、

(源) 若宮は、御目覺め給へりや、一刻の間も戀しき業なりけ
り、

と申し給へば、御息所は、御返答も申し給はねば、御母明石上、

(明) 若宮は、紫、上に渡し申し給ひつ、

と申し給ふ、

(源) いと奇怪や、紫、上には、この若宮を、我物と領じ奉りて、

懷を更に放たず持て扱ひ、人遣ならず衣も皆濡して、脱ぎ替
へがちなるめる、軽々しく、何どてかく渡し奉り給ふ、紫、上
の、却て此方に渡りてこそ見奉り給はめ、
と言へば、

(明) いたうたて、人の懇情を思はぬ御事かな、女子におはし
まさむさへ、彼方にて見奉り給はむこと、何事か候はむ、況
して男子は、外様へも身動きあるべきことなれば、彼方にて
見奉らせ給はむこそ、心安く覺え給はめ、戯れにても、かや
うに隔てがましきことな、賢がり申させ給ひそ、

と申し給ふ、院は、打笑み給ひて、

(源) 我身は物言せまじ、其方と紫、上との御中どもに任せて、見
放ち申すべきなるなりな、今は誰もく、我をば隔て、差放

ち、物言へば賢らがる、などのたまふこそ、却て稚けれ、まづはかやうに這ひ隠れて、無情く言ひ貶し給ふめり、
 とて、御几帳を引き遣り給へれば、明石上は、母屋の柱に倚り懸りて、いと清げに、心耻しげなる様して居給ふ、前の文箱も、惑ひ匿さむも様悪ければ、そのまゝ置き給ふを、院は見付け給ひて、

(源) これは何の箱ぞ、定めて深き事情あらむ、懸想人の、長歌よみて、封じ籠めたる心地こそすれ、

と言へば、明石上、

(明) あなうたて、當世めかしく成り返らせ給ふめる、御心の習慣に、懸想人など、聞き知らぬやうなる、御戯言どもこそ、時々出て來れ、

とて、含笑み給へれど、女御までさへ、物哀なりける御氣色ども、著ければ、院は不審、と打傾頭き給へる様なれば、明石上は、面倒しくて、

(明) 彼の明石の岩窟より、忍びて参りし御祈禱の卷數、また未果ぬ願などの候ふを、君の御心にも、知らせ奉るべき折あらば、御覽に供へ参らすべきやとて候ふを、只今は序もなくて、何かは開させ給はむ、

と申し給ふに、院は哀なるべき有様ぞかし、と思して、

(源) 入道は、其後、いかに行法まして住み給ひにたらむ、命長くて、幾多の年頃、勤行る功德も、此上なからむ、世間に由緒ある、賢しき貴僧高僧とて見るにも、現世の名利に染みたる、濁り深きもの多きやうなり、學才など賢き方こそあれ、

それさへいと限りありて、入道には及ばざりけりや、入道は道心には、さも到達深く、されどもまた、風雅ありし有様かな、彼は聖人だちて、現世脱離れ顔にもあらぬものながら、下の心は、皆未來の世に通ひすみ渡るとこそ見えしか、況して今は、心苦しき羈絆もなく、思ひ離れにたらむをや、我身容易き身ならば、彼の浦に忍び往いて、いと逢はまほしくこそあれ、

と言ふ、

(明) 入道には、彼の在りし所をも捨て、鳥の音聞えぬ山に、引き籠りぬとぞ聞き候ふ、

と申せば、

(源) 然らば、この文箱なるは、その遺言なるなりな、消息は

鳥の音○河海抄に飛鳥の聲も聞えぬ奥山の深き心を人ば知らんとあり

明石上奉覽入道文於六條院

通はし給ふや、尼君いかに思ひ給ふらむ、親子の間よりも、また然る夫婦の深き契りの交情は、いかに哀ならむ、など言ふ序に、明石上は、この夢語も、院の思し合はすることもやあらむ、と思ひて、入道の文を見せ奉りて、

(明) いと奇怪しき、梵字とかいふやうなる、手跡に候ふめれど、御覽じ留むべき節も交り候はむかとてぞ、かくは御覽に入れ候ふ、今は限りとて、父に別れ上洛にしがど、猶こそ哀は残り候ふものなりけれ、

とて、様善く打泣き給ふ、院は文見給ひて、

(源) 御文いとかしこく、かくては身體も尙老耄しからずこそあるべけれ、書なども、凡て何事も、故意と有識に爲つべかりける人の、唯この世渡りの心掟こそ少かりけれ、彼の入道

夢のわたり
○孟津抄に
世の中は夢
のわたりの
浮橋の打渡
しつゝ物を
こそ思へと
あり

の先祖の大臣は、いと賢く世に有り難き志を盡して、朝廷に奉仕り給ひける間に、物の行違ありて、その應報に、子孫はなきなりなど、人は言ふめりしを、系統は女子の方につけたれど、その女孫、かく春宮の宮に入りて、男宮さへものしたれば、先祖の功績につけて、いと相應なしとはいふべきにあらぬも、全く入道が、幾多の行法の效驗にこそはあらめ、など言ひて、涙押し給ひつゝ、この夢のわたりに、目留め給ふ、さて御心に、彼の入道は、奇怪しく辟々しく、漫に高き志ありと、人も咎め、また我ながらも、然あるまじき舉動を、假にてもするかな、と思ひしことは、この姫君御女の生れ給ひし時に、宿契深く思ひ知りにしがど、目の前に見えぬ、未來の事は、當時覺つかなくこそ思ひ渡りつれ、さらば入道は、かゝる瑞夢あ

りて、無理には我を聳に望みしなりけり、横様にいみじき目を見て、須磨に左遷ひしも、この姫君一人の爲にこそありけれ、さて入道は、如何なる願をか心に起しけむ、とゆかしければ、心の中に、拜みて文取り給ひつ、

(源) この願文に、また外に具して奉るべきもの候ふ、今また申し知らせ候はむ、

と、女御には申し給ふ、その序に、

(又) 今はかく入道殿の御文について、古の事をも尋り知り給ひぬれど、紫上の御心ばえを、踈略に思し成すな、素より然るべき夫婦兄弟の間は、更にも言はず、え去らぬ睦びよりも、外様の人の、なくてもよき情を懸け、特別の心寄せあるは、一通の事にもあらず、況して母君の、かく添ふて侍ひ慣れ給ふ

を、紫、上の、目前に見るく、最初の志變らず、其方をば、深く懇に思ひ申して、養ひ扱ひたるをよ、古の譬にも、繼母といふものは、表面はさやうにこそは養育みげなれど、繼子の功者らしく、邪推あらむも、賢きやうなれど、尙誤りても、繼子の爲には、繼母の下の心、曲みたらむも、さも思ひ寄らず、裏心なからむには、繼母も思ひ返し、愛憐に思ひて、繼子の罪得がましきにも、繼母の思ひ直ることもあるべし、大方の昔の世の、仇ならぬ實ある人は、人の中言によりて、或は繼母繼子違ふ節々もあれど、繼子なり繼母なり、ひとりぐ、何れか罪なき時には、自然持直す例どもあるべかるめり、さうもあるまじことに、角々しく、苦説をつけ、愛敬なく、人を持て離るゝ心あるは、いと打解け難く、思ひ限なき業にぞあ

るべき、これまで多數はあらぬ人の心の、とある様、かゝる趣を見るに、由緒といひ、何といひ、様々に口惜しからぬ分際の心ばせありて、皆各得たる方ありて、取る所なくもあらねど、さりとして、また取立てゝ、我が後見に思ひ、眞實々々しく撰び思はむには、有り難き業にぞあるべき、唯眞の心癖なく、善きことは、かの紫、上ばかりにこそあれ、これをぞ、やがて大様なる人といふべかりける、とぞ思ひ候ふ、善しとしてまた女三、宮の如く、餘り溫和過ぎて、頼もしげなきも、いと口惜よ、とばかり言ふに、外の御方々は、思ひ遣られぬかし、さて、また明石、上に、
 (又) 其方こそ、少し物の心、得てもものし給ふめるを、いとよ

く紫、上と睦び交して、この女御の御後見をも、同じ心にてものし給へ、

など、忍びやかに言ふに、明石、上、

(明) さやうに言はせぬ前より、紫、上の、いと世に有り難き御氣色を見奉るまゝに、紫、上の御懇情は、明暮の言種に申し候ふ、もしも紫、上の、嫉妬しきものになど思し許さばらむには、かくまで御覽じ知るべきにもあらぬを、御氣の毒の程まで、某をば數まへ言はずれば、却りては目眩くさへぞ覺え候ふ、數ならぬ身の、さすがに此世に消え残るは、姫君の御爲、世間の評判も、いと苦しく慎ましく思ひ候はるゝを、紫、上の、罪なき様に持て隠し給ひつゝあるこそ、嬉しく思ひ候へ、と申し給へば、

(源) 紫、上の、其方の御爲には、何の志かはあらむ、唯この女御の御有様を、平生に打添ひてもえ見奉らぬ覺束なきに、其方に譲り申さるゝなるめり、それもまた其方の取り持ちて、掲焉になど威張らぬ御待遇どもに、萬の事、凡て穩かに見安くなれば、我心まで、いとぞ心配なく嬉しき、果敢なき事にても、物心得ず、辟々しき人は、立交らふにつけて、人の爲さへ、辛きことあり、紫、上を始め、其方まで、誰もく、穩かに、今更引き直すところもなくものし給ふめれば、いと心安くぞある、

と言ふにつけても、明石、上は、心の中に、さりや、吾ながら能くこそ卑下しにけれ、など思ひ續け給ふ、かくて院には、紫、上の方へ渡り給ひぬ、明石、上は、心の中に、紫、上は、さもいと尊

福地の園に
云々○細流
抄に耶輸多

き御志のみ勝るめるかな、實にもまた他人より、特別に何事も
具足し給へる有様の、道理と見え給へるこそ愛甚けれ、女三宮
の御方、表面の御傳きばかり愛甚くて、院の渡り給ふことも、斜
なるべきに、皇女におはす故にや、然はあらざるめるは、辱き
業なり、紫、上は、女王にて、女三宮は、皇女なり、同じ系統と
は言ひながら、女三宮の方、一世上系におはすれど、院の、今
一段、氣の毒と後言ち申し給ふにつけも、我身の宿世は、いと
猛くぞ覺え給ひける、女三宮の尊き御分際にあへ、院の思す様
にもあらざるめる世に、況して立交るべき我が勢籠にしもあら
ねば、今は凡て恨めしき節もなし、唯彼の絶え籠りたる、父入
道の山住を、思ひ遣るばかりぞ、哀に不安心き、尼君も唯、福
地の園に種蒔きてといふやうなりし一言を、打頼みて、後世を

羅が福地の
園に種蒔き
てあはんか
ならず有爲
の都にとあ
り
夕霧大將柏
木右衛門督
各思女三
宮

思ひ遣りつゝ、詠め居給へり、
夕霧右大將は、この女三宮の御事を、思ひ及ばぬにしもあらざ
りしかば、今は六條院に移ろひ給ひて、目に近くおはしますを、
いと尋常にも覺えず、大方の御傳につけて、女三宮の御方には、
然りぬべき折々に参り馴れ、おのづから御氣容有様も、見聞き
給ふに、宮はいと若く大様き給へる一方にて、表面の儀容は嚴
重しく、世の例に爲つばかり持て傳き奉り給へれど、專鮮明に、
物深く氣高くは見えず、女房なども、大人々々しきは少く、若
やかに容色あるものゝ、只管に打花やぎ、洒落はめるは、いと
多く、數知らぬまで集ひ伺候ひつゝ、物思なげなる御邊とはい
ひながら、然る中に、また何事も長閑かに心鎮めたるは、心の
中の、顯にも見えぬ業なれば、また一身に人知れぬ思ひ添ひた

らむものも、また更に得意げに沈滞ほりなかるべきもの、中に、
 打交れば、傍の人に、引き隠れつ、同じ氣容持成に、誰もく
 一様に見ゆるを、唯明くれば、稚けたる御遊戯に、心入れたる
 女童の有様など、院はいと目に付かず見給ふことどもあれど、院
 は世の人心々を、様々に思ひて、世の中を一樣に思ひ言はぬ御
 本性なれば、かゝる遊戯の方をも、その心に任せて、若き人々、
 さやうにこそはあらまほしからめ、と御覽じ許しつゝ、戒め調
 へさせ給はず、御本人女三宮の御有様ばかりをば、いとよく教
 へ申し給ふに、少しは其方に持て付け給へり、かやうの事を、右
 大將聞き給ひて、心の中に、萬事調へたることは、實にこそ有
 り難き世なりけれ、紫、上の御用意、氣色の、幾多の年経ぬれど、
 ともかくも世に漏り出で見え申したるころなく、静やかなる

を本として、さすがに心美しく人をも消さず、身をも尊く、奥
 ゆかしく持成し添へ給へることゝ、一年野分のまぎれに見し面
 影、忘れ難くばかりぞ思ひ出られける、我が北方雲井、雁も、愛
 憐と思す方こそ深けれ、言ふかひありて、勝れたる上臈しさな
 どは、ものし給はぬ人なり、大將はこの人を得てしより、心お
 だしくなりて、今は目馴るまゝに、心緩びて、六條院に参りて
 は、猶かく様々に集ひ給へる御方々の、御有様どもの、一人一
 人に美しきを見て、羨ましく、人知れず心一つに思ひ離れ難き
 を、況してこの女三宮は、人の御分際を思ふにも、限なく心特
 別なる御様なるに、父院の、取別きたる御志ある御氣色にもあ
 らず、人目の外飾ばかりにこそ渡り給ふなれ、と見奉り知るに、
 大將は負ふけなき心に、故意としもあらねど、見奉る折ありな

むや、と女三宮をば、ゆかしく思ひ申し給ひけり、柏木右衛門、
 督も、常に朱雀院に参り、親しく伺候ひ馴れ給ひし人なれば、こ
 の女三宮を、父院の傅き崇め奉り給ひし御心掟など、委しく見
 奉り置きて、父院のこの宮の爲、誰を聳になど、様々の御評定
 ありし頃ほひより、申し寄り、さて朱雀院にも、心外とは思し
 宣はずと聞きしを、今度俄に六條院へ移徙ひ給ひて、かく他
 様になり給へるは、いと口惜しく、胸痛き心地すれば、今も尙
 宮にえ思ひ離れず、その折より語らひ着きにけり、かくて女三
 宮の御方の、女房の便に、御有様なども聞き傳ふるを、せめて
 の慰情に思ふぞ果敢なかりける、さて女三宮は、紫上の御氣容
 には、尙壓れ給ひてぞあると、世の人も學び傳ふるを聞きては、
 右衛門督は、心の中に、實に彼の宮の、比類なく尊き御身にこ

そ、我は當らざらめど、辱くも、我御後見を申す以上は、決し
 て世人の傳ふる如き、然るものには思はせ奉らざらまし、と思
 ひて、女房の外に、彼宮の乳母、小侍従といふをも、言ひ勵ま
 して、世の中定めなきを、六條院、元より本意ありて、思し掟
 てたる方に赴きて、やがて出家どもし給はゞ、必かの女三宮を
 領せむものをと、撓みなく思ひ歩きけり、
 三月ばかりの空、麗和なる日、六條院に、螢兵部卿宮、柏木右
 衛門督など参り給へり、院出で給ひて、御物語などし給ふ、
 (源) 閑靜なる住居は、此頃こそいと徒然に、心紛ることなか
 りけれ、公私につけ、何れも無事や、何業してかは暮すべき、
 など言ひて、
 (又) 今朝、大將霧夕の外出しつるは、何方にぞ、いと物寂しき

を、例のこゆみ小弓射させて見るべかりけり、弓好むめる若人どもも、見えつるを、妬く大將の退出やしぬる、

と問はせ給ふ、大將、君は、異の町花散里の御方に、人々數多して、蹴鞠まじり玩弄もてあそばして見給ふと、院聞召して、

(源) 蹴鞠は、亂りがはしきものながら、さすがに目覺むる心地して、角々しきぞかし、大將は何處ぞ、此方におはして蹴鞠し給へ、

とて、御消息あれば、やがて右大將參り給へり、若君達めく人、多く連れ給へり、院は大將に、

(源) 鞠は持たせ給へりや、誰々か同伴しつる、と言へば、大將、

(夕) 是人彼人候ひつ、此方へ退出で、奉仕らむよ、

と言ひて、寢殿の東面を見廻れば、桐壺、女御明石姫君は、若宮具し奉りて、春宮へ參り給ひにし頃なれば、此方は人目もなく、隠ろひたりけり、遣水などの離合れて、由緒あるかゝりのよき間を尋ねて、蹴鞠の人々立ち出づ、致仕太政大臣の子息達、即柏木右衛門、督の弟達、頭、辨、兵衛、佐、大夫、君など、年齢過したるも、また過さぬ半成なるも、様々に、他人より勝りて、蹴鞠好みものし給ふ、漸々暮れかゝるに、風吹かず善き日なりと興じて、頭、辨、君も、え沈黙めず、立交れば、院は、

(源) 辨官も、え制止あへざるめるを、たとひ公卿なりとも、若き衛府官達は、何どか亂れ給はざらむ、我等程の年齢にては、怪しく見過す、口惜しく覺えし業なり、然るは、この蹴鞠の様よ、いと軽々なりや、

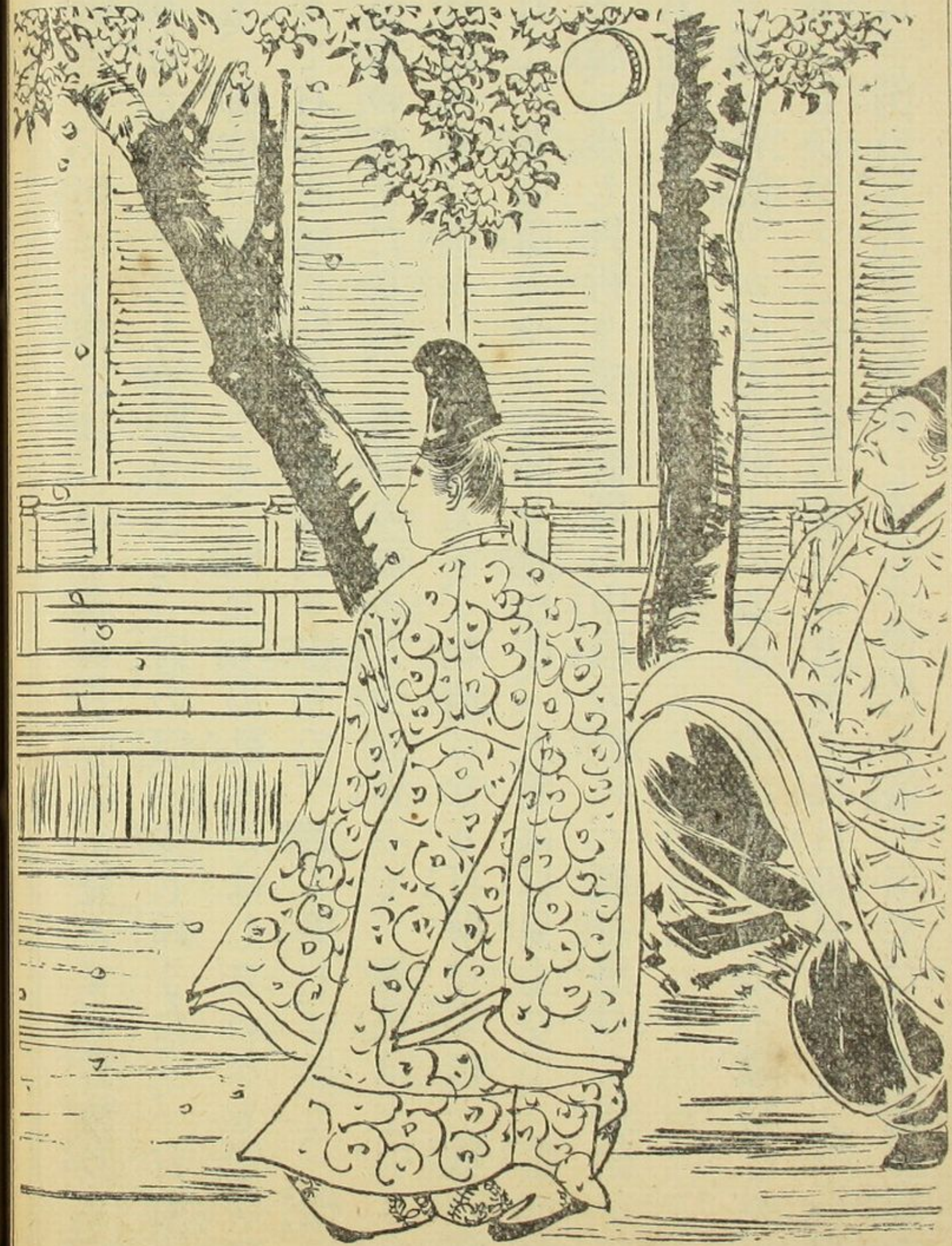
と言ふに、夕霧大將も、柏木右衛門、督も、え黙止りて居られず、皆下り居て、一通ならぬ美しき花の蔭に、鞆を蹴りつゝ、呻吟ひ給ふ夕映、いと清けなり、専様よく静ならぬ亂れ事なるめれど、さすがに面白く見ゆるは、所から人柄なりけり、由緒ある庭の木立の、いたく霞み籠めたるに、色々の紐解き渡る花の木どもに、纒なる萌木の交れる蔭に、かくはかなき事なれど、善き悪き差別あるを、互に挑みつゝ、我も劣らじと思ひ顔なる中に、右衛門、督の、假始に立ち交り給へる脚下には、雙ふ人なかりけり、さて右衛門、督は、容顔いと清げに、艶めきたる様したるに、甚く用意しながらも、さすがに亂りがはしき、面白く見ゆ、御階の間に當れる、櫻の蔭によりて、人々花の上も忘れて、鞆に心を入れたるを、六條院も、兵部卿、宮も、東の角の勾欄に出て

御覽ず、何れも鞆には、いと臍ある心ばえ見えて、番數多く成り行くに、上臍も消壓されて、冠の額、少し頰ぎたり、右大將も、御位の程を思ふこそ、例ならぬ亂りがはしきかなと覺ゆれ、さて右大將は、外見は他人より勝りて、若く美しげにて、櫻の直衣の萎えたるに、差貫の裾の方少し満みて、氣色ほど引き上げ給へり、輕々しくも見えず、物清げなる打解け姿に、鞆の觸れて、花の雪のやうに降り懸れば、大將は打見上げて、萎れたる枝、少し押し折りて、御階の中段の程に、腰打懸けて居給ひぬ、右衛門、督は續きて、

(柏) 花亂りがはしく散るめるよ、櫻は避きてこそ蹴給はめ、など言ひつゝ、女三宮の御前の方を、後目に見遣れば、女三宮は、例の落着かぬ氣容どもして、色々溢れ出てたる御簾の端々、

六條院蹴鞠
圖

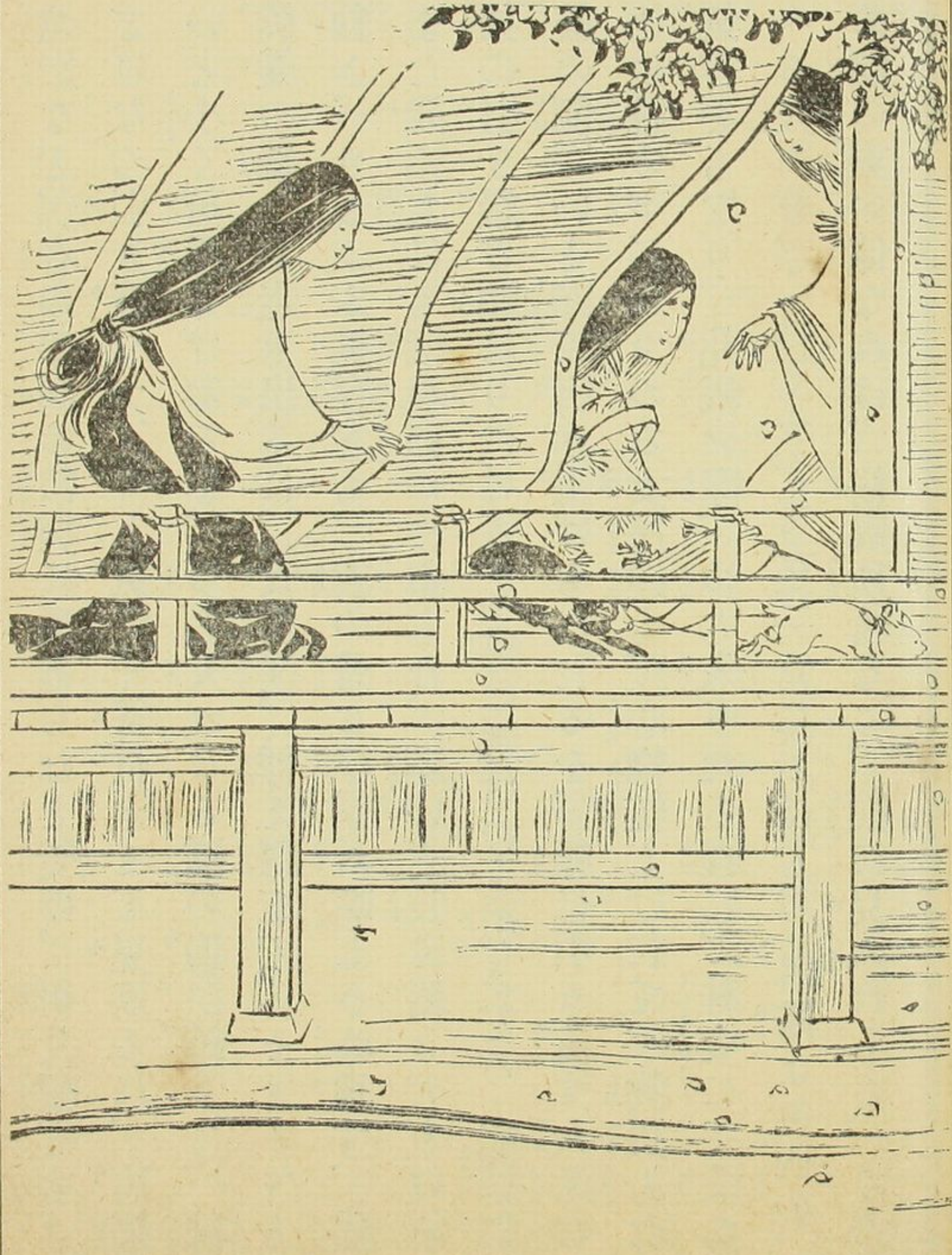
柏木君
いかなれば
花に木傳ふ
うぐひすの
櫻をわけて
埒とはせぬ



○若菜上

百六十四

夕霧君
みやまぎに
埒さだむる
箱鳥もいか
でか花の色
に飽くべき



○若菜上

百六十五

大猫逐唐
猫

透影など、春の手向の幣袋にやあらむと覺ゆ、御几帳ども、しどけなく引き遣りつゝ、人氣近く寄付きてぞ見ゆるに、唐猫の、いと小さく可愛しげなるを、少し大きな猫の追ひ續きて、俄に御簾の端より走り出るに、女房達、悸え騒ぎて、そよくと身動き、さまよふ氣容ども、衣の音なひ、耳喧しき心地す、猫はまた能く人にも懐かぬにやあらむ、綱いと長く附きたりけるを、物に引き懸け纏はりにけるを、猫は逃げむと引きじろふ間に、御簾の側、いと顯に引き上げられたるを、頓に引き直す人もなし、この柱の下にありつる女房達も、心惚忙しげにて、物畏したる氣容どもなり、几帳の際、少し入りたる程に、袿姿にて立ち給へる人あり、これぞやがて女三宮におはしける、階より西の、二間の間の東の側なれば、紛れ所もなく、顯に見入れらる、その装

柏木右衛督
瞥見女三
宮

束は、紅梅にやあらむ、濃き薄き、次々に數多重りたる差別、花やかに、雙紙の端のやうに見えて、櫻の織物の細長なるべし、御髮の裾まで、分明に見ゆるは、絲を縋り懸けたるやうに靡きて、裾の總やかに殺がれたる、いと美しげにて、その末七八寸ばかりぞ餘りたる、御衣の裾がちに、いと細く小やかにて、姿つき、髮の懸りたる側目、いひやうもなく貴に可愛げなり、夕陰なれば、分明ならず、奥暗き心地するも、右衛門督は、いと口惜し、鞠に身を投ぐる若公達の、花の散るを惜みもあへぬ氣色どもを見るとて、女房達、御簾の顯に開きたるを、ふともえ見つけぬなるべし、猫の甚く啼けば、見返り給へる女三宮の面もち、持成など、いと大様にて、若く美しの人や、とふと見えたり、大將は、この體を見つけて、いと傍痛けれど、差寄りて驚かさむも、

却ていと軽々しければ、唯女三宮に注意させて、打咳き給へるにぞ、宮は始めて心得て、やをら内に引き入り給ひぬ、然るは、大將の我心にも、女三宮をば今少し見まほしく、いと飽かぬ心地し給へど、猫の綱許しつれば、御簾は本の如く打直りて、心にもあらず名残り惜しく打歎かる、況して、あれ程に心を染めたる右衛門、督は、胸つと塞りて、彼の御容顔は、誰程にかはあらむ、幾多の女房の、唐衣着たる中に、唯一人袿着たる著き姿よりも、尙他人に紛るべくもあざざりつる、彼の御氣容を、など、心に懸りて覺ゆ、かくても表面には、然らぬ顔に持成したれど、右衛門、督は、女三宮に、正に目留めじやは、と右大將は、宮の爲、いとをしく思さる、右衛門、督は、是非なき心地の慰めに、猫を招き寄せて、搔き抱きたれば、猫は、宮の移香の、いと香し

柏木右衛門
督戀ニ女三
宮

諸卿參六
條院東對
椿餅○椿の
葉にて包み
たる餅なり
干物○干魚
干鳥などな
り

くて、可愛げに打啼くも懐かしく、戀しさの餘り、それと思ひ擬へらるゝぞ、好色々々しや、院は此様を御覽じ越せて、
 (源) 上達部の座、いと軽々しや、此方にこそ來たまへ、
 とて、東の對の、南面に入り給へれば、右大將を始め、皆其方に參り給ひぬ、螢、宮も居直り給ひて、御物語し給ふ、次々の殿上人は、簀子に圓座召して、故意となく、椿餅、梨、柑子ども、様々に、箱の蓋などに取り交ぜつゝあるを、若き人々そぼれ取り食ふ、然るべき干物ばかりして、御蓋參る、右衛門、督は、いと甚く思ひ濕りて、やゝもすれば、花の木に目を注げて詠め遣る、右大將は、心知りに、怪しかりつる御簾の透影、柏木の思ひ出ることやあらむ、と思ひ給ふ、さて女三宮の、いと端近なりつる有様を、且は軽々しと思ふらむ、心の中に、いてや紫、上

の御有様の、女三宮のやうにはあるまじかるめるものを、と思ふに、かゝればこそ、女三宮の、世の勢望の程よりは、内々の院の御志、緩きやうにはありけれ、と思ひ合せて、猶内外の用意多からず、幼稚きは、可愛きやうなれど、不安心きやうなりや、と思ひ貶さる、右衛門督は、女三宮の用意なかりし、萬の罪をも、十分尋究られず、覺えぬ御簾の隙より、微かにも、それと見奉りつるにも、我が昔より懸けたる志の、効驗あるべきにやあらむ、と契嬉しき心地して、飽かずのみ覺ゆ、院は昔物語爲出で給ひて、

(源) 致仕大臣の、萬の事に、我と立並びて、勝敗の評定し給ひし中に、我は大臣に、蹴鞠ぞえ及ばずなりにし、蹴鞠の如き果敢なき道は、秘傳あるまじけれど、大臣は蹴鞠の道は、尙

家の風○孟津抄に久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがたとあり

此上なかりけり、右衛門督は、父に續いて、その道を傳へたるものによあらむ、いと目も及ばず、賢くこそ見えつれ、と言へば、右衛門督は、打含笑みて、

(相) 實の道々しき方には、緩く候ふ、家の風、たゞ蹴鞠ばかりを吹き傳へ候はむには、後の世の爲、格別なることもなくこそ候ひぬべけれ、

と申す、院は、

(源) いかてか然あらむ、何事にて、人に異なる差別をば、世に記し傳ふべきなり、家の記録などに、書き留め入れたらむこそ興はあらめ、

など、戯れ給ふ御様の、匂ひやかに清らなるを見奉るにも、右衛門督は、心の中に、かゝる人に従ひ慣らひては、いかばかり

夕霧右大將
柏木右衛門
督同車退出

の事にか、他に心を移す人はあらむ、されば彼の女三宮の、この御目うつしには、我に心を移し給はじ、何事につけてか、我を愛憐と見許し給ふ程は靡かし申すべき、と思ひ廻らすに、いと此上なく、彼の宮の御邊、遙なるべき身の分限も、思ひ知らるれば、胸ばかり塞りて、退出で給ひぬ、大將君、同車にて、道の間、物語し給ふ、右衛門督は、右大將に、

(柏) 尙この頃の徒然には、此院に参りて、心を紛らはすべきなりけり、今日のやうならむ間暇待ちつけて、花の時節過ぐさず参れ、と院の言ひつるを、春惜しみがてら、月の中に、小弓持たせて参り給へ、

と語らひ契る、各別かる、道の間、物語し給ふて、右衛門督は、女三宮の御事の、尙言はまほしければ、

(柏) 院には、尙彼の紫上の方にはかりおはし給ふなるめりな、紫上は、實に御寵愛の特別なるなるめり、彼の女三宮は、いかに思すらむ、父院の帝の、並びなく大切に習慣し奉り給へるに、院の御志の、さやうにもあらで、屈し給ひにたらむこそ、氣の毒なれ、

と、あいなく言へば、右大將は、

(夕) 院は、さやうの怠々しきこと、いかでおはさむ、紫上は、幼少くより、様變りて養育て給へる、睦昵の差別にこそあるべかるめれ、女三宮をば、方々につけて、いと尊く思ひ申し給へるものを、

と語り給へば、

(柏) いてあな喧、中止たまへ、皆聞いて居り候ふ、三宮の、い

と御氣の毒げなる折々あるなるをよ、然るは、父院の上の、一通ならぬ御寵愛の皇女を、あるまじき業なりや、

と、右衛門督は、女三宮の御爲を、いとほしがる、

(柏歌) いかなれば、花に木傳ふ、鶯の、櫻を分けて、埒とはせぬ、春の鳥の、櫻ひとつに止まらぬ心よ、怪しと覺ゆることぞかし、

と口吟ながら言へば、右大將は、心の中に、いてあな無益の物扱よ、されば吾が推量に違はざりけり、と右衛門督の、御簾の隙間の眺詠をば、思ひ合せ給へり、

(夕歌) み山木に、埒定むる、箱鳥も、いかてか花の、色に飽くべき、彼の宮に、心留らぬにはあらねど、一面向きには、心寄せられぬ義理あるなるめり、

いかなれば云々○女三宮をばいかで慕ひ奉らぬといふ意なり

み山木に云々○三宮を慕ひ奉らぬにはあらねと慕はれぬ義理ありとなり

と應答へて、面倒しければ、別に言はせずなりぬ、他事に言ひ紛らはして、各別れぬ、右衛門督は、猶父致仕大臣殿の、東の對に、獨住にてぞ居給ひける、自分思ふ心ありて、年頃かゝる住居をするに、人遣りならず我身から、物寂しく心細き折々あれど、我身これほどにて、何どか思ふ事叶はざらむ、とはかり慢心するに、此夕より、頭痛く、物思はしくて、いかならむ折にか、また先般の折ほとにても、微かなる女三宮の御有様をなりとも見む、ともかくも搔き紛れたる、普通の分際の女こそ、假初にも、容易き物忌や、方違やと、外出も軽々しきにこそ、自然ともかくも、物の隙を覗ひつくるやうもあれ、など思ひ遣る方なく、彼宮は、深き窓の内に、何程の事につけてか、我がかく深き心ありけりとだに、知らせ奉るべき、と胸痛く、悒鬱け

柏木右衛門
督消息小
侍従

あやなく今日を○伊勢物語に見すもあらす見もせぬ人の戀しくばあやなく今日やながめくらさんとあよそに見て云々○手に取ることの叶はぬものなれば唯歎きて止むべきことと思へど尙君の侍の戀し

○若菜上

れば、小侍従の許へ、例の文遣り給ひて、

(柏文) 一日の風に誘はれて、御垣が原を分け入りて候ひしに、いとゞいかに彼の人の、我を見落とし給ひけむ、その夕より、亂り心地搔き昏らして、あやなく今日を、ながめ暮らし候ふ、など書きて、末に、

(又歌) よそに見て、折らぬなげきは、茂げれども、名残戀しき、花の夕影、

とあれど、小侍従は、一日の心も知らねば、唯尋常の詠にこそはあらめと思ふ、女三宮の御前に、人繁からぬ間なれば、小侍従は、この文を持て参りて、

(小) 此人の、かくばかり忘れぬものに、言問ひものし給ふこそ、煩はしく候へ、この後、氣の毒げなる、彼の有様も、見

きとなり

るに忍び難き心もや添ひ候はむ、と自分の心ながら、知り難く候ふ、

と打笑ひて、申せば、宮は、

(三) 其方は、いとうたてある事をも言ふかな、

と何心もなげに言ひて、小侍従の文開封たるを御覽ず、かくて文の中に、見もせぬといひたる所を御覽じて、淺ましかりし御簾の端を、思し合せらるゝに、御面赤みて、院の、さやうにばかり、事の序ごとに、大將に見え給ふな、幼稚き御有様なるめれば、自然取放して、見奉るやうもありなむ、と戒め申し給ふを、思し出るに、大將の然る事ありしと、人に語り申したらむ時、院の、いかに憎め給はむと、人の見奉りけむことをば思さで、院の事はかりを、まづ憚り申し給ふ、心の中ぞ幼稚かりけ

見もせぬ云々○伊勢物語の歌の句前にあり

○若菜上

今更に云々
○終にかひ
なかるべき
戀なれば必
色に出すな
と口かたむ
るなり宇津
保物語に白
雲に見ゆる
櫻もあるも
のを及げぬ
枝と思はざ
らなんとあ
り

る、かくて女三宮には、平生よりも御差答なければ、小侍従は、手持無沙汰にて、強ひて申すべきことにもあらねば、引き忍びて、例の通り返事書く、

(小文) 一日は、無情顔をぞ、目覺ましく、と許し申さざりしを、見ずもあらぬなど言ふはいかに、そはあなかけくしや、と、迅速かに、走り書きて、

(小歌) 今更に、色には出てそ、山櫻、及ばぬ枝に、心かけきと、かひなきことを、

とあり、

第三十四帖 若菜下

此帖は源氏
四十一歳の
三月より四
十七歳の十
二月に至る

六條院賭弓

參議右衛門督柏は、小侍従よりの返書を見て、心の中に、道理とは思へど、憂たくもいへるかな、いでや何どかく、格別なることなき、會釋ばかりを、慰めにしては、いかゞ此世を過ぐさむ、かゝる人傳ならで、直接女三宮の、一言をも言ひ申す世は、ありなむや、と思ふにつけても、大方にては、平生に我が惜しく甚愛しと思ひ申す、六條院の御爲に、生撓む心や添ひにたらむ、三月晦の日は、人々數多六條院へ參り給へり、右衛門督は、何となく生物憂く、心落着かざれど、女三宮の邊の、花の色をも見てや慰む、と思ひて參り給ふ、殿上の賭弓、二月とありしを過ぎて、三月もまた、故薄雲、女院の御忌月なれば、人々口惜

狗取○左右の合手な
ふ
花の蔭○河海抄に今日のみと春を思はぬ時にだにたつこと安き花の蔭かはとあり
柳の葉を云々○楚人養由基柳の葉

しと思ふに、この六條院に、かゝる集會あるべしと聞き傳へて、例の如く集ひ給ふ、鬚黒、左大將、夕霧、右大將、然る御交際にて参り給へば、左右の中少將達など、挑み交して、小弓と言ひしがど、歩射の勝れたる上手どもありければ、召出で、射させ給ふ、殿上人どもも、射藝に達せる限りは、皆前後の組々、狗取に方分きて、暮れ行くまゝに、今日は三月の晦日なれば、今日に終結る霞の景色も惚忙しく、亂るゝ夕風に、花の蔭いと立つこと安からで、人々甚く酔ひ過ぎ給ひて、艶なる賭物ども、院中、此局彼局、人々の御心見えぬべき品々を、柳の葉を百度中てつべき、左右の近衛の射手どもの、威張りて射取る、無心なりや、少し大様にして、次どもをこそ挑ませめ、とて左右の大將達より始めて、射場を下り給ふに、右衛門督、他人より勝り

を去ること百歩にして百發百中すること史記にあり

て、思案をしつゝ居給へば、夕霧、大將の、彼の女三宮を思ふ一端心知れる御目には、それと見付けつゝ、心の中に、彼は尙いと氣色特別なり、面倒しきこと出で來べき世にやあらむ、と人の事なれど、我さへ思ひつきぬる心地す、右大將と右衛門督とは、御中いと善し、然る交情といふ中にも、心交し懇意なれば、果敢なき事にても、物思はしく思ひ結ぼるゝことあらむを、いと氣の毒に覺え給ふ、右衛門督自身も、六條院を見奉るに、女三宮を思ふ心の鬼に、氣恐しく、目眩く覺えて、かゝる心はあるべきものか、細少の事にてさへ、怪しからず人に指さるべき舉動はせじ、と思ふものを、況して女三宮に想を懸くるなどは、負ふけなきことゝ、思ひ詫びては、彼のありし猫なりとも得てしかな、思ふこと、猫に語らふべくはあらねど、傍寂しき慰め

柏木右衛門
督參春宮

にも懐けん、と思ふに、物狂はしく、いかでかは彼の猫盗み出
でむと、それさへぞ難事なりける、かくて右衛門督は、我が御
妹君、弘徽殿女御冷泉院の御方に参りて、物語など申し紛らば
し試る、女御はいと奥深く心耻かしき御待遇にて、正面にも見
え給ふことなし、かゝる同胞の御交情にてさへ、氣遠く習慣ひ
たるを、女三宮の、不圖かに見え給ひしは、奇怪しく輕卒しく
ありし業ぞかし、とは、さすがに打覺ゆれど、一通ならず思ひ
染めたる我心から、淺くも思ひ成されず、春宮に参り給ひて、春
宮は御兄弟におはせば、女三宮に論なく似通ひ給へる所あらむ
かし、と目留めて見奉るに、匂ひやかになどはあらぬ御容顔な
れど、春宮とも申さる、御有様も、またいと特別にて、貴に艶
めかしくおはします、内裡の御猫の、數多引き連れたりける、同

胞の兒ども、所々に分れて、春宮にも参れるが、いと可愛げに
て歩くを見るに、まつ女三宮の事、思ひ出でらるれば、

(相) 六條院の姫宮、女三宮の御方に候ふ猫こそ、いと見馴れ
ぬやうなる顔して、可愛く候ひしか、纔にぞ見候ひし、
と啓し給へば、春宮は、猫をば故意と可愛がらせ給ふ御心にて、
委しく問はせ給ふ、右衛門督は、

(相) 唐猫の、この御猫には違へる様してぞ候ひし、同じ様
なるものなれど、心可愛しく、人馴れたるは、怪しく懐かし
きものにぞ候ふ、

など、女三宮の御方の猫をば、春宮のゆかしく思さるばかりに、
申し成し給ふ、春宮は、聞召し置きて、吾が御息所、桐壺女御
明石姫君の御方より、傳へて乞ひ申させ給ひければ、やがて女三宮よ

り、猫をば春宮へ参らせ給へり、實にいと美しげなる猫なりけり、と御附の人々興ずるを、右衛門督は、春宮の御心に、必この事、女三宮の方へ尋ね給ふべき、と思したりき、と御氣色を見置きたれば、日頃經て参り給へり、右衛門督は、小童なりし頃より、朱雀院の、取別きて思し使はせ給ひしかば、院の御山住に後れ申しては、またこの春宮にも、親しく参り、心寄せ申したり、春宮に、御琴など教へ申し給ふとて、

(栢) 御猫ども、數多集ひ候ひにけり、何れかかの見し猫にかあらむ、

と尋ねて見付け給へり、いと可愛く覺えて、搔き撫でつゝ居たり、春宮も、
(春) 實に可愛き様したりけり、心持ぞ、また懐き難きは、見

馴れぬ人を知るにやあらむ、こゝなる猫ども、特に劣らずかし、

と言へば、

(栢) 猫は、然る辨心も、専候はぬものなれども、その中にも、心賢きは、自然魂も候はむ、

など申して、

(又) 此方に優る猫ども多く候ふめるを、女三宮より参りたる猫は、暫時賜はり預からむ、

と申し給ふ、さて心の中に、強に且は痴愚がましく覺ゆ、遂に彼の猫をば尋ね取りて、夜も邊近く臥せ給ふ、明くれば猫の傳をして、撫で養ひ給ふ、人氣遠かりし猫の心も、いと能く馴れて、ともすれば衣の裾に纏はれ、倚り臥し昵るゝを、眞實に可

戀ひ詫ぶる
云々○我が
戀ひわぶる
女三宮の形
見と手馴ら
せば汝は何
とて啼きて
物思を勸む
るぞとなり
これも昔の
宿契○河海
抄に和泉式
部の歌これ
もまたさぞ
な昔のちぎ
りぞと思ふ
ものから淺
ましきかな

愛しと思ふ、かくて右衛門督は、いと甚く詠めて、端近く倚り
臥し給へるに、此猫來て、ねうくと、いと可愛げに啼けば、搔
き撫て、うたても我が物思ひを勸むるかな、と含笑まる、
〔和歌〕 戀ひ詫ぶる、人のかた見と、手ならせば、汝よ何とて、啼
くねなるらむ、これも昔の宿契にやあらむ、
と、顔を見つ、言へば、いよく可愛げに啼くを、懐に入れて、
詠め居給へり、老女達などは、

〔老〕 怪しく俄なる猫の得寵くかな、吾が殿は、かやうなるも
の、見入れ給はぬ御心に、いかなることならむ、
と咎めけり、さて春宮より、この猫召し還さるゝにも、返上せ
ず、取籠めて、これをば人のやうに語らひ給ふ、
鬚黒、左大將の北方玉葛君は、太政大臣殿の子息達、即、右衛

とありまた
唐武宗の時
宮妃の後身
猫となるこ
と花鳥餘情
に引けり

式部卿宮爲
眞木柱上
撰

門督の兄弟達よりも、夕霧、右大將をば、吾身、六條院にありし
時のまゝに、疎遠からず思ひ申し給へり、さて玉葛君は、心ば
えの角々しく、氣近くおはする人にて、對面し給ふ時々も、細
密に、隔てたる氣色なく待遇し給へれば、右大將も、桐壺女御
は吾が妹にてありながら、疎々しく、及び難げなる御心様の、餘
りなるに、玉葛君に對けて、様特別なる御親昵にて思ひ交し給
へり、鬚黒、大將、今は況して、彼の初の北方をも持て離れはて
て、玉葛君をば、雙びなく大切に持て傳き申し給ふ、この玉葛
君の御腹には、女君はなくて、男君達の限りなれば、物寂しと
て、元の北方の御腹なる、眞木柱、君を得て、持て傳かまほしく
爲給へど、御祖父式部卿宮、元北方の御父など、更に許し給はず、さて
宮は、この孫女眞木柱、姫君をなりとも、人笑ひならぬ様にて見

む、と思し言ふ、この式部卿宮は、薄雲、女院の御兄君、且は紫、
 上、並に冷泉院の女御の父君におはせば、その御勢望、いと尊
 く、冷泉院にも、御心寄いと此上なくて、この事、と奏し給ふ
 ことをば、院もえ背き給はず、心苦しきものに思ひ申し給へり、
 大方も當世めかしくおはする宮にて、六條院、致仕、大臣に、差
 次ぎ奉りては、人も参り奉仕り、世人も重く思ひ申しけり、鬚
 黒、大將も、然る世の柱石となり給ふべき下方なれば、眞木柱、姫
 君を渡されてて、その勢望何どてかは軽くはあらむ、方々より
 この姫君をば、申し出る人々、事に觸れて多かれど、宮は何方
 へも思し定めず、右衛門、督をば、式部卿宮は、孫女に、さも
 氣色ばまば、許可してむ、と思すべかるめれど、右衛門、督は、眞
 木柱、上をば、猫よりは思ひ貶し奉るにやあらむ、心に懸けても

式部卿宮嫁
眞木柱上於
營兵部卿宮

思ひ寄らぬぞ、口惜しかりける、さて眞木柱、上は、實母君の、怪
 しく物狂はしく、尙辟める人にて、尋常の有様にあらざ、持て
 消し給へるを、口惜しきものに思して、繼母玉葛、君の御邊をば、
 心注げて、ゆかしく思ひて、當世めきたる御心様にぞものし給
 ひける、兵部卿宮、營は、尙獨居にのみおはして、玉葛、君を始め、
 御心につきて思しけることどもは、皆違ひて取り放し給ひけれ
 ば、世の中に不用じく、人笑に思さるゝに、さやうにはかり、何
 時までも獨居にて、あまえて過ぐすべきにもあらず、と思して、
 この眞木柱の邊に、氣色ばみ寄り給へれば、式部卿宮は、
 (式) 何かは、傳かむと思はむ女子をば、宮仕に次ぎては、親
 王達にこそは見えさせ奉らめ、平人の剛毅に、直々しきをば
 かり、當世人の、上等くする、實に品なき業なり、

と言ひて、螢宮の御意をば、甚くも惱まし奉らず、承引き申し給ひつ、兵部卿宮は、式部卿宮の、少しの恨み所もなく、餘り容易く承引き給ひしを、却て物寂しと思せど、大方の輕蔑りにくき邊なれば、否とは得も言ひ過ぐし給はで、眞木柱上の御許へ、おはし通ひ始めぬ、宮は聳君をば、いと似るものなく、大切に傳き申し給ふ、さて式部卿宮は、女子數多持ち給ひて、長女は鬚黒、大將の北方となりしも、離別せられ、次は入内せしも、秋好、中宮に消壓されて、皇后にもなり給はず、様々物歎かしき折々多かるに、物懲りもしぬべけれど、尙この孫女の眞木柱上の事の、思ひ放ち難く覺えてぞ、かく螢宮をば、御聳には取り給ひけり、實母君は、怪しき辟物に、年頃添へて成り勝り給ふ、鬚黒、大將も、また我が事に従はずとて、疎略に見棄てられたるめ

螢兵部卿宮
上
疎眞木柱

れば、御父式部卿宮は、いとぞ心苦しき、とて、此度は、眞木柱上の御修飾をも、御自分起居して、御手づから御覽じ入れ、萬事に辱く御心に入れ給へり、兵部卿宮は、失せ給ひにける北方を、世と共に戀ひ申し給ひて、唯昔の北方の御有様に似奉りたらむ人を見む、と思しけるに、この眞木柱上、悪しくはあらねど、様變りてぞものし給ひけると思すに、口惜しくやありけむ、通ひ給ふ様、いと物憂げなり、式部卿宮、いと氣に食はぬ業かな、と思し歎きたり、實母君もさやうにこそ辟み給ひつれど、物の怪をさまりて、現心出で來る時は、聳君の進み給はぬを、口惜しく、これも浮世なりと思ひ果て給ふ、鬚黒、大將も、さればよ、いと甚く色めき給へる、彼の仇々しき螢親王をば、いかにしてかは聳にし給へるよ、と最初より親王をば、我が御心

に許し給はざりしことなればにやあらむ、この婚姻を、心外と
 思ひ給へり、玉葛君も、螢宮の、かく仇々しく頼もしげなき御
 様を、近く聞き給ふには、最初彼の宮に参り靡きて、さやうな
 る交情を見ましかば、六條院を始めとして、此方彼方、いかに
 思し見給はまし、など生可笑しくも、また哀にも、その昔も彼
 宮に氣近く見え申さんとは思ひ寄らざりき、唯彼宮の、情々し
 く、心深き様に言ひ渡りしを、今かく大將の北方になりしこと、
 彼宮のあへなく輕躁きやうにや聞き貶し給ひけむ、といと耻か
 しく、年頃も思し渡ることなれば、吾が繼子なる眞木柱、上の邊
 にて、聞き渡らむことも、心遣ひせらるべく、など思す、さて
 玉葛君の方よりも、眞木柱の事につき、然るべきことは扱ひ申
 し給ふ、さて玉葛君より、眞木柱、上の兄君達などして、螢宮の

眞木柱上祖
 母大北方怨
 螢宮

御方に、物憂げに通ひ給ふ御氣色も、知らず顔に、憎からず申
 し纏はしなどする、宮も氣の毒に思して、持て離れたる御心は
 なきに、眞木柱、上の祖母大北方といふ不良ものぞ、宮をば常に
 恕しなく怨じ申し給ふ、

(天) この孫女、禁裡へも参らせずして、彼の宮に奉ることは、
 親王達は、長閑に二心なくて見給はむをさへこそ、心安くは
 思ふべけれ、

と立腹り給ふを、螢宮も、漏り聞き給ひて、御心に、かゝる怨
 言は、これまでいと聞き習はぬことかな、昔いと愛憐と思ひし
 北方ありし時さへ、それを差置きて、尙果敢なき微行の、心す
 さびは絶えざりしがど、かゝる嚴重しき物怨じは、別段になか
 りしものを、と大北方の言の、いと氣に食はで、いと昔を戀

冷泉帝遜位

藤太政大臣
上致仕表

ひ申し給ひつゝ、故里に打詠め勝にはかりおはします、さはい
 ひつゝも、尙眞木柱、上に通ひつゝ、二年ばかりになりぬれば、か
 かる方に目馴れて、唯然る方の御交際にて過ぐし給ふ、
 果敢なくて年月も累りて、冷泉帝、御位に印かせ給ひて、十八
 年にならせ給ひぬ、皇太子とならせ給ふべき皇子おはしませず、
 物の光映なきに、世の中果敢なく覺ゆるを、位を離れて、心安
 く思ふ人々にも對面し、私様に心を遣りて、長閑に過さまほし
 くなむ、と帝は年頃思し宣はせつるを、日頃いと重く病惱ませ
 給ふことありて、俄に御位を下り居させ給ひぬ、世の人飽かず
 盛りの御世を、かく遜れ給ふことゝ、惜み歎げゝど、春宮も成
 長びさせ給ひにたれば、打續きて世の中の政事など、別段に變
 更る差別もなかりけり、太政大臣、致仕の表上りて、籠り居給

鬚黒左大將
任右大臣

承香殿女御
贈皇后

桐壺女御御
腹一宮爲
春宮

夕霧右大將
任大納言
兼左大將

ひぬ、さて大臣は、世の中の無常により、畏多き帝の君も位を
 去り給ひぬるに、年深き此身の、冠掛けむこと、何か惜からむ
 と申し言ひて、鬚黒左大將は、右大臣に爲り給ひてぞ、世の中
 の政事奉仕り給ひける、春宮の母君、承香殿女御鬚黒右大將の妹は、吾
 が皇子御位に即き給ふ御代をも、待ちつけ給はで、亡せ給ひに
 ければ、贈皇后の御位を得給へれど、人の見ぬ物の後の心地し
 て、光榮なくかひなかりけり、桐壺女御明石姫君の御腹なる、一の
 宮、春宮に居給ひぬ、然るべきことゝ、豫て思ひしがど、差當
 り猶目出度く、目驚かるゝ業なりけり、夕霧右大將、大納言に
 爲り給ひて、左大將に遷り給ひぬ、いよくあらまほしき御交
 際なり、六條院は、御位下り居給ひぬる、冷泉院の御後嗣、お
 はしまさぬを、御心の中に、飽かず口惜しく思す、朱雀院と冷

六條院歎
冷泉院無
後嗣

源氏の打續
き云々○藤
壺中宮桐壺
女御皆王孫
に出づ故に
源氏といふ
榮華物語に
源氏の打續
き后に居給
ふことは春

日の神の御
告あり云々
とあり

紫上請ニ出
家不許

○若菜下

泉院とは、御兄弟の中にて、同じ筋なれど、冷泉院は、實は六
條院と、御養母、薄雲、女院との、物の紛れに生れ給ひし御子に
おはせば、御一代の間、別殿に思ひ惱ましき御事なくて過ぐし
給へるばかりに、罪業は隠れて、これが應報にやあらむ、やが
て皇子もおはさで、末の世まで、え相傳ふまじかりける御宿世、
口惜しく物寂しく思せど、此事ばかりは、他人に言ひ合せぬこ
となれば、唯獨悒鬱くぞ思しける、春宮の御息所、桐壺、女御は、
皇子達數多添ひ給ひて、いと、御寵勢雙びなし、源氏の打續き
后に居給ふべきことを、世人飽かず思へるにつけても、冷泉院
の御后、秋好、中宮は、皇子もおはしまさぬに、強に中宮に爲置
き給へる御心を思すに、冷泉院は、いよく、六條院の御事を、年
月に添へ、限りなく有り難く思ひ申し給へり、かくて冷泉院に

は、御心に思召し、やうに、御幸も所狭からで、六條院へ渡御
り給ひなどしつゝ、かくても實に目出度あらまほしき御有様な
り、
女三宮の御事は、主上御心留めて、思ひ申し給ふ、さて女三宮
は、禁中を始め奉り、大方の世にも、遍く持て傳かれ給ふを、猶
紫、上の御勢には、え勝り給はず、年月経るまゝに、六條院と、紫
上との御中、いと善しく、睦び申し交し給ひて、少しも飽かぬ
ことなく、隔ても見え給はぬものながら、紫、上は、六條院に、
(紫) 今はかく大族の住居ならで、閑靜に行法をもせばやとぞ
思ふ、現世は、かくばかりと、見果てつる心地する、年齢に
もなりにけり、然りぬべき様に、思し許してよ、
と、眞實に申し給ふ折々あるを、院は、

○若菜下

(源) そはあるまじく、辛き御事なり、自分も深き本意あることなれど、其方の跡に留まりて、物寂しく思さむことを思ひ、はた其方の有る世に變らむ御有様の、不安心さによりてこそ、かくは此世に長在ふれ、吾が終に出家の本意遂げむ後に、世を遜るとも、飾を落すとも、ともかくも思し成れ、

六條院具
紫上明石上
桐壺女御等
詣住吉社

などばかり、妨げ申し給ふ、桐壺女御は唯この紫上を、眞の御親に待遇し申し給ひて、御實母、明石上は、隱家の御後見にて、卑下しものし給へるも、却て行く先頼もしげに、目出度かりけり、大尼君も、やゝもすれば、堪へぬ喜悅の涙、ともすれば落ちつゝ、目をさへ拭ひ正して、命長き嬉しげなる例になりて、喜び居給ふ、女御は、住吉の御願、かつぐ果し給はむとて、御祈禱に詣で給はむとて、入道の寄越したる、彼の箱開けて御覽

ずれば、様々の嚴重しきことども多かり、毎年の春秋の神樂に、必長き世の祈禱を加へたる願ども、實にかゝる桐壺女御の如き、國母の御勢ならでは、果し給ふべきことゝも、思ひ掟てざりけり、唯入道の走り書きたる趣の、學才々々しく、確乎しう、神佛も聞き入れ給ふべき言の葉、明白なり、いかで入道のやうなる、然る山伏の聖心に、かゝる高尚なることどもを、思ひ寄りけむと、あはれに負氣なくも見給ふ、さて入道は、然るべき因縁ありて、暫時、假始に身を窶しける、昔の世の行者にやありけむなど思し廻らすに、國司の祖父も、いとゞ輕々しくも思されざりけり、女御は、此度は、入道の御願を果す心をば顯はし給はで、唯六條院の御物語につけて、出で立ち給ふ、その昔、須磨より明石まで、浦傳への物騒がしかりし間の、許多の、御願ど

陪從○東遊
には歌人十
二人を要す
四位五位六
位各四人な
りまた加陪
從とて近衛
の官人或は

も、皆果し盡し給へれども、尙世の中に、かくおはしまして、か
かる種々の榮華を見給ふにつけても、神の御冥助は忘れ難くて、
院は紫上をも具し申させ給ひて、住吉へ詣でさせ給ふ、評判尋
常ならず、いみじく事ども殺ぎ棄て、世の煩ひあるまじく、と
省畧せ給へど、太上皇の御幸とて、限りありければ、珍らかに
装ほしくぞ、公卿も、左右大臣二所を置き奉りては、餘は皆供
奉し給ふ、舞人は衛府の佐どもの、容貌清げに、丈立平等しき
限りを撰らせ給ふ、この撰抜に入らぬをば、耻辱に愁ひ歎きた
る物好どもありけり、陪從も、石清水、加茂の臨時の祭などに
召す人々の、道々の特別に勝れたる限り、調へさせ給へり、加
陪從二人ぞ、近衛府の、その道に名高き限りを召したりける、御
神樂の方には、人いと多く奉仕れり、今上、春宮、冷泉院の殿

諸家の諸大
夫等を召加
ふることあ
り

上人、方々に分れて、心寄せ奉仕る、數も知らず、色々に飾り
盡したる公卿の御馬、鞍、馬副、隨身、小舎人童、次々の小舎
人などまで、調へ飭りたる見物、二となき様なり、桐壺、女御、
紫上は、第一の御車に、同乗に召し給へり、次の御車には、明
石上、尼君、忍びて乗り給へり、女御の御乳母、心知りのもの
なれば、その車に陪乘りたり、御方々の副車、紫上の方の女房
の車、五輛、女御の方の女房の車、五輛、明石上の方の女房の
車、三輛、目も綾に飭りたる装束、有様、言ふも愚なり、さて
六條院は、尼君をば同じくは、老の波の皺延ぶばかりに、人の
目にも立つばかりにして、詣てさせむ、と言ひけれど、此度は、
かく大方の評判に立交らむも、尼君の爲、傍痛し、もし若宮御
位にても即き給ひて、思ふやうならむ世の中、待ち出でたらば、

神の忌垣○
河海抄に千
早ふる神の
いがきには
ふ葛も秋に
はあへすう
つるひにけ
りとあり
音にのみ○
細流抄に紅
葉せぬ常盤
の山は吹風
の音にや秋

然もこそ爲給はめ、と明石上は、押鎮め給ひけるを、尼君は、そ
れまでの残りの命、不安心く、かつぐ物も見まほしがりて、慕
ひ参り給へるなりけり、明石上は、然るべき因縁にて、元より
かく輝き給ふ御身どもなれど、尼君は、その身の上より見れば、
明石上よりも、いみじかりける宿契、顯著に思ひ知らる、有様
なり、十月中旬なれば、神の忌垣に延ふ葛も、色變りて、松の
下紅葉など、音にのみ秋を聴かぬ貌なり、繁雜しき高麗、唐土
の樂よりも、清雅しき東遊の、耳馴れたるは、懐かしく面白く、
波風の聲に響き合ひて、然る樹高き松濤に、吹き立てたる笛の
音も、他にて聴く調には、變りて身に染み、和琴に打合せたる
拍子も、太鼓を離れて、調子取りたる方、仰々しからぬも、
めかしく、凄う愉快く、所からは、況して面白く聞えけり、舞

なきわた
らむとあ
り
求子○此は
東遊の曲の
名にて謠は
千早ふる平
野の松の數
繁み千代に
八千代も色
はかはらじ

人の装束、山藍に摺れる竹の節は、松の緑に見え紛ひ、挿頭の
花の色々は、秋の草に異なる差別分れずして、何事にも目のみ紛
ひ映ふ、求子終曲る末に、若やかなる上達部は、肩脱ぎて下り
給ふ、匂もなく黒き袍に、蘇枋重、蒲陶染の袖を、俄に引き綻
ばしたるに、紅深き袵の袂の、打まぐれたるは、少しばかり濡
れたる、松原をば忘れて、紅葉の散るに、思ひ紛へらる、みる
かひ多かる姿どもに、いと白く枯れたる萩を、高やかに挿翳し
て、唯一返舞ひて入りぬるは、いと愉快く、飽かずぞありける、
院は昔の事思し出でられ、中頃沈淪み給ひし世の有様も、目の
前のやうに思さるゝに、當時の事、打亂れ語り給ふべき人もな
ければ、致仕大臣將頭中をぞ、戀しく思ひ申し給ひける、内に入
り給ひて、第二の車に、忍びて御消息ありて、

誰かまた○
昔の有様を
又知る人も
なければ尼
君にかくい
ひやるとな
り

(源歌) 誰かまた、心を知りて、住吉の、神世を経たる、松に
言問ふ、

と、御疊紙に書き給へり、尼君拜見て、打萎れたり、かゝる榮
華の御世を見るにつけても、彼の浦にて、今はと別れ給ひし時
女御明石姫君のおはせし有様など、思ひ出るも、いと辱かりける身
の宿世の程を思ふ、世を背きし入道も、戀しく、様々に物哀し
きを、且は忌々しと、事忌して、

(尼歌) 住の江を、生けるかひある、なきさとは、年経るあま
も、今日や知るらむ、

遅くは便なからむ、と唯我心に打思ひけるまゝを、御返事に奉
りけるなりけり、明石、上は、

(明歌) 昔こそ、まづ忘れね、住吉の、神の志るしを、見る

住の江を○
生けるかひ
ある我身の
事を今日は
海士も知ら
むとて蟹に
尼をかけた
り
昔こそ○住
吉明神の靈

験を見れば
昔を忘れ
すとたり

につけても、

と獨言ちけり、院は、こゝにて、終夜遊び明かし給ふ、二十日
の月、遙に澄みて、海の面、面白く見え渡るに、霜のいと仰々
く置きて、松原も色紛ひて、萬の事、そゞろ寒く、愉快さも、哀
情さも、立ち添ひたり、紫、上、平常の垣根の内ながら、時々
つけてこそ、興ある朝夕の音楽に、耳古り目馴れ給ひけれ、御門
より外の物見、専爲給はず、況してかく都の外の逍遙は、また
習ひ給はねば、珍らしく愉快く思さる、

(紫歌) 住の江の、松に夜深く、置く霜は、神の掛けたる、木
綿蔓かも、

と、詠み給ひて、篁の朝臣の、比良の山さへ、といひける、雪
の朝を思し遣れば、神も祭事の心受け給ふ靈験にやあらむ、と

住の江の云
々○社頭の
松に白く置
きたる霜は
神の掛けた
まひし木綿
蔓にやとな
り

比良の山云々○袋草紙に文時の歌ひもろぎは神の心にうけつらし比良の高根に木綿蔓せりとありて葦朝臣の歌のこと物に見えず
祝子が云々○神の受納の靈驗顯著なりとなり祝子は神官をいふ
本末○神樂に本歌末歌とてあり

いよ／＼頼もしくぞありける、女御は、
(桐歌) 神人の、手に執り持たる、榊葉に、木綿掛け添ふる、
深き夜の霜、

と詠み給へば、紫上の女房中務君、
(中歌) 祝子が、木綿うちまがひ、置く霜は、げにいちあるき、
神のゑるしか、

かく、次々、數知らず多かりけるを、何せむにかは聞き置かむ、
かゝる折節の歌は、例の上手めき給ふ男達も、却て出で消えし
て、松の千歳の古きを離れて、當世めかしき詞もなければ、面
倒くてぞ省略さける、夜もほの／＼と明け行くに、霜はいよいよ
よ深くて、本末もたど／＼しく、怪しきまで酔ひ過ぎにたる、神
樂面どもの、己が顔をば知らで、面白き事に心は染みて、庭燎

萬歳々々○神樂千歳歌に千歳々々々やちとせのせんざいや萬歳々々々やよろづのまんざいやとあり
千夜を云々○伊勢物語に秋の夜の千夜を一夜になせりとあり

も影濕りたるに、尙萬歳々々と、榊葉を取り返しつゝ、祝ひ申
す、院の御世の末の繁昌、思ひ遣るぞ、いとゞしきや、萬の事、
飽かず面白きまゝに、千夜を一夜になさまほしき夜の、何にも
あらで明けぬれば、返る波に競ふも、口惜しく若き人々は思ふ、
松原に遙々と立て續けたる御車どもの、風に打靡く下簾の隙々
も、常磐の影に、花の錦を引き加へたると見ゆるに、袍の色々
の差別を着て、面白き懸盤取り續けて、食物參り渡すをぞ、下
人などは、目に着きて愛甚しとは思へる、尼君の御前にも、淺
香の折敷に、青鈍の覆織りたるに、精進物を載せて參るを見て、
目覺しき女の宿世かな、と女房達、各自後言ちけり、參詣で給
ひし途は、仰山しくて煩はしき神寶、様々に持行くなど、所狭
げなりしを、歸途は、萬の逍遙を盡し給ふ、言ひ續くるも、面

明石尼君幸福

朱雀院法皇
專二行法

倒く煩雜しきことどもなれば、これも省略きぬ、かゝる御有様をも、彼の入道の、山に籠りて、聞かず見ぬ世に、懸け離れ給へるばかりぞ、飽かざりける、されどさやうに満足ひたることは、難き事なり、却て交らはましも見苦しくやあらまし、世の中の人、明石入道などを、例にして、心高くなりぬべき頃なるめり、さて明石の尼君をば、萬の事につけて、愛てあさみ、世の言種になりて、幸福人には、必明石の尼君とぞいひける、彼の致仕大臣の姫君近江君は、雙六打つ時の詞にも、明石の尼君とぞいひては、養乞ひける、

朱雀院法皇は、御行法を、いみじく爲給ひて、今上帝の御政の、御事なども、聞き入れ給はず、唯春秋の朝觀にぞ、昔思ひ出でられ給ふことも交りける、さて法皇は、姫宮女三宮の御事をば、

女三宮敍二品

かりぞ、尙え思し放たて、六條院をば、猶大方の御後見に思ひ申し給ひて、今上帝にも、内々の御心寄せあるべく奏させ給ふ、かくて女三宮は、二品になり給ひて、御封戸など増さる、いよ花やかに、御勢力添ふ、紫上は、かく年月に添へて、方々に勝り給ふ御寵勢に、我身は唯六條院一所の御待遇に、他人には劣らねど、餘り年積りなば、その御心ばえも、終に衰へなむ、然あらむ世を見果てぬ先に、我心と、此世を背きにしがな、と撓みなく思し渡れど、それも賢しきやうにや思されむか、と包まれて、院へは、確然しくもえ申し給はず、女三宮には、今上帝さへ、御心寄特別に申し給へば、六條院には、法皇の御方へ、疎略に聞かれ奉らむも、御氣の毒にて、女三宮へ渡り給ふこと、漸々紫上と平等しきやうに成り行く、女三宮、御寵勢勝るにつ

け、紫上は、然るべきこと道理とは思ひながら、さればよとばかり、心安からず思されけれど、尙つれなく同じ様にて過ぐし給ふ、桐壺女御の御腹、春宮の御差次の姫君、女一の宮を、紫上の御方に引取りて、取別き傳き奉り給ふ、その御扱ひにぞ、徒然なる御夜離の間も慰め給ひける、さて女御の御子達を、紫上は、何れも別かず、慈しく愛しと思ひ申し給へり、夏の御方花散里は、かくとりくくなる、紫上の、御孫扱ひを羨みて、夕霧、左大將の御女にて、典侍惟光朝臣の女の御腹なるを、切に迎へてぞ傳き給ふ、いと美げにて、心ばえも、齡の程よりは洒落成長げたれば、六條院も、可愛がり給ふ、院は少き御子孫と覺えしがど、桐壺女御や、夕霧、左大將の如く、末廣こりて、此方彼方、御子孫いと多く成り添ひ給ふを、今は唯これを慈愛しみ扱ひ給ひてぞ、

鬚黒右府出入六條院

徒然も慰め給ひける、鬚黒、右大臣、六條院へ參り奉仕り給ふこと、古よりも勝りて親しく、今は北、方玉葛、君も、大人び果て、彼の昔の院の、懸想々々しき筋は、全く思ひ離れ給ひしにやあらむ、玉葛、君は、然るべき折も渡り給ひつゝ、紫上にも御對面ありて、御交際あらまほしく申し交し給ひけり、女三宮ばかりぞ、同じ様に、若く大様ぎておはします、院は、桐壺女御をば、今は公様に思ひ放ち申し給ひて、この女三宮をば、いと氣の毒に、幼稚からむ御娘のやうに、思ひ養育み奉り給ふ、朱雀院法皇の、今は無下に終焉近くなりぬる御心地して、物心細きを、更に現世の事顧みじと思ひ棄つれど、今一度女三宮に御對面ぞあらまほしきを、もし恨残りもこそすれ、仰山しき様ならで、女三宮の御方へ渡り給ふべく、申し給ひければ、六條院も、實に

朱雀院尙思女三宮

然るべきことなり、かゝる御氣色なからむにてさへ、此方より
 進み参り給ふべきを、況してかく行幸を待ち申し給ひけるが、御
 氣の毒なること、思ひ、此方より参り給ふべきこと思し設くれ
 ども、その序なく、参り給ふべき用件なきに、忍びて這ひ渡り
 給ふべきも、いかなるものによ、はた此方へ御渡りあらむには、
 何業をしてか、御覽せさせ給ふべき、と、思し廻らす、此度法皇
 の五十歳の御賀には、若菜など調じてや、と、思して、様々の御
 法服の事、齋の御儲の修飾、何くれと、様體特別に變れること
 なれば、人の骨折ども入りつゝ、思し廻らす、法皇は、古も音
 樂の方に、御心留めさせ給へりしかば、舞人樂人などを、心特
 別に撰定め、其伎に勝れたる限りを調へさせ給ふ、鬚黒、右大臣
 の子息ども二人、夕霧、左大將の子息、典侍腹なるを加へて、三

六條院爲
 朱雀院法皇
 五十賀準備

人を撰び、その内、いまだ小き七歳より上のは、皆殿上せさせ
 給ふ、螢兵部卿、宮の御子、童孫王など、凡て然るべき宮達の御
 子ども、家の子の君達、皆撰び出て給ふ、殿上の君達も、容貌
 善く、同じく舞の姿も、心特別なるべきを定めて、數多の舞の
 豫備を爲させ給ふ、いみじかるべき晴の度の御事とて、皆人心
 を盡してぞ奔走みける、道々の音樂の師、上手どもは、間暇な
 き頃なり、女三、宮は、元來琴の御琴をぞ、御父の院に習ひ給ひ
 けるを、いと少くて院に引き別れ奉り給ひにしかば、父院は覺
 束なく思して、

(朱) 宮の方へ参り給はむ序に、彼の御琴の音ぞ、聽かまほし
 き、早く別れて、秘傳を授け中止たるを、さりとも其後、六
 條院の御教授にて、宮は琴ばかりは弾き取り給ひつらむ、

と、後言申し給ひけるを、今上帝も聞召して、

(今) 宮の御琴、實にさりとも氣容特別ならむかし、院法の御前にて、宮の秘手、盡し給はむ序に、朕も参りて聽かばや、など詔はせけるを、六條院も傳へ聞き給ひて、

(源) 年頃然りぬべき序毎には、宮へも教へ申すこともあるを、その氣容は、實に勝り給ひにたれど、また君上方の、聞召しどころある、物深き秘手には及ばぬを、宮の何心もなくてあらむに、院、帝、参り給へらむ序に、聞召さむと、頻にゆかしがらせ給はむは、いと不都合かるべきことにもあらむ、

と、いと氣の毒に思して、此頃ぞ、御心留めて、六條院は、女三宮に御琴教へ申し給ふ、調子特別なる手二曲、三曲、面白き大曲どもの、四季につけて變るべき響、空の寒さ温さを調へ出

六條院教
琴女三宮

大曲○琴に
大中小の曲

ありて春は
角夏は徵秋
は商冬は羽
にて律は寒
呂は温なり

桐壺女御退
出六條院

桐壺女御懷
妊

で、奥秘かるべき手の限りを、取り立て、教へ申し給ふに、宮は不安心くおはするやうなれど、漸々心得給ふまゝに、いと能くなり給ふ、晝はいと人繁く、尙一度も申し按ずる暇も、心惚忙しければ、夜々ぞ靜に事の心をも染め奉るべき、とて、院は紫、上にも、その頃は、御暇を申し給ひて、日暮教へ申し給ふ、院は、桐壺女御にも、紫、上にも、琴は習はし奉り給はざりければ、女御は、この折、專耳馴れぬ秘曲ども、弾き給ふらむを、ゆかしと思して、故意とは有りがたき御暇を、たゞ暫時、と、今上帝に申したまひて、六條院に退出で給へり、さて女御は、皇子二所おはするを、またも懷妊み給ひて、五月ばかりにぞ成り給へれば、神事などに託けて、退出で給ふなりけり、今上帝よりは、十一月過ぐしては、禁中に還り給ふべき御消息、女御の御

許へ、打頻りあれど、女御はかゝる序に、かく面白き夜々の御
 樂遊を、羨ましく、何どて院は我には傳授へ給はざりけむ、と
 無情く思ひ申し給ふ、冬の夜の月は、人に違ひて愛て給ふ、院
 の御心なれば、面白き夜の、雪の光に、折に合ひたる秘曲ども
 弾き給ひつゝ、伺候ふ人々も、少しこの方に心寄せたるに、御
 琴ども、一人々々に弾かせて、樂遊びなどし給ふ、年の暮つ方
 は、紫、上などには、新年の用意に多忙しく、此方彼方の御衣の、
 染織り裁縫などの御營みに、自然御覽じ入るゝこともあれば、春
 の麗和ならむ夕などに、いかでこの御琴の音聴かむ、と、言ひ渡
 るに、年も改まりぬ、
 今年は、朱雀院法皇の、五十の御賀、まづ朝廷より爲させ給ふ
 事ども、いと繁多きに、六條院より奉獻る御賀、差合ひては、便

朱雀院法皇
五十賀

なく思されて、少し間過ぐし給ふ、即ち二月十餘日と定め給ひ
 て、樂人舞人など参りつゝ、御試樂絶えずあり、
 (源)かの紫、上の、平生にゆかしうする御琴の音、いかでこの
 人々の箏、琵琶の音も合せて、女樂試みさせむ、當世の音樂
 の上手どもこそ、更に此邊の人々どもに勝らね、此邊の人々
 は、確乎しく傳へ取りたることは、專なけれど、何事も、い
 かで心に知らぬことあらじとぞ、幼少き間に思ひしかば、世
 にある音樂の師といふ限り、また高き家々の然るべき人の秘
 傳どもを、残さず試みし中に、いと深く耻しきかなと覺ゆる、
 勝れたる分際の人ぞなかりし、昔よりも、また此頃の若き人
 人の、洒落由緒めき過ぐすによりて、またかく音樂の道は、淺
 くなりたるべし、多くの音樂の中に就いても、琴はまた況

して更に學ぶ人なくなりたりとか、琴はこの女三宮ほどさへも、傳へたる人、専あらじ、

と言へば、女三宮は、何心なく打笑みて、嬉しく琴の方も、かく免許し給ふ程になりけると思す、さて女三宮は、御年廿一二ばかりになり給へど、尙いといみじく半成に少齡なる心地して、細くあどけなく、美しくばかり見え給ふ、院は、

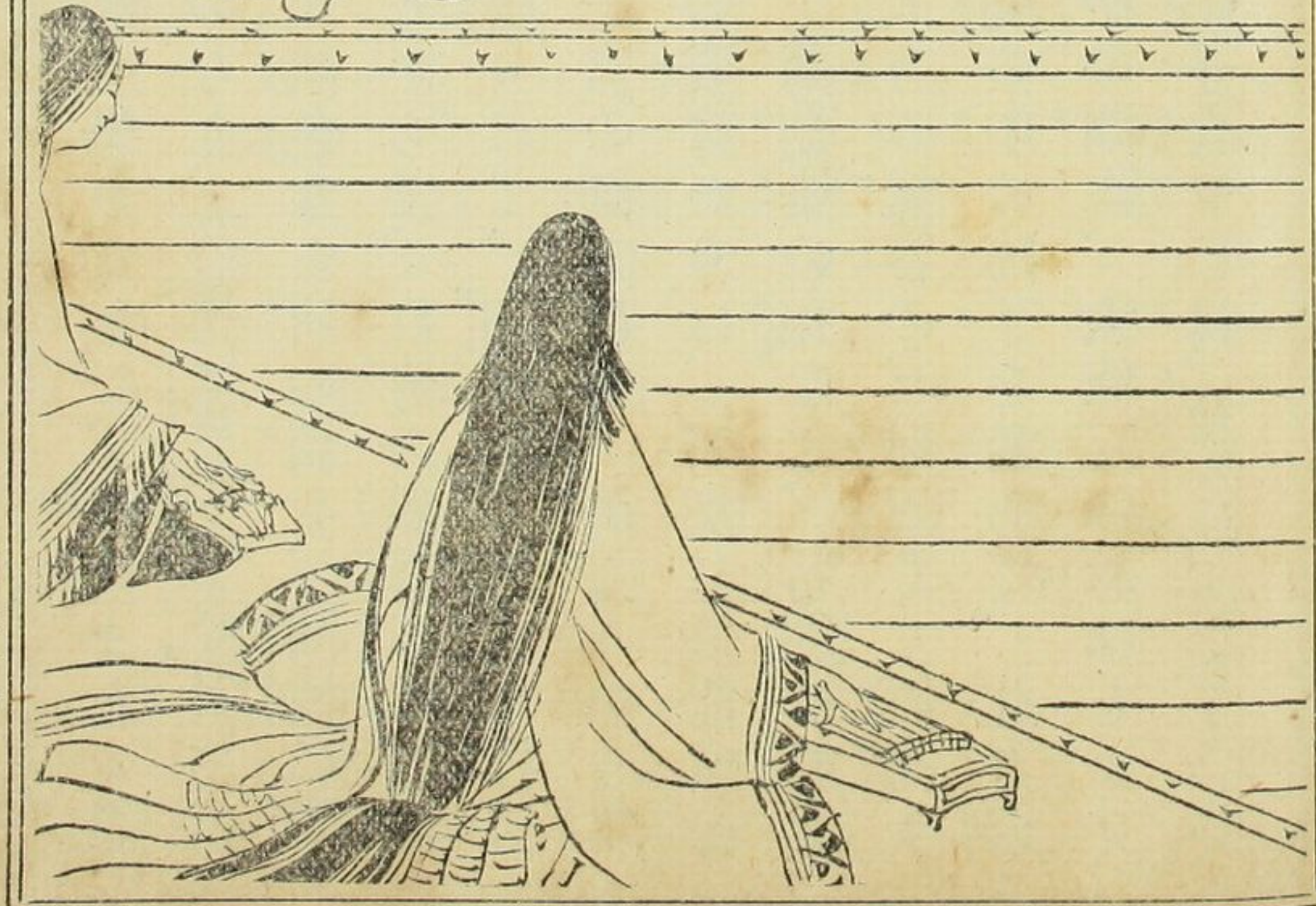
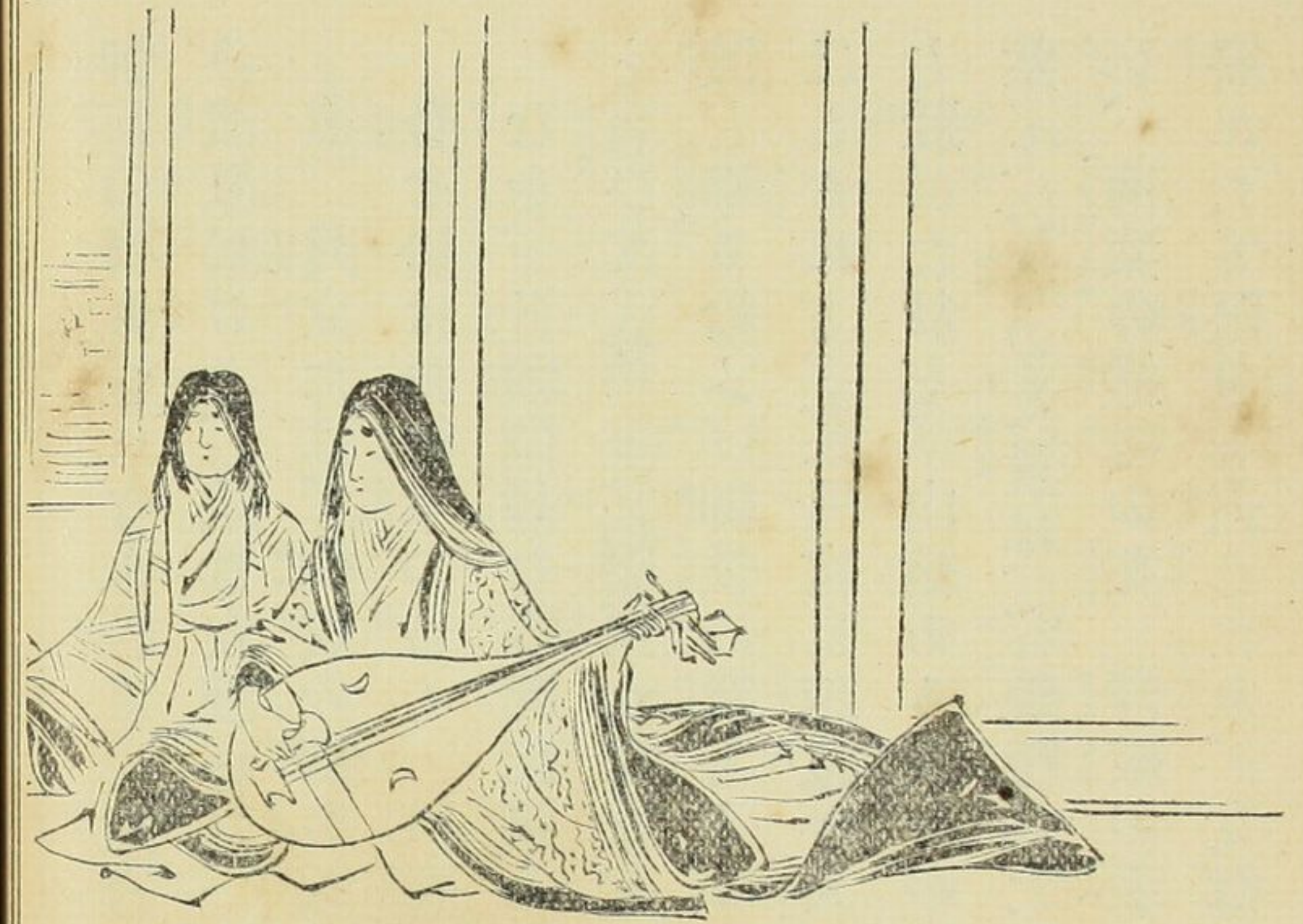
(源) 其方は御父の院朱雀にも、久しく見え奉り給はで、年經ぬるを、院の壯び勝り給ひにけりと御覽すほど、用意加へて見え奉り給へ、

と事に觸れて、教へ申し給ふに、實にかゝる御後見なくては、況して幼稚くおはします御有様、隠れなからまし、と、人々も見奉る、正月廿日ばかりになれば、空も面白き程に、風緩く吹きて、

御前の梅も盛になり行く、大方の花の木どもも、皆氣色ばみ、霞み渡りにけり、院は女三宮に、

(源) 月立たば、御賀の御用意近く、物騒がしからむに、搔き合せ給はむ御琴の音も、試樂めきて、仰山しく人の言ひ成さむを、此頃閑靜なる間に試み給へ、

と言ひて、紫上、桐壺、女御などをば、女三宮のまします寢殿に渡し奉り給ふ、御供に我もくと、物ゆかしがりて、參上らまほしがれど、女三宮に疎遠き人をば、撰り留めさせ給ひて、少し壯びたれど、由緒ある限りの女房ども、撰りて伺候はせ給ふ、紫上の方の女童は、容貌勝れたる四人、赤色の表着に、櫻の干衫、薄紫の織物の袷、浮紋の表の袴、紅の打たる様、持成し方、勝れたる限りを召したり、女御の御方にも、正月なれば、御修



飾など、いとゞ改まれる頃の、清く曇りなきに、各挑ましく盡したる粧装ども、鮮かに似るものなし、女童は青色の表着に、蘇枋の干衫、唐綾の表の袴、和は山吹色なる唐の綺を、同様に調へたり、明石上の女童は、仰山しからで、紅梅の表着二人、櫻の表着二人、干衫は皆青磁色の限りにて、和は濃く薄く、打目など一通ならで着せ給へり、女三宮の御方にも、御方々かく集ひ給ふべく聞きたまひて、女童の姿ばかりは、特別に修飾はせ給へり、青丹の表着、柳の干衫、蒲萄染の和など、特別に好ましく珍らしき様にはあらねど、大方の氣容の、嚴重しく氣高きこと、然はいへど、雙びなし、廂の中の障子を放ちて、此方彼方、御几帳ばかりを區別にて、中の間は、六條院のおはしますべき御座所裝飾ひたり、今日の拍子合せには、童を召さむとて、

鬚黒、右大臣の三郎、即ち玉葛君の御腹の、阿三君は、笙の笛、夕霧、左大將の御太郎、即ち雲井、雁の御腹の君は、横笛吹かせて、簀の子に侍はせ給ふ。内には御袴ども並べて、御彈物ども参り渡す、院の秘藏し給ふ御彈物ども、美麗しき紺地の袋どもに入れたるを取出て、明石上には、琵琶、紫上には和琴、桐壺、女御には箏の御琴を渡し給ふ、院は女三宮には、かく仰山しき名器は、まだえ弾き給はずや、と、危くて、例の手馴らし給へる御琴をぞ、調べて奉り給ふ、

(源) 箏の御琴は、緩ぶとなけれど、尙かく物に合する折の調につけて、琴柱の立所、亂るゝものなり、能くその心知り調ふべきを、女は張り鎮め得じを、尙大將霧をこそ、召寄せつへかるめれ、この笛吹き童ども、まだいと幼少げにて、拍

子調へむ頼み強からず、
 と笑ひ給ひて、左大將此方に、と、召せば、紫、上を始め、御方々、
 耻かしく心遣ひしておはす、明石、上を放ちては、何れも皆院の
 捨て難き御弟子どもなれば、御注意へて、左大將の聴き給はむ
 に、難なかるべくと思す、女御は、平生に主上の聞召すにも、音
 樂に合奏せつゝ、弾き鳴らし給へれば、後安きを、紫、上の和琴こ
 そ、幾何ならぬ調なれど、拍子定まりたることなくて、音樂に
 合奏せにくゝ、外の琴の音は、皆搔き合するものなるを、これ
 は却て亂るゝ所もやあらむ、と、生氣の毒に思す、夕霧、左大將は、
 いと甚く心懸想して、内裏にて主上の御前の、仰山しく端正し
 き御試樂あらむよりも、今日の心遣ひは、殊に勝りて覺え給へ
 ば、鮮かなる御直衣、香に染みたる御衣ども、袖甚く薫き染め

鶯誘ふ○古
 今集に花の
 香を風の便
 にたくへて
 ぞ驚さそふ
 しるべには
 やるとあり

て、引き修ひて参り給ふ間、暮れ果てにけり、由緒ある黄昏時
 の空に、梅花は去年の舊雪思ひ出でられて、枝も撓むばかり咲
 き亂れたり、緩らかに打吹く風に、一通ならず匂ひたる、御簾
 の内の薫りも、吹き合せて、鶯誘ふ端に爲つべく、いみじき殿
 中の邊の匂なり、院は、御簾の下より、箏の御琴の端、少し差
 出し給ひて、左大將に、
 (源) 軽々しきやうなれど、これが緒を調へて、調べ試み給へ、
 こゝにまた、疎遠き人の、入るべきやうもなきを、
 と言へば、左大將は、打畏りて、賜はり給ふ間、用意多く見善
 くて、一越調の聲に、發絃を立て、ふとも調べ遣らで、伺候
 ひ給へば、
 (源) 手一曲なりとも、弾き給はぬは、不似合じからむ、尙搔

き合せばかりをこそ爲給へ、
と言へば、左大將、

(夕) 更に今日の御樂遊の、御合手に交らふばかりの手遣ひぞ、
覺えず候ひけるを、

と氣色ばみ給ふ、院は、

(源) 然もあることなれど、女樂にえ事交せずしてぞ逃にける、
と傳言らむ名こそ惜しけれ、

とて笑ひ給ふ、左大將は調へ終て、面白き程に、搔き合せば
かり弾きて、參らせ給ひつ、この御孫の君達太郎君 三郎君の、いと美し
き直衣姿どもにて、吹き合せたる笙笛の音ども、また若けれど、
生先ありて、いみじく面白げなり、御彈物どもの、調ども調へ
終て、いよく女樂搔合せ給へる間、何れとなき中に、明石上

御孫の君達
○太郎君は
源氏の嫡孫
にて三郎君
は外孫なり

の琵琶は、勝れて上手めき、神さびたる古風の手遣ひ、音も澄
み果て、面白く聞ゆ、紫上の和琴には、左大將も耳留め給へ
るに、懐かしく愛敬づきたる御爪音に、搔き返したる音の、珍
らしく當世めきて、更に本職とある上手どもの、おどろくしく
搔き立てたる調、調子に劣らず、賑はしく、和琴にも、かゝる
手ありけりと聽き驚かる、深き御稽古の程、顯はに聞えて面白
きに、院は始めて御心落着て、いと有り難く思ひ申し給ふ、桐
壺女御の箏の御琴は、樂器の隙々に、心もとなく漏り出る物の
音がらにて、美しげに艶めかしくばかり聞ゆ、女三宮の琴は、尙
若き方なれど、習ひ給ふ眞盛なれば、たどくしからず、いと
能く音樂に響き合ひて、優になりける御琴の音かなと、左大
將聽き給ふ、かくて左大將は、拍子取りて、唱歌し給ふ、院も

鶯の羽風云々○河海抄に具平親王の歌鶯の羽風になびく青柳の亂れて物を思ふ頃かなまた

時々扇打鳴らして、加へ給ふ御聲、昔よりもいみじく面白く、少し太かに、剛強しき氣添ひて聞ゆ、左大將も、聲いと勝れ給へる人にて、夜の靜に成り行くまゝに、言はむ限なく、懐かしき夜の御樂遊なり、今宵は廿日にて、月待遠の頃なれば、燈籠此方彼方に懸けて、火宜き程に、燈させ給へり、院は、女三宮の御方を覗き給へれば、人より勝りて、小く美しげにて、唯御衣ばかりある心地す、匂ひやかなる方は後れて、唯いと貴やかに美しく、二月の中旬ばかりの青柳の、纔に垂枝り始めたらむ心地して、鶯の羽風にも亂れぬべく、あどけなく見え給ふ、櫻色の細長に、御髪は左右より翻れ懸りて、柳の絲の様したり、これこそは限りなき人の御有様なるめれ、と、見ゆるに、明石女御壺は、同じ様なる御艶めき姿の、今少し匂ひ加はりて、持成、氣

白氏文集柳の詩に綠絲枝弱不勝鶯とあり

容、奥ゆかしく由緒ある様し給ひて、能く咲き翻れたる藤の花の、夏に懸りて、傍に雙ふ花なき朝ぼらけの心地ぞし給ふ、然るは、いと懐妊なる程になり給ひて、惱ましく覺え給ひければ、御琴も押遣りて、脇息に推懸り給へり、小かに裊び懸り給へるに、御脇息は、例の大きなれば、纔に及びたる心地して、別更に小く作らばや、と、見ゆるぞ、いと愛憐げにおはしける、紅梅色の御衣に、御髪の懸り、はらくと清らにて、火影の御姿、世になく美しげなるに、紫、上は、蒲萄染にやあらむ、色濃き小袿、薄蘇枋の細長に、御髪の溜れる程澤山く寛らかに、大きな宜き程に、様體あらまほしく匂ひ満ちたる心地して、花といはば、櫻に譬へても、尙それより勝れたる氣容別段にもし給ふ、かかる御邊に、明石、上は、消壓さるべきを、いとさやうにもあら

五月まつ
古今集に五
月まつ花橘
の香をかけ
ば昔の人の
袖の香ぞす
るとあり

ず、持成など、氣色ばみ耻しく、心の底奥ゆかしき様して、そこはかとなく、貴に艶めかしく見ゆ、さて明石、上は、柳の織物の細長、萌黄にやあらむ、小袷着て、羅の裳のはかなげなる引懸けて、故意としく卑下したれど、氣容思成も、奥ゆかしく、輕侮らはしからず、高麗の青地の錦の、端刺したる袴に、正面にも居らで、琵琶を打置きて、唯氣色ほど弾き懸けて、裊和に遣ひ成したる撥の持成、音を聴くよりも、また有り難く懐かしくして、五月まつ花橘の、花も實も具して、押折れる薰り覺ゆ、是も彼も、打解けぬ御氣容どもを、聞き見給ふに、左大將も、御簾の内、いとゆかしく覺え給ふ、紫、上の、彼の野分の朝、見し折よりも壯び勝り給へらむ有様、ゆかしきに、靜心もなし、女二宮をば、今少しの宿世及ばましかば、我物としても見奉りてまし、

臥待の月
十九夜を云
ふ

六條院評
論音樂

心のいと緩きぞ悔しきや、かの朱雀院は宮をば、度々さやうに我に面向けて、後言にも宣はせけるものを、と、妬く思へど、宮の少し心安き方に見え給ふ御氣容に、輕蔑り申すにはなけれど、いとも心は動かざりけり、さて大將は、この紫、上をば、何事も思ひ及ぶべき方なく、氣遠くて、年頃過ぎぬれば、いかでか、唯大方に、心寄せある様をも見え奉らむ、とばかりの、口惜しく長息かきしきなりけり、一體この大將は、眞實なる性質にして、無理に有るまじく負ふ氣なき心などは、更に持し給はずして、いと能く持て收め給へり、夜更け行く風の氣容、冷かなり、臥待の月、纔に差出でたる、待遠なりや、院は、
(源) 春の朦朧月夜よ、いと面白けれど、秋のあはれも、またかやうなる樂の音に、虫の聲寄せ合せてたる、一通ならず此上な

く響き添ふ心地すかし、

と言へば、左大將、

夕 秋の夜の隈なき月には、萬の音樂の滞りなきに、琴笛の音も、明かに澄める心地はし候へど、猶故意に作り合せたるやうなる空の景色、千種の花の露も、色々目移ろひ、心散りて、樂の音も纏らず候ふ、隈こそあれ、春の空のたどくしき霞の間より、朦朧なる月影に、靜に吹き合せたらむには、いかでか笛の音なども艶に澄み上り候はざらむ、女は春を懷むと、古き人の言ひ置き候ひける、實にさやうにぞ候ひける、懐かしく音樂の調ふることは、春の夕暮こそ別段に候ひけれ、と申し給へば、院、

女は春を懷む○詩經に有し女懷春吉士誘之とあり

(源) 否、この評定よ、古より人の分き兼ねたることを、末の

世に下れる人の、え明め了つまじくこそあれ、樂の調、曲の物どもは、實に律をば、次のものにしたるは、然もありかし、など言ひて、

律をば次のもの○漢土にては陽律爲し陰律爲し呂とあれど我國の催馬樂には呂律といひて呂を春の調律を秋の調として律を呂の次に置けり

(又) いかにかに當今有識の譽高き、その人かの人、主上の御前などにて、度々試みさせ給ふに、音樂に勝れたるは少くなりたるめるを、その師兄と思へる上手ども、幾何もえ學び取らぬにやあらむ、その上手ども、やがて今夜の女樂の、微なる婦人達の中に彈き交ぜたらむに、さして際離るべくも覺えず、年頃我身、かく世に埋れて過ぐすに、耳なども少し辟々しくなりて、この女樂などを、面白く聽くにやあらむ、口惜しくぞある、この六條院の内は、人の技藝、はかなく學び取りすることとも、奇妙しく物の光榮ありて、外には勝る所なり、その

御前の御樂遊などに、第一番に撰拔ばる人々、この婦人達に比較べては、それかれと、優劣いかにぞや、と言へば、左大將、

(夕) さ、それをこそ取り出し申さむと思ひ候ひつれど、不明らぬ心のまゝに、さやうの批評申さむも、餘り老成がましく候へば、差扣へて候ふ、上代の世は、聞き合せ候はねば、え知り候はず、この頃は、柏木右衛門、督の和琴、螢兵部卿、宮の御琵琶などをこそ、珍らかなる例に引き出で候ふめれ、實に二人の和琴、琵琶は、今の世には、傍に雙ふものなきを、今夜承りたる御方々の音樂の音どもの、皆二人に等しく耳驚き候ふは、尙かく故意ともあらぬ御樂遊と、前以て思ひ撓みける心の、俄に聽き騒ぐにや候ふらむ、餘りの絶妙さに、唱歌

などいと奉仕りにくゝぞ候ひける、和琴は彼の致仕、大臣ばかりこそ、かく折につけて自由に調べ合せ靡かしたる音など、心に任せて掻き立て給へるは、いと特別にもものし給へ、和琴は、かく専離れて、一廉彈き出ること、難く候ふめるを、紫、上の、いと賢く調へてこそ彈き給ひつれ、

と、感賞申し給ふ、

(源) 紫上の和琴は、いとさやうに仰山しき分際にはあらぬを、故意と端正しくも取成さるゝかな、とて、爲たり顔に、含笑み給ひけり、何れも怪しうはあらぬ弟子どもなりかし、

(又) 明石上の琵琶は、我が容喙るべきこと交らぬを、然はいへど物の氣容、尙特別なるべし、彼の琵琶は、實は明石にて聽

天地を靡かし云々○樂

き始めたりしに、珍らしき物の聲かなとぞ覺えしがど、その折よりは、今はまた此上なく勝りにたるをや、と、凡て我が教へし如く、強ひて我賢に託ち成し給へば、明石上の女房などは、少し膝衝きじろふ、

(又) 萬の事、道々につけて、習ひ學ば、技藝といふもの、何れも分際なく覺えつ、我心に飽くべき限りなく、何處までも奥儀を習ひ取らむことは、いと難けれど、それも何かは、その研究深き人の、今の世に專なければ、片端をなりとも、平穩に學び得たらむ人、その一藝に心を遣りてもありぬべきを、それさへなきぞ口惜しき、琴ぞ尙面倒しく手觸れにくきものにはありける、この琴は、眞に故實のまゝに、學び得たる昔の人は、天地を靡かし、鬼神の心を和らげ、萬の音樂の中に

書に琴動天地之感鬼神とあり
此國に彈き傳ふる云々
○此所凡て宇津保物語を引いてかたり宇津保の俊隆遣唐使となりて波斯國に渡り琴を研究してその妙を得帝の前に彈きて盡碎け六月に雪降るなと鬼神を感ぜしめたり
また文選嘯賦にも聴羽則嚴霜夏凋云々とあり

従ひて、悲み深きものも、喜びに替り、賤しく貧きものも、貴き世に改まりて、寶に預り、世に許さるゝ類、多かりけり、此國に彈き傳ふる、始つ方まで、深くこの琴を心得たる人は、多くの年を、知らぬ國に過ぐし、身を無きものに成して、このことを學び取らむと、惑ひてさへも、爲得るは難くぞありけるを、實にまた明かに、空の月星を動かし、時ならぬ霜雪を降らせ、雲雷を騒がしたる例、上代たる世にはありけり、琴はかく限りなきものにて、そのまゝに習ひ取る人の有り難く、世の末なればにやあらむ、上古の片端にも、及ぶものあらず、されど琴は、猶彼の鬼神の、耳留め傾聽きそめけるものなればにや、生々に學びて、思ひ叶はぬ類ありける後、これを彈く人、善からずとかいふ難を附けて、むつかしきまゝに、今

鬼神の耳留
め云々○永
願聽琴の句
に莫下把悲
絲寫離怨上
夜深藤外鬼
神愁とあり

○若菜下

は專傳ふる人なしとか、いと口惜しき事にこそあれ、琴の音を離れては、何事をか音楽を調へ知る案内とはせむ、實に萬の事、衰ふる様は、易く成り行く世の中に、琴を學ぶ爲に、獨國を出で離れて、心を立て、唐土高麗と、此世に惑ひ歩き、親子を離れむことは、世間に辟めるものになりぬべし、何どか尋常にて、猶この道を通はし知るほどの、端をば知り置かざらむ、調一つに手を弾き盡さむことさへ、量りも無きものなるなり、況むや、多くの調、煩はしき曲、多かるを、我の心に入れて、琴を學ぶ盛りには、世にありとあらゆる、此國に傳はりたる、譜といふもの、限りを、普く見合せて、後々は師とすべき人もなくてぞ、自ら好み習ひしがど、尙上代の人には、當るべくもあらじをや、況して弟子といひては、相

傳ふべき末もなく、いと哀とぞ覺ゆる、

など言へば、左大將、實に我身、その御子として、相傳も叶はで、いと口惜しく耻かしと思す、院は明石、女御の御腹なる、吾御外孫の御子達を指して、

(又) この御子達の御中に、思ふやうに生ひ出でものし給はゞ、やがてその世にぞ、それも此身それまで長らへ留るやうあらば、幾何ならぬ秘手の限りも留め傳へ奉るべき、一宮後式部、今より氣色ありて見え給ふを、いと頼もしくぞ思ふ、

など言ふに、外祖母明石、上は、いと面起しく、涙催みて聞き居給へり、明石、女御は、箏の御琴をば、紫、上に譲り申して、脇息に倚り伏し給ひぬれば、紫、上は、やがて和琴を院の御前に進りて、少し氣近く亂れたる御樂遊になりぬ、かくて葛城をば遊び

葛城○催馬
樂の曲にて

○若菜下

葛城の寺の前なるや豊浦の寺の西なるや榎の井に白玉まづくやをしとくしはかくしては國を榮えんや家こそ富みせんやをしとくし

五個の調○搔手、片垂、水字瓶、蒼海波、雁鳴調をいふ

給ふ、花やかに愉快し、院は折り返し謠ひ給ふ御聲、たとへむ方なく、愛敬づき愛甚し、月漸々差上るまゝに、花の色香持離れて、實にいと奥ゆかしき程なり、箏の琴は、女御の爪音は、いと可愛げに懐かしく、母君明石上の御氣容加はりて、由の音深く、いみじく澄みて聞えつるを、紫上の御手遣は、また様變りて緩らかに面白く、聽人一通ならず、すゝろはしきまで愛敬づき、臨の手など、凡て更に才ある御琴の音なり、呂より律になる反り聲に、皆調變りて、律の搔き合せども、懐かしく當今めきたるに、女三宮の琴は、五個の調數多の手の中に、心留めて必弾き給ふべき、五六のはちを、いと面白く澄まして弾き給ふ、更に片帆ならずいと能く澄みて聞ゆ、春秋、萬のものに通へる調にて、通はし渡しつゝ、弾き給ふ、宮のかく骨折り教へ申し給

ふ様違へずに、いと能く辨へ弾き給へるを、院はいと慈愛しく、面起しく思ひ申し給ふ、かの二人の孫君達の、いと美しく吹き立て、切に心入れたるを、院は可愛がり給ひて、
(源) 睡たくなりたらむに、今夜の樂遊は、長くはあらず、纔なる間、ふと思ひつるを、止め難き音樂の聲どもの、何れとも優劣なきを、聞き分く程の耳敏からぬ、不案内さに、甚く更闌にけり、心なき業なりや、
とて、笙の笛吹く君三郎に、蓋差し給ひて、御衣脱ぎて纏頭け給ふ、横笛吹く君太郎には、紫上より、織物の細長に、袴など仰山しからぬ様に、氣色ばかり纏頭け給ひ、左大將には、女三宮の御方より、盃差出で、宮の御装束一領、纏頭け奉り給ふを、院は戯れて、

(源) 奇怪しや、この音楽師をこそ、まづはものめかし給は

め、憂はしきことなり、
と言ふに、女三宮のおはします御几帳の傍より、御笛を奉る、院
は打笑ひ給ひて、取り給ふに、いみじき高麗笛なり、少し吹き
鳴らし給へば、人々皆立ち出て給ふ間に、左大將立止まり給ひ
て、吾が御子太郎君の持ち給へる横笛を取りて、いみじく面白
く吹き立て給へるが、いと愛甚く聞ゆれば、院は御心に何れも
く、皆我が御手を離れぬ音楽の傳々、いと似るものなくばか
りあるにてぞ、我が御才藝の程、世にも有り難く思し知られけ
る、さて左大將は、三郎、太郎の君達を、御車に乗せて、月の
澄めるに退出で給ふ途すがら、紫上の弾き給ひし箏の琴の、普
通に變りて、いみじかりつる音も、耳につきて戀ひしく覺え給

ふ、吾北方雲井雁は、祖母の故大宮の、教へ申し給ひしがど、雲
井雁は、心にも染め給はざりし間に、大宮に別れ奉り給ひにし
かば、緩らかに弾き取り給はで、夫君の御前にては、耻ぢて更
に弾き給はず、さて雲井雁は、何事も唯大様に、打大どきたる
様して、子供扱ひを、次々に暇なくしたまへば、面白き所もな
く覺ゆ、さはいへ、さすがに腹悪しくて嫉妬をもし、愛敬づき
て、美しき人様にぞ、ものし給ふめる、

六條院は、紫上の御方に渡り給ひぬ、さて紫上は、其夜は女三
宮の御方に止り給ひて、宮に御物語など申し給ひて、曉にぞ我
方へ歸り給へる、院は日高くなるまで御寝れり、さて紫上に、
(源) 女三宮の御琴の音は、いとうるはしくなりにけりな、其
方はいかゞ聽き給ひし、

と申し給へば、紫、上は、

(紫) 初の頃、彼方にて微聽きし折は、いかにぞやありしを、今はいと此上なくなりけり、君の他事なく教へ申し給はぬには、いかでかくは上手になり給はざらむ、

と、應答へ申し給ふ、

(源) 然、手を執るく、覺束なからぬ音樂師なり、誰にもく、面倒く煩はしくて、暇入る業なれば、教へ奉らぬを、朱雀院にも、主上にも、女三宮に、琴は然りとも習はし申すらむ、と宣ふと聞くが、いと氣の毒に、かく御父院の、取別きて御後見にと、我に預け給へる報効には、せめて琴ほどの事をなりとも、教へ奉らむと、思ひ起してぞ、かく教へ申したる、など、申し給ふ序にも、

(又) 其方の、昔また幼少ぬ程を、我が扱ひ思ひし様、當時には暇もありがたくて、心閑に、取別き教へ申すことなどもなく、近世にも、何となく、次々紛れつゝ過ぐして、別段に教へも申さぬ、和琴、また箏の音の、出榮したりしも、面目ありて、左大將の、甚く傾聴き驚きたりし氣色も、思ふやうに嬉しくこそありしか、

など申し給ふ、紫、上は、かやうの音樂の筋も、今はまた大人大人しく、若宮達の御扱ひなど、取持ちて爲給ふ様も、周到らぬことなく、凡て何事につけても、待遠しく、不安心しきことは交らず、世に二人と有り難き御有様なれば、いとかく何事も具足せる人は、世に久しからぬ例もあるなるを、と、院は、御心中に、忌々しきまで思ひ申し給ふ、様々なる人の有様を見集め

紫上當厄
歳

故僧都○北
山の僧都に
て紫上の叔
父なり若紫
帖に出つ

給ふまゝに、紫上の、萬事取集め、足らひたることは、誠に比類あらじとばかり、思ひ申し給へり、さて紫上は、今年は廿七歳にぞなり給ふ、院は見始め奉りし年月の事なども、愛憐に思し出てたる序に、

(源) 今年は、重厄に當り給へれば、然るべき御祈禱など、平生よりは取別きて謹慎み給へ、此頃は物騒がしくばかりありて、思ひ到らぬこともあらむと、尙思し廻らして、大なる佛事ども爲給はゞ、おのづから爲させてむ、故僧都の、此世にものし給はずなりにたるこそ、いと口惜しけれ、何事につけ、打頼まむにも、いと賢かりし人をよ、
など言ひ出づ、

(又) 自分は幼少より、人に異なる様にて、内裡に仰山しく生

ひ出で、今世の勢望有様、來し方に比ぶれば、類なくぞありける、されどまた、世に勝れて悲き目を見る方も、人には勝りけり、先は桐壺帝、母更衣、葵上など、思ふ人に様々後れ、残り留まれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、味氣なく、然あるまじきことにつけても、怪しく物思はしく、心に飽かず覺ゆること添ひたる身にて過ぎぬれば、それに替へてや、思ひし程よりは、今まで存命ふるならむと、ぞ思ひ知らるゝ、君の御身には、彼の須磨の別の一節より前後、物思ひとては、心亂り給ふ程のことはあらじ、とぞ思ふ、皇后といひ、況してそれより次々は、尊き人といへども、皆必安からぬ物思ひ添ふ業なり、貴き交際につけても、心亂れ、人に争ふ思ひの絶えぬも安げなきを、親の、窓の内ながら、世を

過ぐし給へるやうなる、心安きことはなし、その方は、他人に勝れたりける其方の宿世とは思し知るよ、思ひの外に、この女三宮の、かく渡りものし給へるこそは、生困しかるべけれど、それにつけては、我もいと、其方に志を加へ奉れど、その程度を、御自分の上なれば、定めて思し知らずやあらむ、されど其方は、物の心も深く知り給ふめれば、さりともと思すらむとぞ思ふ、

と申し給へば、紫、上は、

(紫) 言ふやうに、物果敢なき身には、過ぎにたる餘所の見る目の勢籠はあらめど、内實は、心に堪へぬ物歎かしさはかり、打添ふよ、さればその物歎を讓はむ爲の、自分の祈禱にや、とて、殘の詞、多げなる氣容、耻しげなり、

(又) 眞實には、いと行先少き心地するを、今年もかく知らず顔にて過ぐすは、いと不安心くこそあれ、先々も申し、こと、いかで御許可あらば、心閑に世を遁れ候はむ、と申し給ふ、院は、

(源) それは決してあるまじきことにぞある、さて其方の懸離れ給ひなむ世に、我獨り残りては、何のかひかあらむ、唯かく何となくて、過ぐる年月なれど、朝夕の隔離なき嬉しさばかりこそ、これに増す嬉しさはなく覺ゆれ、尙我思ふ様、特別なる心の程を、見果し給へ、

とばかり申し給ふを、紫、上は、また例のことと、心疾しくて、涙催み給へる氣色を、院はいと哀と見奉り給ひて、萬事に申し紛らはし給ふ、

(又) 多くはあらねど、人の有様の、一人々々に口惜しくはあらぬを、見知り行くまゝに、眞の心ばせの、大様に沈着たるこそ、いと難き業なりけれ、とぞ思ひ果てける、左大將の母葵上をば、我は幼少かりし程に見始めて、尊く然らぬ筋には思ひしを、常に交情善からず、隔ある心地して遠別にしこそ、今思へば、いと氣の毒に、後悔しくもあれ、またそれも、我が過失ばかりにもあらざりけり、など、心一つにぞ思ひ出る、全體葵上は、端正しく慎重にて、そのことの飽かぬかな、と覺ゆることもなかりき、唯いと餘り亂れたるところなく、剛直しく、一家の主婦として、少し賢しとやいふべかりけむ、と思ふには、頼もしく、夫婦の交情として、懐かしく見るには、面倒しかりし人様にぞありける、中宮好秋の母君六條御息所

ぞ、様特別に、心深く、艶めかしき例には、まづ思ひ出でらるれど、面會にく、心取り苦しかりし様にぞありし、妬恨むべき節ぞ、實に道理と覺ゆる節を、やがて長く思ひ詰めて、深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか、心緩びなく耻しくて、我も人も打撓み、朝夕の睦び交さんには、いと慎ましきところのありしかば、打解けては、彼方に見劣さるゝことやあらむ、など、餘り修ひし間に、やがて隔たりし交情となりしぞかし、然るを、いと有るまじき浮名立ちて、彼の身の薄倖しくなりぬる歎息を、いみじく思ひ染め給ひしが、いと氣の毒に、實に人柄を思ひ遣れば、我が罪ある心地して遠離にし慰めに、かの御女、秋好中宮をば、元より然るべき御宿契ありとはいひながら、かく故意と取り立て奉りて、世の誹謗、人

の怨恨をも知らず、心寄せ奉るを、後世ながらも、御息所の見直されぬらむ、今も昔もよしなき事の、心の遊慰に、氣の毒に、後悔しきことも、多くぞありし、

と過去の人の御上を、少しづつ、言ひ出で、
(又) 桐壺、女御の御後見は、何程の事ならずと、輕侮り始めて、心安きものに思ひしを、尙心の底見え、際限なく深きところある人にぞおはしける、表面は人に靡き、大様に見えながら、打解けぬ氣色、下に籠りて、そこはかたなく耻しきところこそあれ、

と言へば、紫、上は、

(紫) 葵、上や、六條、御息所の上などは、見ねば知らぬを、桐壺、女御は、正面ならねど、自然氣色見る折々もあるに、いと打

解けにくく、心耻かしき有様著きを、いと我が譬へむやうもなき淺き心を、女御の、いかに見給ふらむと、慎ましけれど、女御は、自然我が心の程を知りて、思し許すらむとばかり思ひてぞ、

と言ふ、院は御心に、紫、上は、女御の母明石、上をば、あれ程嫉妬みて、心外と心置き給へりしに、今はかく許して見え交しなど爲給ふも、女御を思ふ御爲の眞心なる、餘りぞかしと思すに、いと有り難ければ、

(源) 其方こそ、さすがに心深く、隠れたる隈なきにはあらぬものながら、人に依り事に従ひ、いと能く二筋に心遣ひはし給ひけれ、幾多の人を見るに、更に其方の御有様に似たる人はなかりけり、唯物怨じ給ふばかりこそ、少しものし給へ、

六條院詣
女三宮

寄る方○河
海抄に寄る

と、含笑みて申し給ふ、さて院は、女三宮に、女樂に、いと能く琴を弾き取り給へりしことの喜び申さむとて、夕方より、宮の御方へ渡り給ひぬ、宮は、我に心置く人やあらむとも思はず、いと甚く若びて、偏に御琴に心入れておはす、院は、(源)今は暇許して、打休ませ給へ、音樂師には、安心せてこそ能く候はめ、いと苦しかりつる、日頃の御稽古の効能ありて、後安くなり給ひにけり、

とて、御琴押遣りて、御寝り給ひぬ、紫、上には、院のおはしまさぬ夜は、例の夜居し給ひて、女房達に、物語など讀ませて、聞き給ふ、さて御心の中に世の比喩に言ひ集めたる、昔語どもにも、仇なる男、色好み二心ある人に關係ひたる女、かやうなることを言ひ集めたるにも、終に寄る方ありてこそあるめれ、我

方もありこ
いふなるあ
りそ海のた
つ白波の同
じ所にとあ
り

紫上俄病
胸

御身も云々
○河海抄小
野小町の歌
に人知れぬ
我思ふ人に
逢はぬ夜は
身さへぬる
みて思ほゆ
るかなとあ
り

身の怪しく浮きても過ぐしつる有様かな、實に院の言ひつるやうに、他人より特別なる宿世もありける身ながら、人の忍び難く、飽かぬことにする、嫉妬離れぬ身にて終なむとすらむ、味氣なくもあることかな、と、思ひ續けて、夜更けて、御寝りぬる、曉方より、俄に御胸惱み給ふ、女房達、見奉り扱ひて、院の方に御消息申させむと申すを、紫、上は、いと便なきこと、制し給ひて、胸痛の堪へ難きを押へて、夜を明かし給ひつ、御身も微熱みて、御心地もいと悪しけれど、院も頓に渡り給はぬ間、かくぞとも申さず、桐壺、女御の御方より、御消息あるに、紫、上の御方よりは、かく病惱しくてぞ、と申し給へるに、驚きて、やがて女御の御方より、院へ申し給へるに、院は胸潰れて、急ぎ渡り給へるに、紫、上は、いと苦しげにておはす、

(源) いかなる御心地ぞし給ふ、
 とて、御胸を探り奉り給へば、いと熱くおはすれば、昨日申し
 給ひし厄年の、御謹慎の筋など思し合せ給ひて、いと恐怖しく
 思さる、かくて院は、御粥など参らせたれど、紫、上は、御覽じ
 も入れず、院は終日添ひおはして、萬事に見奉り歎き給ふ、は
 かなき御菓物を召すさへ、いと懶くし給ひて、起き上り給ふこ
 とも絶えて、日頃経ぬ、こはいかならむと思し騒ぎて、御祈禱
 ども數知らず始めさせ給ふ、僧召して、御加持など爲させ給ふ、
 かくて紫、上は、そのこともなく、いみじく苦しく爲給ひて、胸は
 時々差起りつゝ、煩ひ給ふ様、堪へ難く苦しげなり、様々の御
 謹慎、限りなけれど、効驗も見えず、重病と見ゆれど、自然平
 癒る區別あらば、頼もしきを、然もあらざれば、いみじく心細

く、悲しと見奉り給ふに、他事など思されねば、女三宮の爲給
 ふべき、御賀の評判も鎮まりぬ、朱雀院法皇も、紫、上の、かく
 煩ひ給ふ由聞召して、御訪問、いと懇切に、度々申し給ふ、さ
 て、紫、上の御病惱は、同様にて、二月も過ぎぬ、院はいふ限り
 なく思し歎きて、試に所を更へ給はむとて、やがて六條院より、
 二條院に渡し奉り給ひつ、かゝれば六條院の内にては、揺り満
 ちて、思ひ歎く人々多かり、冷泉院上皇も、聞召し歎き給ふ、
 此人失せ給はゞ、院も必世を背く御本意遂げ給ひてむと、夕
 霧、左大將なども、心盡して見奉り扱ひたまふ、御修法など、大
 方の御修法は勿論それとして、取別きて奉仕らせ給ふ、紫、上は、
 少しく物思し別く隙には、出家の御暇なきは、いと心憂く、と
 ばかり恨み申し給へど、院は、命數の限ありて、別れ果て給は

むよりも、目の前に、紫、上の、我心と窶して、身を捨て給はむ御有様を見ては、更に片時も堪ふまじくばかり、惜しく悲しかるべければ、院は自分ぞ却てかゝる本意深きを、紫、上の跡に残りて、物寂しく思されむ氣の毒さに、引かれつゝ過ぐすを、いかで紫、上の、逆様に打棄て給はむとは思す、とはかり惜しみ申し給ふに、紫、上は、ますく重り行きて、實にいと頼み難げに弱りつゝ、限りの様に見え給ふ折々多かるを、院はいか様にせむと思し惑ひつゝ、女二宮の御方にも、寸間にも渡り給はず、御琴どもも不用じくて、皆引き籠められ、院の内の人々は、皆有る限り、二條院に集ひ参りて、この六條院には、火を消したるやうにて、唯女同志ばかり居て、これまでの六條院は、全く紫上一人の御有様なりけりと見ゆ、桐壺女御も、二條院へ渡り給

六條院桐壺
女御看三護
紫上病一

平生の御身
云々○當時
女御懷妊
中なり

ひて、院と諸共に、紫、上の御病氣を看奉り扱ひ給ふ、紫、上は苦しき御心地にも、女御に、

(紫) 平生の御身にもおはしまさぬに、物怪など、いと恐ろしければ、早く中宮へ還りましね、

と申し給ふ、若宮女一宮の、いと美しくておはしますを、紫、上は見奉り給ひても、いみじく泣き給ひて、

(又) 成長び給はむを、え見奉らずなりなむこと、口惜しく、成長び給ひても、吾世に亡くなりたらば、忘れ給ひなむかし、

と言へば、女御は、御涙もせきあへず、悲しと思したり、院は、(源) 忌々しく、かくな思しそ、さりととも御病氣、怪しうはものし給はじ、人は凡て心持によりてぞ、ともかくもある、掟

廣き器量は、幸福もそれに従ひ、局量狭き人は、宿因ありて、

一日貴き身となりても、豊に寛べたる方は後れ、心の急なる人は、久しく常ならず、心緩く平穩なる人は、命長き例ぞ多かりける、

など慰め言ひて、神佛にも、紫上の御心ばせの、有り難く、罪業輕き様を申し明らめさせ給ふ、御修法の阿闍梨達、夜居などにも、近く伺候ふ限りの尊き僧などは、いとかく思し惑へる院の御氣容を聞くに、いとみじく御氣の毒なれば、心を奮ひ起して、祈禱り申す、御病症は快しき様に見え給ふ時、五六日打交せつゝ、また重り煩ひ給ふこと、何時となくて、月日を經給へば、尙この後、いかにおはすきにかあらむ、かくて快かるまじき御心地にやあらむ、と、院は思し歎く、さて御物怪などいひて、出で來るものもなく惱み給ふ様、これぞとも見えず、

柏木參議右衛門督任中納言

柏木中納言 娶落葉宮

慰め難き云々○古今集に我心慰め兼ねつ更科

唯日に添へて弱り給ふ様にばかり見ゆれば、いとみじく思すに、院は御心の暇もなげなり、

まことや參議兼右衛門督柏木は、中納言になりなき、中納言は、今上帝東宮におはしまし、折より、いと親しく思されて、いと時に遇へる人なり、身の勢望勝るにつけても、女三宮の事、心に叶はぬ憂はしさを思ひ詫びて、この宮の御妹の、二宮落葉宮をぞ得奉りてける、落葉宮は、下藤の更衣腹におはしましければ、心安き方交りて、思ひ申し給へり、人品も普通の人に思ひ比べれば、氣容此上なくおはして、中納言は、女三宮を思ふ心も慰むべきを、元より思ひ染みにし女三宮の方こそ、却てますく思ひ勝りけれ、慰め難き姨捨にて、人目に咎めらるまじき程に、女三宮をば待遇し申し給へり、さて中納言柏木は、尙彼の女三宮

や姨捨山に
照る月を見
てとあり落
葉宮は女三
宮の姉君な
れどこいは
姨に當て、
かくいひた
るなり

柏木中納言
謀小侍従
密逢女三
宮

の、下の心忘られず、小侍従といふ相談人は、女三宮の御乳母、侍従乳母の女なりけり、さてその侍従乳母の姉ぞ、やがてこの中納言の御乳母なりければ、早くより女三宮の事を、氣近く聞き奉りて、また女三宮の幼少くおはしまし、時より、いと清らにぞおはしまして、朱雀院の傳き奉り給ふ様など、聞き置き奉りて、かゝる戀しき思も着き始めたるなりけり、かくて院源は、紫上の御看護に、二條院におはします間、六條院の人目少く、蕭條ならむを推測りて、中納言は、かの小侍従を迎へ取りつゝ、女三宮への執成方を、いみじく談合ふ、

(柏) 昔より、かく命も堪ふまじく思ふことを、彼の宮には、乳母の關係より、かゝる親しき縁ありて、御有様を聞き傳へ、我が堪へぬ心の程をも、彼方に聞召させて、頼もしきに、更に

効能のなければ、いみじくぞ辛き、朱雀院の上さへ、六條院に預け給ひしを、六條院の、數多の方々に關係ひて、宮の、他人に壓倒れたまふやうにて、一人御寝る夜なく、多く、徒然にて過ぐしたまふなり、など、人の奏しける序にも、少し悔ひ思したる御氣色にて、同じくは平人の、心安き後見を撰定めむには、眞實に奉仕るべき人をこそ、撰定むべかりけれ、と宣はせて、女二宮の却て後安く、行末長き様にて、ものし給ふなることよ、と宣はせけるを、我傳へ聞きしに、いと御氣の毒にも、口惜しくも、いかばかりか思ひ亂るゝ、實に女三宮と、女二宮とは、御姉妹とは尋ね聞きしがど、それはそれ、これこれと、各別に覺えて、二宮の忘れ難くこそ覺ゆれ、と打うめき給へば、小侍従は、

(小) いであな、負ふけなや、一宮をば、それと差置き奉り給ひて、三宮をとほ、またいかやうに限なき御心ならむ、といへば、中納言は打含笑みて、

(相) 物は凡てさやうにこそありけれ、二宮に我が畏多くも申させ及びけるさまは、朱雀院にも、今上帝にも、聞召しけり、そは何どてかは、さても其方は、二宮に侍はざらまし、とぞ、事の序に、院の上は、宣はせける、いてや、唯今少し、院の上の、御啓察あらましかば、我に賜はることを得べきを、など言ふに、小侍従、

(小) いと難き御事なりや、御宿縁とかいふこと候ふなるを根本にて、彼の六條院の、言に出して、懇に請ひ申し給ふに、彼の院に立ち雙び、妨害げ申させ給ふべき、其方の御身の勢力

御衣の色○
當時は位階
官等により
て袍の色制
あり中納言
は三位相當
にて袍色淺
紫なり

とや覺されじ、此頃こそ、中納言にもなり給ひて、少し物々しく、御衣の色も深くなり給へれど、

といふ詞の、いふかひなく迅速なる口強さに、中納言は、我が言ふことも、え言ひ果て給はで、

(相) 今は、よし、過去にし方をば申さじよ、唯かく二度と有り難き、六條院の、主人の居給はぬ隙に、氣近き間にて、我がこの心の中に思ふ言の端、少し女二宮へ申させ給ふべく謀り給へ、よし見給へ、今は負ふけなく、彼宮に想ひ懸くる心は、いと恐しければ、凡て思ひ離れて候ふ、と言へば、小侍従、

(小) これより負ふけなき心は、いかゞはあらむ、いと氣味悪しく、恐しきことをも、思し寄りけることかな、かくては何

しに彼方へ参りつらむ、

と撥ばらひす、中納言は、

(相) いてあな聞きにくく、其方は餘り言甚く物をこそ言ひ成し給ふべけれ、世はいと定めなきものを、女御皇后も、あるやうありて、人に逢ひ給ふ類なくやはある、況して女三宮の御有様よ、思へば朱雀院の皇女といひ、六條院の正室といひ、いと比類なく愛甚けれど、内々は、紫、上に壓倒れて、心疾ましき事も多かるらむ、院の上の、數多の皇女の御中に、また雙びなく、大切に習慣し申し給ひしに、六條院へおはしては、明石上などのやうなる、等しからぬ分際の御方々に立交り、心外しげなることもありぬべくこそあれ、我いとよく聞き候ひしよ、世の中は、いと無常きものを、一際に思ひ定めて、さ

やうに不都合く、突切りたることな言ひそよ、

と言へば、小侍従、

(小) 彼の宮は、たとへ他人に貶され給へる御有様とて、いかて愛甚き方に改め靡き給ふべきことや候はむ、彼の宮の六條院に参り給ひしは、尋常の御夫婦の御有様にも候はざるめり、これは唯御後見なくて、漂蕩はしくおはしまさむよりは、六條院を親様にと頼み奉りて、朱雀院の譲り申し給ひしかば、六條院も、女三宮も、互にさこそと思ひ交し申させ給ひたるめれ、あいなき君の御威嚇め言にぞある、
とて、果々は、腹立つを、中納言は、萬事に言ひ作へて、
(相) 實は、それ程世に比類なき六條院の御有様を、見奉り馴れ給へる、女三宮の御心に、數にもあらぬ我が怪しき窶れ姿

を、打解けて御覽せられむとは、更に思ひ懸けぬことなり、唯一言、物越にて申し知らす程のことは、何程の御身の窶にかはあらむ、たとへば神佛にも、思ふこと申すは、罪科ある業かは、

と、女三宮には、直接には言ひ寄らじ、といみじき誓言をしつづ言へば、小侍従は、暫時こそいとあるまじきことに言ひ返しけれ、物深からぬ若人は、他人のかく身に替へて、いみじく思ひ言ふをば、え否び果てずして、

(小) さては、もし然りぬべき隙あらば、謀り候はむ、院のおはしまさぬ夜は、御帳の周圍に、女房多く伺候ひて、御座所の邊には、然るべき御乳母達など、必侍ひ給へば、いかなる折にかは、隙を見付け候ふべからむ、

小侍従導
柏木右衛門
督

と詫びつゝ、女三宮の御方へ参りぬ、是より、中納言よりは、いかにくと、日にくと責められ、小侍従は困じ果て、漸く然るべき折窺ひつけて、小侍従よりは、中納言の方へ、案内の消息寄越たり、中納言は喜びながら、いみじく窶れ忍びて、六條院へおはしぬ、さて我心にも、いと怪しからぬことなれば、氣近く、却て思ひ亂るゝことも勝るべきことまでは、思ひもよらず、唯いと微に、御衣の端ばかりを見奉りし、春の夕の、飽かず世と共に、いつまでも思ひ出でられ給ふ御有様を、少し氣近くて見奉り、心に思ふことを申し知らせては、一章の御返事などもや見せ賜はり、さて愛憐とや思し知る、とぞ思ひける、四月十餘日頃の事なり、御禊、明日とて、齋院に奉り給ふ女房十二人、別に上臈にはあらぬ若人女童など、各自物縫ひ假粧な

柏木中納言
密會女三宮
圖

中納言

おきて

ゆく空

もしら

れぬ明

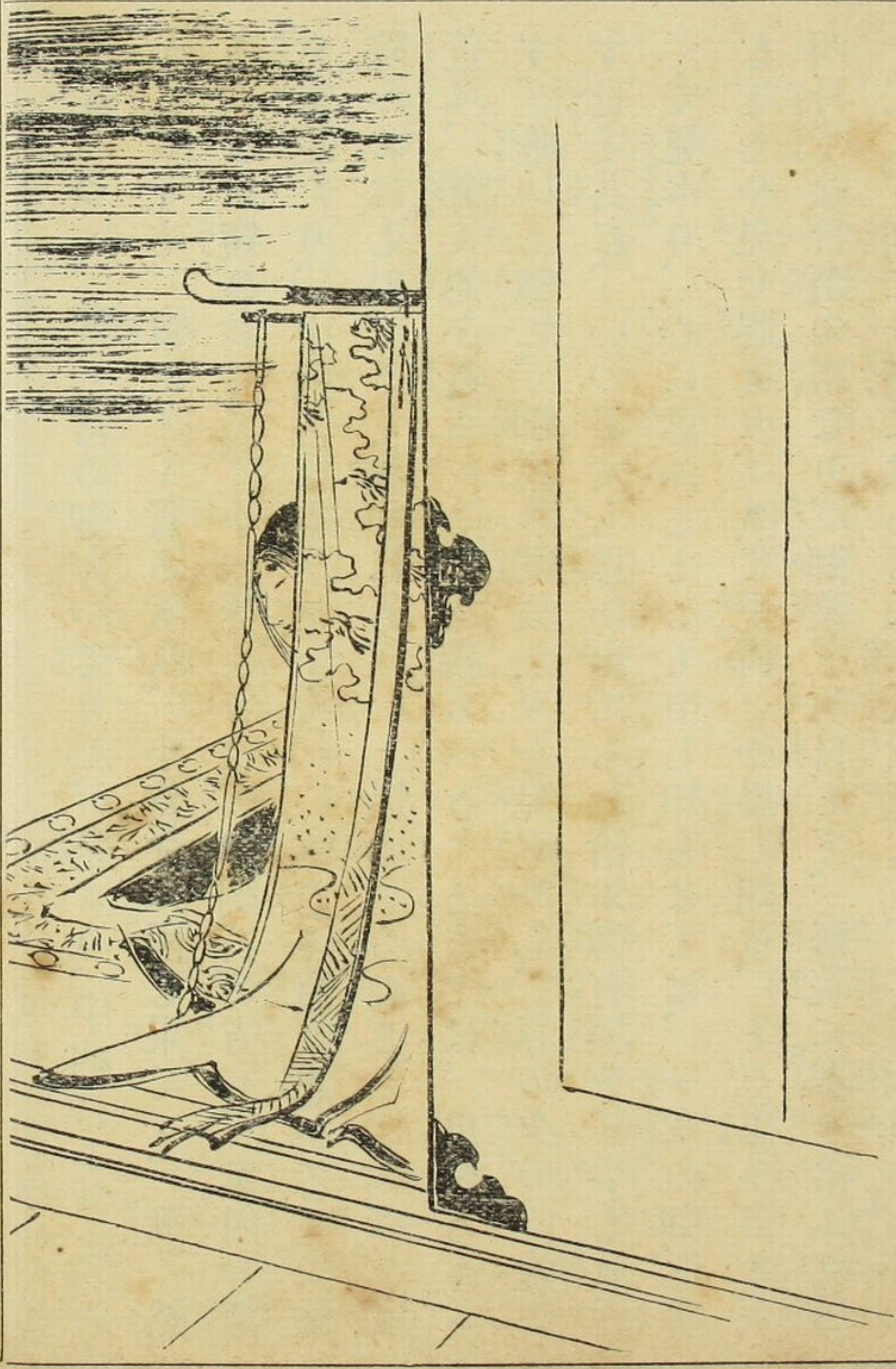
ぐれに

いつく

の露の

かいる

袖なり



女三宮

あけぐ

れの空

にうき

身は消

ないむ

夢なり

けりな

見ても

止べく



どしつゝ、物見むと思ひ儲くるも、一人々々に暇なげにて、女
 三宮の御前の方、寂寥に、人繁からぬ折なりけり、近く侍ふ女
 房、按察使君も、時々その許に通ふ源中將ぞ、責めて呼び出さ
 せければ、其方へ下り行きたる間に、女三宮には、唯この小侍
 従ばかり、近く侍ふなりけり、小侍従は、善き折と思ひて、や
 をら中納言をば導きて、宮の御帳の東面の御座所に居ゑつ、そ
 れ程までもあるべきことかは、小侍従の周旋、いといみじ、女
 三宮は、何心もなく御寝りにけるを、近く男の氣容すれば、宮
 は六條院のおはすると思したるに、中納言は打畏りたる氣色見
 せて、床の下に抱き下し奉るに、宮は物に驚はるゝかと、せめ
 て見上げ給へれば、院にはあらぬ人なりけり、怪しくも宮の知
 らぬことゝもを、中納言申すに、宮は淺ましく、氣味悪くなり

て、侍女召せど、近くも侍はねば、聞きつけ參るものなし、宮
 の戦慄き給ふ様、汗も水のやうに流れて、物も覺え給はぬ氣色
 いと愛憐に、可愛げなり、中納言は、

(柏) 我數ならねど、いとかくも思召さるべき身とは思ひ給へ
 られずそ候ふ、負ふけなくも、想ひ懸け奉りし心の候ひしを、
 一向に籠めて止み候ひなましかば、心の内に腐朽して過ぎぬ
 べかりけるを、却て漏らし申させて、御父の院にも、聞召さ
 れにしを、院はあるまじきこととも、此上なく持て離れ仰せ
 られざりけるに、頼を懸け始め候ふて、身の數ならぬ分際だけ、
 それだけ他人より深き志を、空しく爲し候ひぬることゝ、動
 かし候ひにし心ぞ、萬事今はかひなきことゝ、思ひ返せど、いか
 ばかり深く染み候ひけるにかあらむ、年月に添へて、口惜し

くも無情くも、氣味悪くも哀にも、色々に深く思ひ勝るに、心を制へ兼ねて、かく負ふけなき様を、御覽せられぬるも、且はいと想ひ遣りなく、耻しければ、罪重き心も、更に候ふまじ、

と言ひもて行くに、女三宮は、始めて彼の人なりけりと思すに、いと心外しく、恐怖しくて、露ほども應答し給はず、中納言は、(又)然思さるゝも、いと道理なれど、世に先例なきことにも候はぬを、珍かに情なき御心ばえならば、いと心憂くて、却てあるまじき無法なる心もこそ着き候へ、愛憐とさへ言はせば、それを承りて、やがて退出でなむ、

と萬事に申し給ふ、中納言は、心の中に、餘所の想像は愛くしく物馴れて、見え奉らむも、耻かしく推量られ給ふに、唯これ

柏木密會
女三宮

程思ひ詰めたる片端を、申し知らせて、却て懸想々々しきことはなくて止みなむ、と、思ひしがど、近寄り奉りて見れば、いとそれ程氣高く耻しげにはあらで、懐しく可愛げに、柔々とばかり見え給ふ御氣容の、貴にいみじく覺ゆることぞ、他人に似させ給はざりける、中納言は、賢しく思ひ鎮むる心も失せて、彼の昔男が、二條后を具し奉りしやうに、何地へなりとも、連れ出し隠し奉りて、我身も世に經る様ならず、跡絶えて止みなばや、とまで思ひ亂れぬ、かくて、唯いさゝか睡む、としもなき夢に、彼の手馴らし、猫の、いと可愛げに打鳴きて來たるを、中納言は、女三宮に奉らむとて、我が連れて來ると覺えしを、實に何の爲に奉りつらむ、と、後悔しく思ふ間に、夢は驚き覺めて、いかに見えつるならむと思ふ、女三宮は、いと淺ましく、現と

彼の手馴らし、
○細流抄に
し、猫云々
夢、獸懷胎
之相とあり

も覺え給はぬに、胸塞りて、思し茫然るゝを、中納言は、
 (柏) 二人が交情は、尙かく遁れぬ御宿因の、淺からざりける
 と思し成せ、自分の心ながら、現心にはあらずぞ覺え候ふ、
 とて、彼の去年の春、蹴鞠の折に、覺えなかりし御簾の端を、猫
 の綱引きたりし夕のことも、申し出てたり、女三宮は、實にも
 またさやうにありけむよ、と思し出で、口惜しく思したり、限
 りなき御身として、貞節を損ひ給ふこと、これも御宿因とはい
 ひながら、心憂き御身なりけり、さて宮は、御心の中に、院に
 も今は、いかでかは見え奉らむ、と思して、悲しく心細くて、い
 と情なげに泣き給ふを、中納言はいと畏多く愛憐と見奉りて、人
 の御涙をまで拭ふ袖は、いと露けさのみ勝る、夜も明け行く景
 色なるに、中納言は出でむ方なく、却て心亂る、

(柏) いかゞ爲候ふべき、いみじく憎ませ給へば、また二度申
 させむことも有り難きを、唯一言御聲を聞かせ給へ、
 と、萬に申し惱ますも、女三宮は、煩く詫しくて、物の更に言
 はれ給はねば、中納言は、
 (又) 終々は、氣味悪くこそなり候ひぬれ、またかゝる様はあ
 らじ、
 といと憂しと思ひ申して、
 (又) かくまで申しても、終に御一言のなければ、我身は不用
 なるめり、さりとして今更、この身を徒に爲し果てむやは、い
 と捨て難きによりてこそ、かくまでもこの身を繋いで候へ、さ
 るを、かく無情く候へば、一命も今夜限りに候ひなむも、い
 みじく哀しくぞ候ふ、少許にても御心許容し給ふ様ならば、一

命をばそれに替へつるにても、捨て候ひなまし、

とて、中納言は、宮を搔き抱き出るに、宮は、終は如何に爲つ
るぞ、と、呆れて思さる、中納言は角の間の屏風を引き擴げて、戸
を押開けたれば、渡殿の南の戸の、昨夜入りしが、また開放な
がらあるに、また曉更の時分なるべし、中納言は、女三宮の御
姿を、微かに見奉らむの心あれば、格子をやをら引き上げて、

(栢) かくいと無情き御心に、吾が現心も失せ候ひぬ、少し吾
が強情なる心を、思ひ緩めよと思さるれば、愛憐となりとも
言はせよ、

と威嚇し申すを、女三宮は、いと珍奇なりと思して、物も言は
むとし給へど、戰慄かれて、いと若々しき御様なり、夜は唯明
けに明け行くに、中納言は、いと心惚忙しくて、

(栢) あはれなる夢語も申さすべきを、かく憎ませ給へばこそ、
え申さね、然りとも、この夢の事、今に思し合することも候
ひなむ、

とて、中納言は、長閑ならず立ち出る曉天、夏の初なれど、秋
の空よりも心盡しなり、

(栢歌) おきて行く、空も知られぬ、明ぐれに、いつくの露の、
かゝる袖なり、

と、その袖引き出で、愁へ申せば、女三宮は、中納言の、今
は立ち出でなむとするに、少し心慰め給ひて、

(三歌) あけぐれの、空に憂き身は、消えなむ、夢なりけり
と、見てもやむべく、

と、はかなげに言ふ、御聲の若く美しげなるを、中納言は、夜

おきて行く
云々○我心
ともなく起
き行く明け
方の袖にか
いる涙はい
つくより置
く露ぞとな
り
あけぐれの
云々○かく
憂きを夢と
も見てやむ
べきにより

この明け方に我身は夢ととも消えよかしとなり魂は云々○河海抄にあかざりし袖の中に入りにけん我が魂のなき心地するとあり

○若菜下

も明くれば、聞きもあへぬやうにて、出でぬる魂は、眞に身を離れて、こゝに留まりぬる心地す、かくて中納言は北方落葉宮の御許にも、詣で給はで、父君の御方、大殿へぞ、忍びておはしぬる、打臥したれど、更に目も合はず、見つる夢の、判然に合はむことも難きをさへ思ふに、彼の夢の中にありし猫の様いと戀しと思ひ出でたる、さてもいみじき過失しつる身かな、世にあらむことこそ、目眩くなりぬれ、と、空恐しく、耻しき心地して、外出なども爲給はず、女三宮の御爲は、更にも言はず、我が心地にも、特にいと有るまじきこと、いふ中にも、氣味悪く覺ゆれば、隨意にも、え紛れ歩かず、さて心の中に、たとへば帝王の御后妃をも、竊取あやまちて、事の聞あらむに、我ながら、かくあるまじく覺えむこと故には、身の徒にならむことも

覺悟の上なれば、苦しくは覺ゆまじ、此度の事、さやうの掲焉き罪には當らずとも、かの六條院に側目られ奉らむことは、いと恐しく、耻しく覺ゆ、さて限りなく尊き女と申せど、少し好色たる心ばえ雜り、表面は由緒あり、大様しきにも叶はぬ裏面の心の、輕姚き心添ひたる人こそ、右あること左ることに、打靡き心交し給ふ類もありけれ、この女三宮は、然る色めかしく、深き心おはせねど、一向に物怖し給へる、若々しき御心に、人の知らぬ先より、はや唯今にも、人の見聞きつけたらむやうに、目眩く耻しく思さるれば、女三宮は、明き所にさへ、え膝行り出で給はず、いと口惜しき身なりけり、と、宮は、我と思ひ知り給ふべし、かくて宮には、何か惱ましげにぞ物し給へる、と、人の六條院に告げ參らせければ、院聞召して、紫上の御病惱に、

○若菜下

六條院訪女
三宮

いみじく御心を盡し給ふ御事に打添へて、また女三宮の御惱とは、いかにと驚かせ給ひて、一二條院より、急ぎ此方へ渡り給へり、さて女三宮は、何處と苦しげなることも見え給はず、いといたく耻らひ沈濕りて、判明にも御顔見合せ奉り給はぬを、院は久しくなりぬる絶間を、恨めしく思すにやあらむ、と、いと氣の毒に思して、彼の紫、上の御病惱の容體など、申し給ひて、

(源) 今は紫、上も、最後の終結にもこそあれ、されば今更に疎略なる様を見え置かれじとぞ、かく彼方にのみ参り居り候ふ、彼の紫、上は、幼稚かりし程より扱ひ始めて、見放ち難ければ、其方に對ては、かく月頃、萬事を知らぬやうに疎略に過ぎし候ふぞ、自然この間の病事ども過ぎなば、また見直し給ひてむ、

など申し給ふ、女三宮は、此度の密事を、院のかく氣色ほども知り給はぬも、いと御氣の毒に、心苦しう思されて、宮は人知れず、涙催ましく思さる、中納言は、況してなかくなる心地のみ勝りて、起臥明かし暮らし詫び給ふ、葵祭の日などは、物見に争ひ行く君達、打連れて中納言を言ひ誘引せど、更に應へず、惱ましげに持成して、詠め臥し給へり、北方宮をば、一歩ゆづりて、畏まり置きたる様に、待遇し申して、専打解けても見え奉り給はず、我方に離れ居て、いと徒然に、心細く詠め給へるに、童の持たる葵を見て、

(柏歌) 悔しくぞ、つみをかしたる、葵草、神のゆるせる、挿頭ならぬに、
と思ふも、いと却てぞ心苦しき、さて葵祭に、世間静ならぬ車

悔しくぞ云々
三宮を冒か
したること
を後悔せる
にて摘に罪

なかけたり

の音などを、中納言は餘所の事に聞きて、人遣ならぬ徒然に、暮らし難くぞ覺ゆる、北方女二宮落葉宮も、夫君中納言の、かゝる氣色の不用じさも、見知られ給へば、何事とは知り給はねど、耻しく心外しきに、物思はしくぞ思されける、北方の女房など、物見に皆出で、人寡に長閑なれば、北方は打詠めて、箏の琴、懐しく弾き爪探りておはする氣容も、さすがに貴に艶かしけれど、中納言は、心の中に、同じくは今一段、尙女二宮に及ばざりける宿世よ、と覺ゆ、

(柏歌) 一蔓、落葉をなに、拾ひけむ、名は睦ましき、挿頭なれども、

と書きすさび居たる、姉宮女二宮に對ては、いと無禮なる後言なりかし、六條院は、女二宮の方へ、久々にて渡り給ひたれば、得

二蔓云々○
女二宮と女
三宮とは同
し姉妹なれ
ど何とて姉
宮の方を娶
りけむとい
ふ意なり

紫上絶息

ふとも二條院へ立ち還へり給はず、紫上の御病惱も、靜心なく思さるゝに、紫上、俄に絶え入り給ひぬとて、人御報告に参りたれば、院は更に何事も思し分かれず、御心も昏れて、急ぎ二條院へ渡り給ふ、途中の程、待遠きに、實に彼の二條院は、近邊の大路まで人立ち騒ぎたり、さて院の内、泣き騒ぐ氣容、いと禍々し、院は、我にもあらで入り給へれば、女房達、

(女房) 日頃は、少しく御病の隙、見え給へるを、俄にかくぞおはします、

とて、伺候ふ限りは、我もく、後れ奉らじ、と、惑ふ様ども、限りなし、これまでの御修法の壇、毀ち、僧なども、護持僧、夜居僧などの、然るべき限りこそ退出でね、その他の僧どもは、ほろく、と騒ぎ退出づるを見給ふに、院は、さらば限りにこそは

その日數○
大般若經に
定業亦能轉
心報盡者能
延六月住と
あり

六條院愁傷

ありけめ、と、思し果つる淺ましきに、何事かはこれに比ふこと
あらむ、然りとも、物怪の爲る業にこそあらめ、いと一向にな
騒きそ、と、鎮め給ひて、いよくいみじき願どもを、立て添へ
させ給ふ、世に勝れたる驗者どもの、有らむ限りを召し集めて、
(驗者) 限りある御命にて、現世盡き給ひぬとも、只今暫時御
命緩め給へ、不動尊の御本願あり、その日數をなりとも、懸
け留め奉り給へ、
と頭より、眞に護摩の黒烟を立て、非常じき心を起して、加
持し奉る、院も唯今一度目を見合せ給へ、いと敢なく、限りな
りつらむ間をなりとも、得見ずなりにけることの、悔しく悲し
きを、と、思し惑へる様、院の紫、上に後れて、跡に留まり給ふべ
きにもあらぬを、見奉る心地ども、唯推量るべし、院の御愁傷

紫上蘇生

の深切なる、いみじき御心の中を、佛も見奉り給ふにやあらむ、
月頃更に顯れ出て來ぬ物怪、小童に移りて、呼ひ騒ぐ間に、紫
上は、漸く蘇生て給ふにも、院は嬉しくも、忌々しくも思し騒
がる、物怪は、驗者どもに、いみじく調伏せられて、
(小童) 他人は皆去りね、院一所の御耳に申さむ、己を月頃調
じ詫びさせ給ふが、情なく辛ければ、同じくは臺の御上を、
取り殺し奉りて、君にも思し知らせむと思ひつれど、さすが
に君の命も、堪ふまじく、身を碎きて思し惑ふを見奉れば、今
こそかく惡靈じき身を受けたれ、古の執心の残りてこそ、そ
れに引かれて、かくまでも參り來たるなれば、實は御氣の毒
さを、え見過ぐさで、心弱くも、終にかく顯はれぬることよ、更
に知られじと思ひつるものを、

六條御息所
怨靈

とて、小童は、髪を振り分けて哭く氣容、唯曩時見給ひし、彼の葵、上の時の、物怪の様と同様と見えたり、當時より、淺ましく氣味悪し、と、思し染みにしことの、變はらぬも、忌々しければ、院はこの小童の手を執へて、引き居るて、様悪しくも爲させ給はで、

(源) 其方は、眞に其人か、はた善からぬ狐などいふもの、誑れたるか、亡き人の不面目なること、言ひ出るもあるなるを、正確なる名告をせよ、また他人の知らざらむことの、我が心に著く思ひ出てられぬべからむことあらば、言へ、あかしてぞ、いさゝかにても信ずべき、
と言へば、小童は、ほろ／＼と甚く哭きて、

(童歌) 我身こそ、あらぬ様なれ、それながら、空老なる、君

我身こそ云々
○我身

そ生を變へ
たれ君は元
のまの君
なれば昔の
こと能く知
り給ふべき
に何とて空
とぼけし給
ふぞとなり

は君なり、いと無情、々々、
と哭き叫ぶものながら、さすがに物耻したる氣容、昔の様に變らず、院はいと疎ましく、心憂ければ、却て物言はせじと思す、
(小童) 我が女、秋好、中宮の御事につけても、實はいと嬉しく、辱なしとぞ、天翔りても見奉れど、生死途異になりぬれば、子の上までも、深く覺えぬにやあらむ、尙自身無情と思ひ申しし心の執ぞ、留まるものなりける、その中にも、生前の世に、君の、吾をば他人より貶して、思し捨てしよりも、紫、上との、思ふ同志の御物語の序に、吾には、不快らず憎かりし有様を、言ひ出たりしぞ、いと恨めしく、今は吾も、唯亡後に思し免して、他人の言ひ貶めむをなりとも、省き隠し給へところそ思へど、打思ひしばかりに、かく悪靈じき身の氣容となりぬ

れば、かく殊の外に、所狭きなり、この紫上を、深く憎しと思ひ申すことはなけれど、君の御身の、佛神の加護強く、いと御邊遠き心地して、え近づき参らず、御聲をだに微かにぞ聞き候ふ、よし今はこの罪業輕むばかりの業を爲させ給へ、修法讀經と騒ぐことも、吾身には、苦惱しく詫びしき火炎とばかり纏綿れて、更に解脱きことも聞えねば、いと悲しくぞ候ふ、中宮にも、此由を傳へ申し給へ、努々御宮仕の間に、他人と轢争ひ、嫉妬む心使ひ給ふな、齋宮におはせし折は、言ふも愚、佛經を手に觸れ給はざれば、その頃の御罪業、輕むべからむ功德のことを、必爲させ給へ、吾身も生前を回顧れば、いと後悔しきことにぞありける、
 など言ひ續くれど、院は物怪に對ひて、物語し給はむも、傍痛

何を櫻に○古今集に待てといふに散らでしとまるものならば何を櫻

ければ、これを符じ籠めて、紫上をば、また別所に忍びて渡し奉り給ふ、紫上には、かく薨せ給ひにけりといふこと、世間に聞え満ちて、御吊問申し給ふ人々あるを、院はいと忌々しく思す、今日の葵祭の還列見に出て給ひける公卿など、歸途に、紫上の訃音を、人の申せば、

(公卿) いと非常じきことにもあるかな、生けるかひありつる幸福人の、光失ふ日にて、雨はそぼ降るなりけり、と率爾言し給ふ人もあり、または、

(又) かく萬事に満足ひぬる人は、生命必え長からぬものなり、何を櫻にといふ古言もあるは、かゝる幸福人の、いと世に長らへて、世の歡樂を盡さば、傍の人困苦からむ、今こそ二品宮女三は、元の御勢望顯はれ給はめ、いと御氣の毒げに、壓

に思ひまさ
ましとあり

柏木中納言
等用二一條
院

何か浮世に
○河海抄に
散ればこそ
いと櫻は
めでたけれ
浮世に何か
久しかるべ
きとあり

倒れたりつる御勢力を、

など、打私語きけり、中納言柏木右は、門衛督は、物思に、昨日いと暮らし
難かりしを思ひて、今日は御弟の左大辨、頭宰相どもを、物見
車の奥の方に乗せて、葵祭の還列見給ひけり、紫上の頓滅のこ
とども、かく言ひ合へるを聞くにも、胸打潰れて、

(栢) 何か浮世に、久しかるべき、

と打誦し獨言ちて、二條院へ皆参り給ふ、中納言は、紫上の御
不幸も、途上にて聞きたることにて、また正確ならぬことなれ
ば、忌々しくやあらむとて、唯大方の御吊問に参り給へるに、か
く人々の泣き騒げば、眞實なりけり、と心打騒ぎ給へり、紫上の
父宮、式部卿宮も渡り給ひて、いと甚く思し耄れたる様にてぞ
入り給ふ、人々の御消息も、え申し傳へ給はず、左大將霧夕の涙

を拭ひて、立出で給へるに、中納言は、

(栢) いかにく、忌々しき様に人の申しつれば、信じ難きこ
とにてぞ、唯久しき御病惱を承り歎きて、参りつる、
など言ふ、左大將は、

(夕) いと重症くなりて、月日経給へるを、この曉より絶え入
り給へりつるを、物怪の所爲にぞありける、漸々蘇生て給ふ
やうに聞き成し候ふて、今ぞ皆人心鎮むれど、またいと頼も
しげなしや、心苦しきことにこそあれ、

と眞に甚く泣き給へる氣色にて、目も少し腫れたり、中納言は、
女三宮などに關係ふ、我が怪しき心習慣にやあらむ、この大將
の、いとさやうにも親しからぬ繼母の御事を、甚くも心染め給
へることかな、と、大將の、紫上に心懸けしにやあらむ、と、目を

注ぐ、かく此人彼君、御訪問に参り給へる由、院は聞召して、
 (源) 重き病者の、俄に終焉つる様なりつるを、女房などは、心
 もえ收めず、亂りがはしく騒ぎ候ひけるに、自分もえ緩めず、
 心狼狽しき間にてぞ、失禮申し候ふ、何れ後刻に、更めてぞ、
 かくものし給へる返禮は申すべき、
 と言へり、中納言は、胸潰れて、かゝる折の已を得ざることな
 らずば、え参るまじく、氣容耻しく思ふも、心の中ぞ、腹穢か
 りける、紫、上は、かく蘇生て給ひての後も、院は恐しく思して、
 またく重ねて、いみじき祈禱の法ども盡して、加へ行はせ給
 ふ、さて彼の六條御息所は、現人にてさへ、氣味悪かりし人の
 御氣容の、況して生變りて、悪靈しき物の様に成り給へらむを
 想像るに、いと心憂ければ、やがてその御子なる、中宮好秋を扱

ひ申し給ふさへぞ、此際は物憂く、言ひもて行けば、女の身は、
 御息所ばかりに限らず、皆同じ罪業深き基ぞかし、と、凡て世の
 中、厭はしく、彼のまた他人も聞かざりし、紫、上との御間の、睦
 物語に、少し語り出で給へりし事を、物怪の言ひ出でたりしに、
 誠にさやうの事ありし、と、思し出るに、さほどの事さへ、怨靈
 の耳留めけるよ、と、いと煩はしく思さる、紫、上は御髪下してむ、
 と、切に思したれば、院は受戒の力にて、命もや長らへむとて、紫、
 上の御頂、あるしほど鉢みて、五戒ばかり受けさせ奉り給ふ、御
 戒師、受戒の勝れたる由、佛に告げ申すにも、哀に尊きこと交
 りて、院は人様悪くも、紫、上の御傍に添ひ居給ひて、涙押拭ひ
 給ひつゝ、佛をば二人諸心に念じ申し給ふ様、世に賢くおはす
 る人も、いとかく御心惑ふ事に當りては、え鎮め給はぬ業なり

不斷の御讀
經○大般若
最勝王法華
の三經をい
ふ

けり、さて院は、如何なる業をして、この紫上の命を救ひ、懸
け留め奉らむとばかり、晝夜思し歎くに、茫然しきまで、御顔
も少し面瘦せ給ひにたり、五月などは、況して晴々しからぬ空
の氣色に、紫上の御氣分も、え爽ぎ給はねど、前よりは少し快
しき様なり、されど尙絶えず苦惱み渡り給ふ、院は怨靈の、罪
障救ふべき業、毎日に法華經一部づゝ供養せさせ給ひて、何く
れと尊き業せさせ給ふ、紫上の御枕上近くて、不斷の御讀經、聲
尊き僧の限して讀ませ給ふ、物怪顯はれ始めては、折々悲しげ
なる事どもを言へど、更にこの物怪去り果てず、紫上は、いと
ど發熱き間は、息も絶えつゝ、いよく弱り給へば、院は言は
む方なく思し歎きたり、紫上は、亡きやうなる御心地にも、か
かる院の御氣色を、御氣の毒に見奉り給ひて、この世に亡くな

女三宮懷妊

りなむも、吾身には更に口惜しきこと残るまじけれど、院のか
く思し惑ふめるに、吾が空しく亡き人と見成され奉らむが、い
と思ひ遣りなかるべければ、と、自思ひ起して、御湯など、少許
飲し給ふ故にやあらむ、六月になりてぞ、時々御頭擡げ給ひけ
る、院は珍しく見奉り給ふにも、尙いと忌々しくて、六條院に
は、寸時にもえ渡り給はず、
六條院なる女三宮は、中納言に密會たまひしことを、思し歎き
しより、やがて御懷妊の氣味にて、例の様にもおはせず、惱ま
しく爲給へど、仰山しくはあらず、五月より物食めさで、御顔
色も、甚く青み損はれ給ふ、中納言は、是非なく思ひ餘る時々
は、またも密に通ひ奉りて、夢のやうに見奉りけれど、宮は、盡
せず是非なきことに思したり、さて女三宮は、院をいみじく畏

ち申し給へる御心に、院と中納言との有様も、人の程度も、思ひ比べられて、等しくさへもあらず、中納言は、甚く由緒めき艶めきたれど、大方の人目にこそ、普通の人には勝りて愛らるれ、宮は幼少くより、然る比類なき、院の御有様に、見馴れ給へる御心には、中納言をば、心外しくばかり見給ふ間に、かく懐妊み渡り給ふは、哀なる御宿因にぞありける、乳母達、見奉り咎めて、院の渡り給ふことも、いと邂逅なるを、いかにかくは成り給へる、と、吐き憾み奉る、院は女三宮の、かく惱み給ふと聞召して、六條院へ渡り給はむとす、紫上は、發熱く苦難しとて、御頭冷して、少し爽かに持て成し給へり、さて臥しながら、御髪を打遣り給へりしかば、頓にも乾かねど、少ばかり打膨み迷ふ毛筋もなくて、いと清らに、ゆ

らくとして、御顔は青み衰へ給へるも、色は小蒼に、白く美しげに、透きたるやうに見ゆる御肌つきなど、世になく可愛げなり、身脱けたる蟬の、殻などのやうに、またいと漂々はしげにおはす、年頃住み給はで、少し荒れたりつる二條の院の内、人多く入り込みて、譬へむ方なく狭げにさへ見ゆ、紫上、昨日今日、かく物覚え給ふ間隙にて、心特別に修治はれたる遣水、前栽の、率爾に心地快げなるを見出し給ひても、一旦は、はや消え入りし身の、あはれに今まで經にけるを思ほす、池はいと涼しげにて、蓮の花の咲き渡れるに、葉はいと青やかにて、露きらくと、玉のやうに見え渡るを、院は紫上に、
 (源) 彼見給へ、蓮ひとりは、涼しげなるかな、吾等は、其方の病氣に、氣も涼しからぬものを、

と言ふに、紫上は、起き上りて、見出し給へるも、いと珍しければ、

(又) かくて見奉るこそ、夢の心地すれ、其方の危殆かりしに、

いみじく吾身さへ、限りと覺ゆる折々の、ありしはよ、

と涙を浮けて言へば、紫上は、自分も哀と思して、

(紫歌) 消え留まる、程やは経べき、たまさかに、蓮の露の、か

かるばかりを、

と言ふ、院は、

(源歌) 契り置かむ、此世ならでも、蓮葉に、玉ある露の、心

へだつな、

と返し言ひぬ、

院は、紫上の病中を差置きて、女三宮の御方へ参るは、物憂け

消え留る云々○蓮の露よりもはかなき我命ぞとなり

契り置かむ云々○一蓮他生の契約を忘るゝなり

六條院詣女三宮

れど、主上にも、朱雀院にも、聞召さむ所あり、女三宮の惱み給ふと聞きて、程経ぬるを、紫上の、目に近き危篤に、心を惑はしつる間、女三宮を見奉ることも、専なかりつるに、かゝる雲間にさへや、見え奉らむと、思し起ちて、六條院へ渡り給ひぬ、宮は心の鬼に、見奉らむも耻しく、慎ましく思すに、院は物など申し給ふに、宮は、御應答も申し給はねば、院は、宮は日頃問絶の積りを、さすがに然りげなくて、無情と思しける、と、氣の毒なれば、とかく色々と作へ慰め申し給ふ、また大人びたる御乳母、上臈など召して、宮の御心地の様など、問ひ給ふ、御乳母どもは、

(乳) 例の様ならぬ、御心地にぞ候ふ、

とて、煩ひ給ふ御有様の、御懷妊の様なる由、申す、院は怪し

く、
 (源) 間經て、珍しき御事にもあるかな、
 とばかり言ひて、御心の中には、年頃經ぬる、紫、上や、明石、上、
 花散里の方々さへ、然る懷妊の事なきを、乳母どもの、不定な
 る御事ども申すにやあらむ、と、思せば、別段に、ともかくも言
 ひ會釋ひ給はで、唯打惱み給へる様の、いと可愛げなるを、可
 憐と見奉り給ふ、さて院は、辛うじて思し起ちて、此方へ渡り
 給ひしかば、ふともえ還り給はで、二三日おはす間、紫、上の病
 事の、いかにく、と、不安心く思さるれば、二條院へは、御文
 をのみ書き盡し給ふ、宮方の女房達は、
 (女) 院には、此方にましく、てより、また兩三日なるに、紫、
 上には、何時の間に積る御言の葉にかあらむ、いでや吾々は、

柏木中納言
 消息女三
 宮

安からぬ世をも見るものかな、
 と、吾が主人の宮の、御過失を知らねば、言ふ、彼の小侍従ぞ、
 かゝるにつけても、胸打騒ぎける、中納言も、院の女三宮の御
 方へ、かく渡り給へりと聞くに、負ふけなく、心誤りして、い
 みじき事ども書き續けて、宮の御方へ寄越せ給へり、宮は對屋
 に、暫時渡り給へる間に、人の隙間なりければ、小侍従は、忍
 びて、中納言の御文見せ奉る、宮は、
 (三) 面倒しきもの見するこそ、いと心憂けれ、心地のいと、
 悪しきに、
 とて、打臥し給へれば、小侍従は、
 (小) 尙唯この端書の、いと御氣の毒げに候ふぞや、
 とて、擴げたれば、人の參るに、いと困しくて、御几帳引き寄

せて、小侍従は、そのまゝ去りぬ、宮はいと胸潰るゝに、院入り給へば、宮は、彼の文をえ能くも隠し給はで、御褥の下に差挟み給ひつ、院は夕方、二條院へ渡り給はむとて、宮へ御暇申し給ふ、

(源) 此方には、御惱も怪しうはあらず見え給ふを、紫、上の、またいと漂々はしげなりしを、見捨てたるやうに思はるゝも、今更に氣の毒にてぞ、参り候ふ、此方の事につけて、辟々しく申し成す人ありとも、ゆめ心配し給ふな、今見直し給ひてむ、

と語らひ給ふ、宮は、例は、生幼稚き戲言なども、打解け申し給ふを、甚く沈濕りて、判然にも御顔見合せ奉り給はぬを、院は、唯尋常の恨めしき御氣色、と、心得給ふ、さて院は、晝の御座所

に打臥し給ひて、御物語など申し給ふ間に、日は暮にけり、少し御寝り入りにけるに、蜩の花やかに鳴くに、御目覺め給ひて、然らば道たとくしからぬ間に、とて、御衣など着直し給ふ、宮は、

(三) 月待ちて、ともいふなるものを、

と、いと若やかなる様して、言ふは、憎からずかし、その間にもや、吾を見むと思す、と、院は氣の毒げに思して、立ち止まり給ふ、宮は、

(三歌) 夕露に、袖濡らせとや、蜩の、鳴くをきくく、おきて行くらむ、

と、半成なる御心に任せて、言ひ出で給へるも可愛く、これも見捨て難ければ、院は跪い居て、

道たとくし
○詞花集
に夕ぐれは
道たとくし
月待ちて
かへれ吾せ
こそそのまに
も見むとあ
り

夕露に云々
○蜩の鳴く
は日の暮る
る證據なる
をそれを聞
き捨て、歸
り給ふは情
なしとなり

(源) あな困しや、
と打長息き給ふ、

(源歌) まつさとも、いかゞ聞くらむ、方々に、心騒がす、ひぐらしの聲、

など、思し休らひて、尙情なからむも氣の毒なれば、やがて留り給ひぬ、かくて院は、紫上の御事を思ふに、靜心なく、さすがに彼方を詠められ給ひて、御菓物ばかり食召しなどして、御寝りぬ、また朝涼の間に、二條院へは渡り給はむとて、早く起き給ふ、昨夜の扇を落して、この檜扇は、風温くこそありけれとて、この御扇を置き給ひて、昨日假寝し給へりし、御座所の邊を、立ち止まりて見給ふに、御褥の少し迷ひたる端より、淺緑の薄葉なる文の、押卷きたる端見ゆるを、何心もなく、引き

まつさとも
云々○二條
院にも待た
るべきをい
かせせばよ
けむと決心
のつかぬ意
なり

六條院發
見柏木中納
言艶書

出で、御覽するに、男の書なり、紙の香など、いと艶に、故意めきたる書き様なり、二重に、細々と書きたるを見給ふに、紛るべき方なく、柏木中納言の手跡なりけりと見給ひつ、御鏡など開けて、參らする女房は、尙院の平生に見給ふべき御文にこそはあれ、と思ひて、心も知らぬに、小侍従見付けて、昨日中納言より、請取りし文の色と見るに、いとみじく、胸どきどきと鳴る心地す、院は御粥など食召す方に、小侍従は目も見遣らず、心の中に、いで然りとも、彼の文にはあるまじ、彼の大事の文を、いとみじく、院の見給ふやうに、よもや宮には爲給ふことはありなむや、必隠し給ひてけむ、と思ひ成す、さて女三宮は、何心もなく、また御寝れり、院は御心の中に、あな幼稚な、かゝる文を散らし給ひて、我ならぬ他人にても、見付

けたらましかば、如何ならむと思すも、心劣して、さればよ、此宮の、いと無下に奥ゆかしき所なき御有様を、不安心しとは見るかし、と思す、かくて院は、此院を出て、二條院へ渡り給ひぬれば、宮の御前、女房など、少し退散れぬるに、小侍従寄りて、

(小) 昨日の文は、いかに爲させ給ひてし、今朝院の御覽じつる文の色こそ、能く似て候ひつれ、

と申せば、宮は淺ましと思して、涙のほろくと、唯出て來に、出て來れば、小侍従は、御氣の毒ながら、言ふかひなの御様よ、と見奉る、

(小) 何處にかは置かせ給ひてし、人々の参りしに、自分は事有り貌に、近く侍らはじと、それほどの嫌疑をさへ避けて、心

の鬼に去り候ひしを、院の入來せ給ひし間は、少し程經候ひにしを、隠させ給ひつらむ、とぞ思ひ候ひし、

と申せば、宮は、

(三) 否とよ、彼の文見し間に、院は入り給ひしかば、ふともえ置きあへで、褥に差挟みしを、忘れにけり、

と言ふに、小侍従は、いと申さむ方なし、寄りて見れば、文は何處にかはあらむ、

(小) あないみじ、中納言殿も、いと甚く畏ぢ憚りて、少許にても、院に漏り聞かせ給ふことあらば、いと非常じき事にもなりぬべきを、と、畏まり申し給ひしものを、間もなく、はや彼の御目に觸れて、かゝる淺ましき事の、出で参て來るよ、凡て幼稚き御有様にて、蹴鞠の折にも、彼君に見えさせ給ひけ

女三宮悔恨

れば、彼君も、年來あれ程に忘れ難く、恨み言ひ渡り給ひしを、御心安く打解け給ひし故に、やがてかやうの事に成り候ひし、今は誰が御爲にも、御氣の毒にぞ候ふべき、と、遠慮もなく申す、宮は心安く若くおはすれば、小侍従は、かく馴れ申したるなるめり、さて宮は、返答も爲給はで、唯泣きにのみ泣き給ふ、いと惱ましげにて、少ほどの物も食召さねば、他の女房達は、

(女房) かく吾が主君の、惱ましく爲させ給ふを、院は見置き奉り給ひて、今は平癒り果て給ひにたる、紫上の御扱ひに、心を入れ給へることよ、

と辛く思ひ言ふ、院は、この文の、尙不審しく思さるれば、人見ぬ方にて、打返しつゝ、見給ふに、もしくは宮に侍ふ女房ども

六條院密見柏木艶書懊惱

の中に、彼の中納言の書に似たる手して、書きたるか、と、まで思し寄れど、詞使ひ、さらくとして、紛ふべくもあらぬ中納言の口癖どもあり、その文意、年を経て思ひ渡りけることの、邂逅に本意叶ひて、心安からぬ筋を、書き盡したる詞、いと見所ありて、可感なれど、一體艶書などいふものは、かく判然には書くべしやは、可惜人の文をこそ、思ひ遣りなく書きけれ、吾も曾て落ち散ることこそあれ、と、思ひしかば、昔かやうに詳細に書くべき折節にも、言省ぎつゝこそ、書き紛らはし、か、人の深き用意は、難き業なりけり、と、彼の中納言の心をさへ、見貶し給ひつゝ、さてまた院は、御心の中に、それにつけても、この女三宮をば、いかゞ待遇し申すべき、懷妊しき様の御心地も、かゝる密事の紛れにてなりけり、いであな心憂や、かく人傳な

らず、直接に憂き事を知るく、此迄の通りにて見奉らむことよ、と、我が心ながらも、え思ひ直すまじく覺ゆるを、たとへば等閑の遊戯と、最初より心を留めぬ妾などにてさへ、また他人に心分くらむと思ふは、氣に食はず思ひ隔てらるゝを、況してこの女三宮は、妾などは元より様格別なるに、それに中納言の通ひけるとは、負ふけなき心にもありけるかな、帝王の后妃をも過誤つ類、昔もありけれど、それはまた言ふ方異なり、宮仕といひて、我も人も、同じ君に馴れ奉仕る間に、自然然るべき方につけても、心を交し始め、物の紛れ多かりぬべき業なり、女御更衣といへど、右ある筋、左かる方につけて、正直ならぬ人もあり、また心はせ必しも重からぬものも、打交りて、案外なる事件もあれど、一通の判然なる過失見えぬ間は、それにて

も、宮中に交際ふやうもあらむに、ふとも顯露ならぬ物の紛ありぬべし、然るを女三宮は、本臺と定めて、これほど二となき様に待遇し申して、内々の志の引く、紫上の方よりも、慈愛しく辱きものに思ひ養育まむ我をば差置きて、他人に密通給ふことは、更に類あらじ、と、指弾させられ給ふ、帝王と申せど、唯尋常に公様の心はえばかり懸けられて、さまで寵愛もなく宮仕の間も、物不用じき女御更衣の中にも、志深き私の願事に靡き、各自哀情を盡し、見過ぐし難き折の返答を言ひ始め、自然に心通ひ始むらむ交情は、これも同じ怪しからぬ筋なれど、寄る方ありて、幾分か許免さるゝよ、然るを、女三宮は、我身ながらも、そればかりの人に心分け給ふべくは覺えぬを、と、いと氣に喰はねど、また氣色に出すべきことにもあらず、など、思し亂

戀の山路○
河海抄にい
かばかり戀
の山路の繁
げいれに入
ると入りぬ
る人迷ふら
むとあり

る、につけて、故桐壺院の上も、吾身薄雲、女院藤壺中宮に密會奉り
しこと、御心には知召してやあらむ、知らず貌を作らせ給ひけ
む、思へば當時のことこそは、いと恐しくあるまじき過失なり
けれ、と、近きこの中納言の例を思すにぞ、戀の山路は、え誹議
くまじき御心交りける、院は一條院にましく、この女三宮
の事、顔色に出さぬやうには爲たまへど、物思し亂る、様の著
ければ、紫上は、我身の消え残りたる氣の毒さに、此方へ渡り
給ひて、さて女三宮の方をば、人遣ならず氣の毒に思ひ遣り申
し給ふにやあらむ、と、思して、院に、
(紫) 心地は快しくなりて候ふを、彼の宮の惱ましげにおはす
らむに、早く還り渡り給ひにしこそ、いと御氣の毒なれ、
と申し給へば、院は、

(源) 然、彼の宮も、例ならず見え給ひしがど、格別なる心地
にもおはせねば、自然、心長閑に思ひてぞ、還り來にし、主
上よりは、度々御見舞の御使ありけり、今日も御使ありつと
か聞きし、朱雀院の、彼の宮の事を、大切く申し付け給へれ
ば、主上もかく思したるなるべし、少し疎略になどもあらむ
には、朱雀院、主上に、思さむことの御氣の毒ぞよ、
とて、呻吟き給へば、紫上は、
(紫) 主上の、疎略と聞召さむよりも、女三宮御自分恨めしと
思ひ申し給はむこそは、心苦しからめ、宮自分は思し咎めず
とも、快からぬ様に申し成す女房ども、必あらむと思へば、い
と困しくぞある、
など言へば、院は、

(源) 實に彼宮を、無理に大切に思ひ申す其方の爲には、實は、
 彼宮は面倒しき因縁なれど、其方は、然も思きで、それほど
 萬事に苦勞り奉りて、大凡の女房達などの、思はむ所まで、左
 や右くと思ひ廻さるゝは、實に心深きことかな、我は唯主上
 の、御心や置き給はむ、とばかりを遠慮らむは、淺き心地ぞ
 しける、

と含笑みて、言ひ紛らはす、

(又) 六條院へ還り渡らむことは、其方と諸共にしてや、心長
 閑にあらむ、

とばかり申し給ふを、紫上は、

(紫) 某は、暫時この院に、心安くて候はむ、君ばかり、まづ
 彼方へ渡り給ひて、宮の御心も慰みなむ間に、某は參り候は

むよ、

と申し交し給ふ程に、日頃經ぬ、

女三宮は、これまで、院の、かく渡り給はぬ日頃延引るも、君
 の御無情さにはかり思すを、今は我が御過怠打混ぜて、かく渡
 り給はぬやうになりぬるを思すに、もし朱雀院にも聞召しつけ
 ては、いかに思召さむ、と、世間慎ましくぞなりにける、彼の中
 納言も、いみじげにはかり言ひ渡れども、小侍従も、面倒しく
 思ひ歎きて、中納言木柏に、かゝることぞありし、とて、院の、彼
 の御文見給ひしことを、告げてければ、中納言は、いと淺まし
 く、何時の間、然ること出で來けむ、これまでさへも、かゝ
 る事は間經れば、自然氣色にても漏り出るやうもやあらむ、と
 思ひしさへ、いと、慎ましく、天に眼つきたるやうに覺えてし

柏木中納言
 聞密事露
 顯大畏

朝夕涼み○
河海抄に夏
の日も朝夕
涼みあるも
のをなど我
戀の隙なか
るらむとあ
り

○若菜下

を、況して彼の文の詞使ひ、あれほど我に違ふべくもあらざり
しことどもを、院の見給ひてけむ、耻しく辱く、傍痛きに、朝
夕涼みもなき頃なれども、身もそゞろ冷むる心地して、言はむ
方なく覺ゆ、年來眞實事にも、遊戯事にも、院は召し纏はし、我
は參り馴れつるものを、他人よりは巨細に思し留めたる御氣色
の、可感に懐しきを、今更淺ましく、負ふけなきものに、心置
かれ奉りては、いかでかは、院には目をも見合せ奉らむ、然り
とて、搔絶え微めき參らざらむも、却て人目怪しく、院の御心
にも思し合せむことの、いみじさよ、など、安からず思ふに、心
地もいと惱ましくて、内裡へも參らず、さして重き罪には當る
べきならねど、身の徒亡になりぬる心地すれば、最初よりこの
道理は知りながら、戀路の習慣、さればよと、且は我が心も、い

憂きに紛ぎ
れぬ○花鳥

○若菜下

とつらく覺ゆ、いでや彼の女三宮は、静やかに奥ゆかしき氣容
見え給はぬ邊ぞや、まづは彼の蹴鞠の時の、御簾の挾間、顯露
なりしも、女の用意としては、然るべきことかは、輕々しと、左
大將の思ひ給へる氣色見えき、など、今ぞ思ひ合はする、中納言
は、強ひてこの事を、思ひ覺まさむと思ふ方にて、無理に、女
三宮に難つけ奉らまほしきにあらむ、善きやうとても、餘り
一向に、大様に貴なる人は、世間の有様も知らず、且近侍ふ人
に心置き給ふこともなくて、宮などは、かくいと惜しき御身の
爲も、他人の爲も、いみじきことにもあるかな、と、彼の御懷妊
の御事の、御氣の毒さも、中納言はえ思ひ放たれ給はず、
院は、女三宮のいと可愛げにて、悩み渡り給ふ様の、猶いと氣
の毒に、かく思ひ放ち給ふにつけては、生憎に憂きに紛れぬ戀

餘情に大貳
三位の歌戀
しきの憂き
にまざる
ものならば
またふた
びと君を見
ましやとあ
り此は本書
よりは後の
歌なり

六條院比
較諸女

しさの苦しき思さるれば、此方へ渡り給ひて、見奉り給ふにつけても、胸痛く氣の毒に思さる、さてこの宮の御惱につけては、御祈禱など、様々に爲させ給ふ、大方の事は、是迄に變はらず、却て痛はしく、大切く待遇し申す様を増し給ふ、但し氣近く打語らひ申し給ふ様は、いと此上なく、御心隔りて、傍痛ければ、人目ばかりを見善く持成して、思しのみ亂るゝに、此宮の御心の中こそ、いかに苦しかりけれ、院は、彼の文見き、とも顯はし申し給はぬに、宮は自分いと是非なく思したる様も、心幼稚し、院は御心に、宮はかく心幼稚くおはする故に、かゝる事もあるぞかし、上臈は、大様なるが善しとは言ひながら、餘り覺束なく、後れたるは、頼もしげなき業なり、と思すに、世の中、凡て不安心く、明石女御桐壺女御の、餘り柔和に幼びれ給へるこそ、

中納言のやうに、かやうに心懸け申さむ人は、況して心亂れなむかし、女はかく晴けどころなく、裊和びたるを、人も心安く輕侮るからに、然るまじく負ふけなき女にも、ふと目留まり、女も心強からぬ過失は、爲出るなりけりと思す、鬚黒、右大臣の北方、玉葛君の、取立てたる後見もなく、幼稚くより、片田舎に零落ふやうにて、生ひ出で給ひけれど、才氣しく、功者にて、我も大方には、親めきしがど、その實は、懸想の心の添はぬにしもあらざりしを、彼女は、平穩につれなく待遇して過ぐし、彼の右大臣の、然る無心の女房に、心合せて入り來りけむにも、斷然に持て離れたる様を、人にも見え知られ、故意に許されたる有様に爲成して、我心と靡きたる罪ある様には、爲さずなりにし、など、今思へば、いかに才あることなりけり、右大臣と玉葛、

朧月夜尙侍
出家

君とは、宿契深き中なりければ、かくて長く夫婦の間を保たむ
 ことは、とてもかくても、何時までも同じ様にあらまほしきも
 のながら、玉葛君の、心より解けしことよ、とも、世の人も思ひ
 出せば、少し軽佻しき思ひ加はりなまし、さはいへ、彼女は、い
 と甚くその身を持って成してし業なり、と、院は思し出づ、
 二條ノ尙侍朧月夜君をば、院は尙絶えず思ひ出で申し給へど、かく女
 三宮の不安心き筋の事につけて、尙侍の事を憂きものに思し知
 りて、彼の尙侍の御心弱さも、少し軽く思ひ成され給ひけり、さ
 て尙侍は、遂に本意のごとく、出家し給ひてげり、と、聞き給ひ
 ては、いと哀に口惜しく、御心動きて、まづ訪問ひ申し給ふ、尙
 侍には出家の事を、今ぞとさへも案内し給はざりける無情さを、
 院は淺からず申し給ふ、

あまの世を
 云々○須磨
 にさすらへ
 しも君故な
 れば君の尼
 になるも餘
 所には聞か
 ずとて尼に
 蟻をかけた
 り

(源歌) あまの世を、よそに聞かめや、須磨の浦に、藻鹽垂れ
 しも、誰ならなくに、様々なる世の定めなきを、心に思ひ
 集めて、今まで出家を後れ申しぬる口惜しさを、思し捨てつ
 とも、然り難き御回向の中には、まづこそは我をも入れ給へ、
 いと哀にぞ候ふ、
 など多く申し給へり、尙侍は、出家は、朱雀院御山籠の折、既
 に思し立ちにしことなれど、この六條院の御妨げに關係ひて、
 他人にはさやうに顯はし給はぬことなれど、心の中、あはれに
 昔より辛き御宿契を、さすがに淺くも思し知られぬなど、方々
 に思し出らる、御返事、今は尼姿にて、かくも通ふまじき御文の
 終結と思せば、哀にて、心留めて書き給ふ、墨つきなど、いと
 面白し、

あま舟に云々○明石上などにかいづらひて我をば思し捨て給ひしなるべしとな

(臚文) 常なき世とは、我身一つにはかり知り候ひにしを、後れぬると言はせたるにぞ、實に、あま舟に、いかゞは思ひ、後れけむ、明石の浦に、漁りせし君、回向は、たとひ一切に普く及ぼすにも、君はいかゞは入れまつらむ、とあり、濃き青鈍の紙にて、櫛に挿し給へる、例のことなれど、甚く風流過ぐしたる筆遣ひ、尙經り難く、面白げなり、院は二條院におはします間にて、尙侍は出家して、今は無下に絶えぬる事なれば、紫、上に、この御返書を見せ奉り給ふ、

(源) 尙侍には、かくいと甚くこそ辱しめられたれ、實に氣に喰はぬことよ、かやうに追々人々背き去りて、様々に心細き世の中の有様を、能く見過ぐしつるやうなるよ、さて凡ての世の事にて、果敢なく物を言ひ交し、時々寄せて、哀情をも知

り、由緒をも過ぐさず、餘所ながらの睦び交しつべき人は、權齋院と、この朧月夜、尙侍とこそは存り在りつるを、かく皆背き果て、齋院は、また出家して、いみじう勤行めて、紛れなく行法に染み給ひにたるなり、猶幾多の人の有様を、聞き見る中に、齋院の、深く思ふ様に、さすがに懐しきことは、他の人の、御擬似にさへも、及ばざりけるかな、女子を養育てむことよ、いと難かるべき業なりけり、宿因などいふらむものは、目に見えぬ業にて、親の心に任せ難し、生ひ立たむ間の心遣ひは、尙親の力入るべかるめり、能くこそ數多の方々に、女子なかりし宿契なりけれ、年若く思慮到らざりし間には、女子なきは、物寂しき業よ、方々に女子ども、數多見ましかば、いかに嬉しからむとぞ、歎きし折々ありし、若宮

女一宮をば、其方は注意して養育て奉り給へ、彼の母君明石、女御壺は、また年若く物の心、深く知り給ふ間ならで、かく暇なき交際を爲給へば、何事も行届くまじく、不安心き方にぞものし給ふらむ、皇女達ぞ、尙飽まで他人に點付かるまじくて、世を長閑に過ぐし給はむに、不安心かるまじき心ばせ、付けまほしき業なりける、限ありて、右様左様の後見儲くる平人は、自然それにも助けられぬるを、

など、内心は、女二宮の事に鑑みて、申し給へば、紫上は、(紫) 確乎しき様の、御後見ならずとも、世に長らへむ限りは、随分若宮を後見奉らぬやうはあらじ、と、思ふを、生命の程、如何ならむ、

とて、尙物心細げにて、かく權齋院、臈尙侍などの心に任せて、

行法をも滞りなく爲給ふを、羨ましく思ひ申し給へり、院は、(源) 尙侍に、出家の装束など、また裁ち馴れぬ間は、我より調進すべきを、袈裟などは、如何に縫ふものぞ、其方は、それ爲させ給へ、一領は花散里、君に誂へ付けむ、端麗しき法服裁ちては、うたて見る目も氣疎かるべし、餘りに氣疎くもな

く、宜き様に、その心ばえ見せて、調じ給へてよ、

など申し給ふ、紫上には、青鈍の一領を爲させ給ふ、院は、作物所の人召して、忍びて尼の御道具どもの、然るべき品々始め言はす、御裯、表筵、屏風、几帳などの事も、いと忍びて故意とがましく用意せ給ひける、

かくて、山の帝朱雀院の御賀も延引て、秋とありしを、八月は、左大將霧の御母葵、上の御忌月にて、左大將の、御賀を取持ち行

ひ給はむに、便なかるべし、九月は、朱雀院の御母弘徽殿太后の崩れ給ひにし月なれば、十月にと思し儲くるを、女三宮、甚く悩み給へば、また延引ぬ、中納言の御預りの北方女二宮落葉宮ぞ、その月には御賀を取り持ち行ひ給ひける、中納言の父君致仕太政大臣、居起ちて嚴重しく巨細に、物の清ら儀式を盡し給へりけむ、中納言も、その序にぞ、思ひ起して、出で給ひける、尙惱ましく例ならず、病着きてばかり過ぐし給ふ、女三宮も、更めて物を慎ましく、院に對しても、御氣の毒とばかり思し歎く故にやあらむ、月多く重り給ふまゝに、いと苦しげにおはしませば、院は、中納言の事につけても、心憂しと思ひ申し給ふ方こそあれ、いと可愛げに、幼少なる様して、かく悩み渡り給ふを、如何におはせむと、歎かしくて、様々に思し歎く、御

祈禱など、今年は紫上の御病氣などにつけて、紛れ多くて過ぐし給ふ、御山院朱雀院にも、女三宮の御惱の事、聞召して、可愛く戀しと思ひ申し給ふ、さて月頃、六條院には、外々にのみましまして、女三宮の御方へは、渡り給ふことも、専なきやうに、人の、山院に奏しければ、院は、如何なることにかあらむと、御胸潰れて、世の中も、今更に恨めしく思して、紫上の病惱ひける頃は、その看護におはして、宮の方へ渡り給はぬと聞召してさへ、尙生安からず思し、を、その後とても、院源氏の御心の直り難くものし給ふらむは、その頃ほひ、女三宮には、便なき事や出で來りけむ、宮自身は知り給ふ事ならねど、良からぬ御後見人どもの心にて、如何なる事件かありなむ、禁中邊などの、歌文を言ひ交すべき交際間にも、怪しからず憂き事言ひ出る類も

朱雀院消
息女三宮

聞ゆ、と、まで思し寄るも、山院は、今は小細なる俗事は、思し捨てし世なれど、尙子を思ふ道は離れ難くて、女三宮に、御文委細にてありけるを、六條院おはします間にて、見給ふ、

(朱文) 覺束なくてばかり、年月の過ぐるぞ哀なりける、惱み給ふなる様は、委しく聞きし後、念珠の序にも思ひ遣らる、御惱は、近來いか、おはします、院も渡り給はで、世の中寂しく、案外なることありとも、忍び過ぐし給へ、恨めしげなる氣色など、少許にても、見知り顔に微めかすは、いと人品後れたる業になむ、

など教へ申し給へり、院は見給ひて、いとく御氣の毒に、心苦しう、山院には、かゝる女三宮の、内々の不義じきをば、聞召すべきにはあらで、我が怠慢に、本意なくばかり聞き思すら

むことを、暫時思し續けて、宮に、

六條院勸
女三宮返
書

(源) この御返事をば、其方はいかゝ申し給ふぞ、御氣の毒なる御消息に、我こそいと迷惑けれ、其方は案外にも、恨めしく思ひ申すことありとも、我は其方に對して、疎略に人の見咎むほどのことはあらじ、と、こそ思ひ候へ、山院には、誰が申し告げたるにかあらむ、
と言ふに、宮は耻ぢらひて、背向き給へる御姿も、いと可愛げなり、甚く面瘦せて、物思ひ屈し給へる様、いと貴に美し、院は、

(源) 御父院の、其方のいと幼稚き御心はえを、見置き給ひて、甚く不安心がり申し給ふなりけり、と、思ひ合せ奉れば、今より後も、萬事に御心遣ひあれ、實はかくまでも、いかで申さ

じと思へど、我ぞ其方の御心に背く、と、院の聞召されむこと、
 安からず悒鬱きを、さりとて、院に申すべきならねば、其方
 までなりとも、申し知らせずてはありなむや、と、思ひてぞ、か
 くは申す、思慮少くして、唯他人の申し成す方にはかり、寄
 るべかるめる御心には、唯我をば、疎略に浅きとはかり思し、
 また今は我身、此上なく年更けにたる有様も、侮蔑はしく、目
 馴れてばかり見成し給ふらむも、方々に口惜しくも、慨歎た
 くも覺ゆるを、院の此世におはしまさむ間は、其方も、尙心
 收めて、彼の院の思し掟てたる様に従ひて、この老耄人をも、
 同じく院に擬ひ申して、甚くな輕蔑め給ひそ、古より、我は
 出家の本意深き、その道にも研究薄かるべき、檀齋院や、臈
 尙侍にさへ、皆思ひ後れつゝ、いと緩漫きこと多かるを、自

分の心には、何ばかりも、その道心に思ひ迷ふべきにはあら
 ねど、山院の出家ましく、今はと捨て給ひけむ世の後見
 に、其方をば我に譲り置き給へる御心はえの、哀に嬉しかり
 しを、引き續き我も、競争ひ出家して、御父院と、同じ様に、
 其方を見捨て奉らむことの、張合なく思されむに、堪忍てぞ、
 今まで本意も遂げずありし、世を捨てなば、氣の毒と思ひし
 人々の中にも、今は懸け留めらるゝ、羈絆となるべき程のも
 のも候はず、明石女御も、かくて行末は知り難けれど、御子
 達數添ひ給ふめれば、我が自身の、存生の間さへ長閑くば、別
 條なからむと見置き候ふ、其他は、誰もくあるに隨ひて、我
 と諸共に、身を捨てむも、惜しかるまじき年齢どもになり
 たるを、漸々心も清涼しく思ひ候ふ、院の御齡の、残り久し

くもおはせじ、萬一いと危篤しく、いと成り勝り給ひて、物心細げにのみ思したるに、今更に其方の案外なる御醜名、外に漏り聞えて、院の御心亂るやうのこと爲給ふな、此世はいと安し、物の數にもあらず、されども後世の御途の妨害ならむも、其方の不孝の罪は、いと恐しからむ、

など、正面に、中納言の事とは明言し給はねど、つくぐと申し續け給ふに、女三宮は、涙ばかり落ちつゝ、我にもあらず思ひ染みておはすれば、院も打泣き給ひて、さて御心の中に、昔は他人の身の上にも、戻かしく聞き思ひし、老人の差出言よ、今は吾身に代ることこそあれ、宮のいかうたての翁よ、と、面倒しく煩さく思召す御心添ふらむと、耻ぢ給ひつゝ、御硯引き寄せ給ひて、御手づから推磨り、紙取りまかなひて、父院へ

女三宮奉
獻朱雀院御
賀

の御返事、書かせ奉り給へど、女三宮は、御手も戰慄きて、え書き給はず、院は御心の中に、彼の中納言の、詳細なりし艶書の返事は、いとかうしも包まず通はし給ふらむと、想像るに、いと憎ければ、萬の愛憐も醒めぬべけれど、詞など教へつゝ、書かせ奉り給ふ、

かくて女三宮、山院の御賀奉獻り給はむことは、此月もかく御惱にて過ぎぬ、女二宮落葉の御勢特別にて、御賀奉獻り給ひけるを、女三宮の御懷妊にて、衰弱たる御身様にて、妹宮と立ち並び貌ならむも、遠慮ある心地しけり、十一月は、故桐壺帝の御忘月なり、十二月も、またいと物騒がし、それにまた女三宮は、月の累る程、この御懷妊姿の、いと見苦しく、御産後まで待見給はむを、と、思ひつれど、さりとしてさやうにばかり、延

引へきにもあらず、院は、宮に、
 (源)むづかしく物思し亂れず、清白に持て成して、この面瘦
 せ給へるを、修養ひ給へ、
 など申して、いと可愛しと、さすがに見奉り給ふ、院は、これ
 まで中納言をば、何様の事にも、由緒あるべき折節には、必故
 意に召し纏はし給ひつゝ、萬事を御談合せしを、此頃は、絶え
 て然る御消息もなし、御心には、人奇怪と思ふらむと思せど、中
 納言の、我を見むにつけては、いと、老耄しと見られむ方の、耻
 かしく、また我の中納言を見むにも、我が心の、平常ならずあ
 らむ、と、思し返されつゝ、やがて其儘、中納言の参り給はぬを
 も、咎めなし、大方の人は、中納言の、六條院へ参らぬは、自
 身も例ならず、病惱み渡りて、院にもまた方々の御惱みに、御

樂遊などなき年なればならむ、とはかり思ひ渡るを、夕霧の大
 將ぞ、心に、こは何か事情あることなるべし、彼の好事の中納
 言は、定めて彼の猫の走り出でし時、我が氣取しことには違は
 ず、彼、宮に堪忍ばれぬにやありけむ、と、思ひ寄れど、いとかく、
 判然に残りなく、彼、宮に密會奉り給ひけむとまでは、思ひ寄り
 給はざりけり、

かくて今年も、十二月になりけり、朱雀院の御賀をば、十餘
 日と定めて、六條院にて、試樂あり、舞ども練習し調へ、院の内
 動揺りて、習ひ騒ぐ、紫、上は、また二條院より渡り給はざりけ
 るを、この試樂によりてぞ、え鎮め果てずして、久々にて、六
 條院へ渡り給へる、明石、女御も、恰もこの里邸におはします、女
 御の此度の御子は、また皇子にてぞおはしましたしける、この女御

朱雀院御賀
 試樂於六
 條院

皇子○後に
 匂兵部卿宮
 と申す

の御腹には、次々御子數多おはするを、院は朝夕翫弄び奉り給ふにぞ、過ぐる齡の功能、嬉しく思はれける、試樂に、鬚黒、右大臣の北方、玉葛君も渡り給へり、夕霧、左大將は、良の町花散里の御方にて、まづ内々に調樂のやうに、明暮音樂び練習し給ひければ、花散里には、院の御前の音樂は見給はず、柏木中納言を、かゝる事の折も、交際はせざらむは、いと光榮なく、物寂しかるべき、その中にも、人奇怪と傾首きぬべきことなれば、院より参り給ふべき由、御使ありけるを、中納言は、重く煩ふ由申して参らず、然るは、何處とさして苦しげなる病症にもあらざるなるを、中納言の思ふ心あるにや、と、院は氣の毒に思して、取別きて、別段に御消息遣はず、父大臣よりも、中納言に、(致)院の召すに、何とて辭退申されける、辟々しきやうに、院

六條院召
柏木中納
言

にも聞召されむを、仰山しき病氣にもあらず、助けて参り給

へ、

と勧誘し給ふに、かく院にも重ねて言へれば、困しと思ひく、参りぬ、公卿なども、また集ひ給はぬ間なりけり、院は、中納言をば、例の氣近き御簾の内に入れ給ひて、自身は、母屋の御簾下しておはします、中納言は、實にいと甚く瘦々に、顔色も蒼みて、例も誇りかに花やぎたる方は、今は弟の君達には持て消されて、いと用意あり貌に、鎮めたる様ぞ異なるを、いと、鎮めて伺候ひ給ふ様、何どかは皇女達の御傍に差並べたらむに、更に咎あるまじきを、唯女三宮、中納言の、所存の様の、いと思慮なき業こそ、いと罪許し難けれ、など、院は、御目留まれど、然りげなく、いと懐かしく會釋ひ給ひて、

柏木中納言
参二六條院

(源) その事となくて、對面もいと久しくなりにけり、月頃は、種々の病者をばかり看護ひ、心の暇なき間に、朱雀院の御賀の爲、此所にもものし給ふ女三宮の、その事奉獻り給ふべくありしを、月々澁滞ること繁くて、かく年も迫りつれば、え思ひの如くも爲あへで、唯形式の如くぞ爲候ふ、院御出家の御身におはせば、精進の御鉢參るべきを、御賀などいへば、仰山しきやうなれど、一門に生ひ出る兒童の、數多くなりけるを、御覽せさせむとて、舞など練習し始めし、その舞の事をなりとも、爲渡さむとて、拍子調へむこと、其方を置きては、また誰にかは頼まむと、思ひ廻らし兼ねてぞ、月頃訪問ひものし給はぬ恨も捨て、かくは入來を請ひつるになむ、と言ふ御氣色の、裏心なきやうなるものながら、中納言は、い

と、耻かしきに、顔の色違ふらむと覺えて、御返答も、頓にえ申さず、

(栢) 月頃、紫上、女三宮と、方々に思し惱む御事、承知り歎き候ひながら、春の頃ほひより、某、例も煩ひ候ふ、亂脚氣病といふもの、身體所狭く起り煩ひ候ふて、確乎しく踏み立つること候はず、月頃に添ひて、沈淪み候ふてぞ、内裡などにも參らず、世間跡絶えたるやうにて、籠居り候ふ、さて今年、朱雀院の御齡足り給ふ年なり、他人より判然に數へ奉りて、五十の御賀奉仕るべき由、父の大臣思ひ及び申されしを、父も今は冠を掛け、車を惜まで捨てし身にて、進み奉仕らむに、着座べき所なし、實に其方は下臈なりとも、我に代りて、同じ如く、御賀奉仕りて、深き志の程を、御覽せら

冠を掛け云々○孝經に七十老致仕懸其所仕之車置諸廟とあり

れよ、と、父の催促し申さるゝことの候ひしかば、重き病を相
 助けてぞ、奉獻りて候ひし、彼の院も、今はいよく御山に
 籠り給ひて、いと幽微なる様に思し澄まして、嚴重しき御装
 儀、待ち受け奉り給はむこと、願はしくも思すまじく見奉り
 候ふを、事どもをば省がせ給ひて、靜なる御物語の、深き御
 本意叶はせ給はむぞ、勝りて候ふべき、
 と申し給へば、院は、御心に、女一宮の奉獻りし御賀の、嚴重
 しく聞きしを、致仕大臣の執成に言ひ成して、女一宮の御方様
 に言ひ成さむも、勞ありと思す、
 (源) 此度の御賀、世人は、唯かくぞ事省きたる様に、淺くも
 見るべきを、然はいへども、其方は、山院の御心を、能く心
 得てものせらるゝに、我もさればよと、いと同心に思ひ成

られ候ふ、左大將は、朝儀は、漸々成熟ふめれど、かやうの
 風流びたる舞樂の方は、元來心に染まぬにやあらむ、彼の山
 院、諸道、何事にも、心及び給はぬことは、専なき中にも、樂
 の方のことは、御心留めて、いと賢く知り調へ給へるを、御
 出家の後は、樂の方も、さこそ思し捨てたるやうなれ、閑靜
 に聞召し澄まさむこと、今も尙ぞ心遣ひせらるべき、就いて
 は、其方よ、彼の左大將と諸共に、見入れて、舞の童の用意
 心ばえ、能く加へ給へ、音樂師などいふものは、唯我が立て
 たる流式こそあれ、優美なることはなくて、いと口惜しきも
 のなり、
 など、いと懐かしく言ひ續くるを、中納言は、嬉しきものなが
 ら、何となく苦しく、慎ましくて、言寡にて、この御前を疾く

春の隣○古
今集に冬な

起ちなむと思へば、例のやうにも、詳細にも語らひ給はで、漸
 漸退り出でぬ、花散里の御方にて、夕霧、大將の、調製ひ出し給
 ふ樂人舞人の装束の事など、中納言は、またく助け行ひ加へ
 給ふ、大將の力有るべき限り、いみじく心盡し給へるに、中納
 言の、いと、精細しき心しらひ添ふも、實にこの舞樂の道には、
 中納言は、いと深き人にぞものし給ふめる、今日はかゝる試樂
 の日なれば、紫、上、明石、上など、御方々、物見給はむに、見所
 なくはあらせじ、とて、彼の御賀の當日は、舞童の装束は、赤き
 白椽の袍に、蒲陶染の下襲を着るべし、今日は麴塵に、蘇枋襲、
 樂人三十人、今日は白襲を着たり、異の方の釣殿に、續きたる
 廊を、樂所にして、築山の南の傍より、御前に出る間、仙遊霞
 といふ舞樂舞ひ遊びて、雪の唯少許散るに、春の隣近く、梅の

がら春の隣
りの近けれ
ば中垣より
ぞ花は散り
けるとあり

けしき見るかひありて、催咲みたり、廂の御簾の内に、院はお
 はしませば、紫、上の父宮、式部卿宮、鬚黒、右大臣ばかり伺候ひ
 給ひて、それより下の公卿は、簀子に故意とならぬ日の事にて、
 御饗應など、氣近き程に奉仕り成したり、右大臣の四郎君、玉葛
 左大臣の三郎君、雲井、螢兵部卿宮の孫王の君達二人は、萬歳樂を
 舞ふ、またいと小き程にて、いと可愛げなり、四人ながら、何
 れとなく高貴き家の子にて、容貌美しげに、傳き出でたる、思
 成しも尊し、また左大將の御子、典侍腹の二郎君、式部卿宮の
 御子なる、源中納言、兵衛の御子、皇聲を舞ひ、右大臣の三郎君
 玉葛、君腹、陵王を、左大將の太郎君、雁腹、落蹲を、さては太平樂、喜春
 樂など、舞樂どもをぞ、同じ御交際の君達、大人達など、舞ひ
 ける、日も暮れ行けば、御簾上げさせ給ひて、音樂の興勝るに、

逆様に○古今集にさかさまに年もゆかなむとりもあへず過ぐる齡やともにかへるとあり

院の御孫の君達の、いと美しき容貌姿にて、舞の様も、世に見えぬ手を盡して、御師どもも、各手の限を教へ申しけるにも、深き才々しさを加へて、珍らかに舞ひ給ふを、何れをもいと可愛しと思す、老い給へる公卿達は、皆感涙落し給ふ、式部卿宮も、御孫の舞を思し感じて、御鼻の色づくまで萎れさせ給ふ、主人の院も、御孫達の舞を見て、過ぐる齡に添へては、酔泣の感涙こそ、止め難き業なりけれ、院は酔紛れに、
(源) 中納言よ、心留めて含笑まるゝは、いと心耻かしよ、然りとも、老の來るは、今暫時の間ならむ、逆様に行かぬ年月よ、誰も老はえ遁れぬ業なり、
とて、中納言の方を打見遣り給ふに、中納言は、人より勝りて、眞實だち屈して、誠に心地もいと惱ましければ、いみじく愉快

きことも、目にも留まらぬ心地す、我をしも差別きて、院の空酔しつゝ、かく言ふは、戯言のやうなれど、いと胸潰れて、盃の廻り來るも、頭痛く覺ゆれば、酒をも飲まず、氣色ばかりにて、紛らはすを、院は御覽じ咎めて、中納言に、盃を持たせながら、度々御酒強ひ給へば、中納言は、不都合くて、持て煩ふ様、凡ての人に似ずをかし、かくて中納言は、心地搔き亂りて、堪へ難ければ、まだ事も終てぬに、退出で給ひぬるまゝに、いと甚く惑ひて、心の中に、例のいと仰山しき酔にもあらぬを、如何なれば、かくあるならむ、慎ましと物を思ひつるに、氣の上りぬるにやあらむ、院の前にて、いとそれほどに臆すべき心弱さとは覺えぬを、いふかひなくもありけるかな、と、自ら思ひ知らる、あはれ中納言は、かく思せど、暫時の酔の惑にもあら

柏木中納言
病惱

今はと云々
○古今集に
かりそめの
ゆきかひち
とぞ思ひこ
し今は限り
のかとでな
りけり

ざりけりな、やがて中納言は、いと甚く煩ひ給ふ、父の致仕大臣、母北方、思し騒ぎて、餘所に離居ては、いと覺束なしとて、女二宮の方におはし、を、更に父の殿に渡し奉り給ふを、女二宮の、いみじく思したる様、またいと氣の毒なり、中納言は心の中に、無事て過ぐす月日は、二宮も心長く、無當頼して、いと恨みもあらぬ御志なれば、我も行末長く、志を見せ奉らむ、と頼みしに、今はと別れ奉るべき首途にやあらむ、と思ふは、哀に悲しく、二宮の、後れて思し歎かむことの、辱きを、いみじく悲哀と思ふ、二宮の母御息所も、いといみじく歎き給ひて、中納言に、
(母君) 世の常事として、親をば尙然るものに差置き奉りて、かかる夫婦の御交情は、左ある折も、右かる節も、離れ給はぬ

こと、例の事なれ、然るを、今かく二人引き別れて、其方の平癒にもものし給ふまでも、二宮の獨過ぐし給はむが、心盡しなるべきことを、今暫時、此方にて、かくて治療を試験たまへ、

と、中納言の御傍に、御几帳ばかりを隔て、看護まつり給ふ、中納言は、心に道理よ、と、思して、
(栢) 數ならぬ身にて、及び難き御交情に、愍に、姫宮に許婚れ奉りて伺候ふ功能には、長く世に存生りて、かひなき身の分限も、少しは人と同等くなる、位官の差別をもや、御覽せらるゝところ思ひ候ひつれ、いといみじく、かゝる重き病者にさへ成り候へば、官位は暫置きて、我が深き志をなりとも、御覽じ果てられずやなり候ひなむ、と、思ひ候ふに、命留

まり難き心地にも、え行き遣るまじく思ひ候ふ、
 など、中納言も、母君も、互に泣き給ひて、中納言は、頻にも
 父の殿の方へ渡り給はねば、實母の北方、また不安心く思して、
 (實母) 中納言は、何どてか、まづ我に見えむとは思ひ給はぬ
 ぞ、我は心地も少し例ならず、心細き時は、數多ある子女の
 中に、まづ取別きて、中納言を見まほしくも、頼もしくもこ
 そ思ひ候へ、それに、かく二宮の方にのみおはして、覺束な
 きことよ、
 と恨み申し給ふも、中納言の心には、またこれもいと道理と思
 す、中納言は、人より先に生れたる嫡子なりける差別にやあら
 む、實母君、取別きて愛しきものに思ひ馴ひたるを、今に尙慈し
 きものにし給へば、心地の、かく今は限りと覺ゆる折しも、見

え奉らざらむ罪業深く、懊惱かるべし、中納言は、女二宮
 宮落葉
 に、

柏木中納言
 徒三父郎

(栢) 吾命、今はと頼みなく聞かせ給はゞ、いと忍びて、彼方
 へ渡り給ひて御覽せよ、必また對面賜はらむ、我は怪しく、緩
 慢く愚昧なる性質にて、事に觸れては、疎略に思さるゝこと
 ありつらむこそ、後悔しく候へ、かゝる短き命の程を知らで、
 行末長くばかり思ひ候ひけることよ、
 と申して、泣くく我父致仕、大臣の大殿の方へ渡り給ひぬ、落
 葉宮は、跡に留まり給ひて、言ふ方なく思し焦れたり、大殿に
 ては、待ち請け申し給ひて、萬事に騒ぎ給ふ、然るは、中納言
 の、忽ちに仰山しき御心地にもあらず、月頃食物などを更に參
 らざりけるに、今はいと果敢なき柑子などをさへ、口に觸れ

給はず、唯漸々物に引き入る、やうに、日増に衰弱りて見え給ふ、これほどの當時の有識の、かく哀にもものし給へば、世の中、惜み可憎しがりて、御見舞に参り給はぬ人なし、内裡よりも、山院よりも、御見舞屢申しつゝ、御雙方とも、いみじく惜しみ思召したるにつけても、いとゞしき御兩親達の御心ばかり昏れ惑ふ、六條院にも、いと口惜しき業なり、と、思し驚きて、御見舞に、度々懇切に、父大臣へも申し給ふ、夕霧大將は、況していと善き御交情なれば、氣近く御見舞にもものし給ひつゝ、いみじく歎き歩き給ふ、朱雀院の御賀は、廿五日になり、にけり、かゝる時の尊き公卿の、かく重く煩ひ給ふに、兩親兄弟、數多の人々、然る貴き御交際の歎き、萎れ給へる頃ほひぞ、物不用じきやうなれど、御賀は、これまで月々に障り滞りつることさへあ

摩訶毘盧遮那
○大東經
なり

るを、中納言の病氣とて、さて中止まじきことなれば、この御賀、いかでかは思し止まらむ、主人として執持ち行ひ給ふ女三宮の、御心の中をぞ、院は、いと氣の毒に思ひ申させ給ふ、五十の御賀について、例の五十寺の御誦經、また、彼の朱雀院のおはします仁和寺にも、摩訶毘盧遮那の御誦經ぞありける、

○若菜下

新編紫史卷六終

三百五十四

